

(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告第149集
一級河川中川小規模河川改修工事
に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

上戸塚正上寺遺跡

1993

群馬県教育委員会
財団法人 群馬県埋蔵文化財調査事業団

(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告第149集
一級河川中川小規模河川改修工事
に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

上戸塚正上寺遺跡

1993

群馬県教育委員会
財団法人 群馬県埋蔵文化財調査事業団

序

藤岡市南部の庚申山にほど近い寺山付近を水源とし、市内を南西から北東へ流れ、温井川に合流する小規模河川中川流域の上戸塚地区において、河川改修工事が実施されることになりました。

工事区域内に埋蔵文化財が分布していることから試掘調査を経て、関係機関が協議を行い当事業団に発掘調査が委託されました。

平成4年1月から6月に発掘調査を行いました。当初予想した以上の遺構・遺物が発見され、また大雨により遺跡地が冠水し調査が難行したため、調査機関の延長を余儀なくされ、関係機関に迷惑をかけました。しかし、古墳時代前期の方形周溝墓、溝、旧河道等が調査され、この地域の歴史を解明する上で貴重な資料を得ることができました。

事業の事情により発掘調査と平行して、平成4年4月より報告書刊行のための整理事業を始めましたが、調査期間の延長にもかかわらず整理事業は順調に進みそれが完了しましたので、ここに「上戸塚正上寺遺跡」の調査報告書を刊行することにしました。

発掘調査から報告書作成に至るまで、群馬県土木部河川課、藤岡土木事務所、群馬県教育委員会、藤岡市教育委員会、地元関係者の方々から種々、ご指導、ご協力を賜りました。今回、報告書を上梓するに際し、これら関係者の皆様にお心より感謝の意を表し、併せて本報告書が群馬県の歴史を解明する上で、広く活用されることを願い序とします。

平成5年3月

財団法人 群馬県埋蔵文化財調査事業団

理事長 小寺弘之

例 言

- 1 本書は一級河川^{ニカホウ}中川の規模改修工事に伴う、「上戸塚^{カミトウサカ}正上寺遺跡」の発掘調査報告書である。
- 2 遺跡の所在地は群馬県藤岡市大字上戸塚字正上寺194～196・204・205・208～210・219・210である。
- 3 事業主体 群馬県（土木部河川課） 工事担当 藤岡土木事務所
- 4 調査主体 財団法人 群馬県埋蔵文化財調査事業団
- 5 調査期間 平成4年1月6日～平成4年6月30日
- 6 調査組織 事務担当 遠見長雄・松本浩一・佐藤 勉・神保祐史・岩九大作・市隆之・国定 均・須田朋子・吉田有光・柳岡良宏・船津 茂
調査担当 下城 正・桜岡正信・石守 見・磯貝明子・斉藤英敏
- 7 整理主体 財団法人 群馬県埋蔵文化財調査事業団
- 8 整理組織 事務担当 遠見長雄・近藤 功・佐藤 勉・神保祐史・斉藤俊一・市隆之・国定 均・笠原秀樹・須田朋子・柳岡良宏・船津 茂・高橋定義・松下 登・並木綾子・今井もと子・角田みづほ・松井美智代・塩浦ひろみ
整理担当 下城 正・今井サチ子・篠原富子・山崎由紀枝・南雲富子・矢島三枝子・矢野純子・大嶋 緑
遺物写真 佐藤元彦
保存処理 関 邦一・渡邊静治・小村浩一・土橋まり子
木器実測 鈴木加津枝・高橋真樹子・五十嵐由美子・小池 緑・伊東博子
- 9 本書の編集執筆は下城 正が行った。
- 10 石材の鑑定については飯高静男（群馬地質研究会所属）氏に依頼した。
- 11 本遺跡の調査中に遺跡内の地質とテフラの分析と花粉分析を、株式会社古環境研究所に依頼した。また、本遺跡の整理中に本遺跡の出土材樹種同定と大型植物遺体の分析を、株式会社パレオ・ラボに依頼した。分析結果については巻末に掲載した。
- 12 本遺跡の調査にあたって、藤岡市教育委員会ならびに地元関係者に多大なる御支援を戴いた。ここに感謝の意を表す次第である。
- 13 調査資料は一括して、群馬県埋蔵文化財調査センターに保管してある。

凡 例

- 1 本書に使用した方位は座標北を示す。（国家座標第Ⅳ系）
- 2 本書に掲載した地形図は国土地理院1：50,000・1：25,000地形図と藤岡市都市計画図1：2,500を使用した。
- 3 本書に掲載した遺構図や遺物図の縮尺率については、縮尺率とともにスケールを付した。
- 4 出土遺物については、土器類にPを、石器類にSを、木器類にWを、金属器類にMをそれぞれ付して、種類別に通し番号を付した。
- 5 土層および土器類の色調については原則として、農林水産省農林水産技術会議事務局監修（財）日本色彩研究所 色票監修 「新版 標準土色帖」昭和45年 を使用した。

目 次

序		第3節 古墳時代の遺構と遺物	19
例 言		1 住居跡	19
凡 例		2 周溝墓	19
第1章 調査に至る経過	1	3 古墳	26
第2章 調査の方法と経過	2	4 溝	26
第1節 調査の方法	2	5 土坑	48
第2節 調査の経過	2	第4節 奈良・平安時代の遺構と遺物	48
第3章 遺跡の位置と環境	4	1 水田址	48
第1節 位 置	4	2 溝	51
第2節 地理的環境	4	第5節 中・近世の遺構と遺物	56
第3節 歴史的環境	5	1 掘立柱建物	56
第4章 標準土層	8	2 溝	60
第5章 遺構と遺物	10	3 土坑	63
第1節 遺跡の概要	10	4 耕作痕	63
第2節 旧石器～弥生時代の遺構と遺物	10	第6章 まとめ	74
1 旧石器時代	10	遺物観察表	
2 縄文時代	13	自然科学分析	
1区3面旧河道	13	I 上戸塚正上寺遺跡の地質とテフラ	
土坑	16	II 上戸塚正上寺遺跡の花粉分析	
3 弥生時代	18	III 上戸塚正上寺遺跡の植物珪酸体分析	
		IV 上戸塚正上寺遺跡の出土材樹種同定 および大型植物遺体分析	

挿 図 目 次

第1図	上戸塚正上寺遺跡位置図	1
第2図	湖北区およびグリット設定図	3
第3図	扇岡台地と周辺の地形区分図	4
第4図	周辺遺跡分布図	6
第5図	上戸塚正上寺遺跡標準土層	8
第6図	旧石器～弥生時代遺構全体図	11
第7図	1区3面田河道	12
第8図	1区3面田河道土層図	13
第9図	3区15・5区1号土坑	13
第10図	1区3面田河道出土遺物(1)	14
第11図	1区3面田河道出土遺物(2)	15
第12図	グリット出土遺物(1)	16
第13図	グリット出土遺物(2)	17
第14図	グリット出土遺物(3)	18
第15図	古墳時代遺構全体図	20
第16図	3区1号住居跡	21
第17図	3区1・2号住居跡出土遺物	21
第18図	3区2号住居跡	22
第19図	4区1号周溝墓	23
第20図	4区2号周溝墓	24
第21図	4区1・2号周溝墓出土遺物	25
第22図	3区1号墳	27
第23図	3区1号墳出土遺物(1)	28
第24図	3区1号墳出土遺物(2)	29
第25図	1区2面2・3・4号溝	30
第26図	1区2面2・3・4号溝土層図	31
第27図	2区2面1～3・5号溝およびグリット出土遺物	32
第28図	2区2面1・5・6・7号溝2区1～10号溝	33-34
第29図	2区2面1・5・6・7号土層図	35
第30図	2区1～10号溝土層図	36
第31図	1区2面1～7号溝2区1～10号溝遺物出土位置図	37
第32図	1・2区7号溝出土遺物(1)	38
第33図	1・2区7号溝出土遺物(2)	39

第34図	1・2区7号溝出土遺物(3)	40
第35図	1・2区7号溝出土遺物(4)	41
第36図	1区7号・2区6号溝出土遺物	42
第37図	1区2面7号溝出土遺物	43
第38図	1区2面2号溝出土遺物	44
第39図	4区2～8号溝	45
第40図	2区1号・3区16-18号・4区1～4号土坑	47
第41図	奈良・平安時代遺構全体図	49
第42図	1区1面As-B軽石下木田面	50
第43図	5区As-B軽石下木田面	51
第44図	3区3・4号溝	52
第45図	3区5・6号溝および3区5-9号溝土層図	53
第46図	3区7・8・9号溝	54
第47図	3区6・7号溝およびグリット出土遺物	55
第48図	中・近世遺構全体図	59
第49図	1区1号掘立柱建物跡	60
第50図	3区柱穴(1)	61
第51図	3区柱穴(2)	62
第52図	柱穴のある柱穴	63
第53図	柱穴およびグリット出土の銭貨	63
第54図	3区1号溝	64
第55図	3区2号溝	65
第56図	4区1号溝	66
第57図	柱穴・土坑およびグリット出土遺物	66
第58図	3区1～6号土坑	67
第59図	3区7-11号土坑	68
第60図	3区7・10号土坑およびグリット出土遺物	69
第61図	3区12-14号土坑	70
第62図	3区12号土坑出土遺物	70
第63図	3区耕作痕	71
第64図	3区耕作痕断面図	72
第65図	4区耕作痕	73

写真図版目次

図版1-1	遺跡全景(北より空中写真)
図版2	遺跡全景(上空より空中写真)
図版3-1	遺跡全景(中川下流部方向の北より)
-2	遺跡全景(中川上流部方向の南より空中写真)
図版4-1	1区1面の遺構確認作業(北より)
-2	1区1面の検出作業(北より)
図版5-1	1区3面検出作業(北より)
-2	1区2面の7号溝検出作業(南より)
-3	3区柱穴群検出作業(南より)
-4	4区遺構検出作業(南より)
-5	1区土層部基本土層(西より)
-6	3区ローム台地基本土層(東より)
-7	4区ローム台地基本土層(東より)
-8	6区低地部基本土層(南より)
図版6-1	1区3面田河道全景(上空より)
-2	1区3面田河道自然木出土状態(北より)
図版7-1	1区3面田河道自然木出土状態(南より)
-2	旧河道北壁土層断面(南より)
-3	旧河道東壁土層断面(西より)
-4	3区15号土坑(北より)
-5	5区1号土坑(北より)
図版8-1	3区1号住居跡(北より)
-2	3区2号住居跡(西より)

図版9-1	3区北平と4・5区全景(上空より)
-2	4区1号周溝墓(西より)
図版10-1	2号周溝墓(南西より)
-2	1号周溝墓遺物出土状態(東より)
-3	2号周溝墓遺物出土状態(南より)
-4	1号周溝墓土層断面(西より)
-5	2号周溝墓土層断面(西より)
図版11-1	3区1号墳(掘石層部北壁、南東より)
-2	3区1号墳(中央右に墳丘の痕跡が見える。北東より)
図版12-1	3区2面1-7号溝(上空より)
-2	3区2面1号溝(南西より)
図版13-1	1区2面2-4号溝(西より)
-2	1区2面2-4号溝東平土層断面(東より)
-3	1区2面2-4号溝西端土層断面(東より)
-4	1区2面2号溝遺物出土状態(東より)
-5	1区2面2号溝遺物出土状態(南より)
図版14-1	1区2面7号溝(西より)
-2	1区2面5・6号溝(東より)
-3	1区2面7号溝火切り白土状態(南より)
-4	1区2面7号溝遺物出土状態(南より)
-5	1区2面7号溝遺物出土状態(南西より)
図版15-1	2区1-10号溝(北より)

- 2 2区1・2号溝 (南より)
- 3 2区3-10号溝土層断面 (南より)
- 4 2区3・4号溝断面 (北東より)
- 5 2区7号溝遺物出土状態 (南東より)
- 図版16-1 4区2-5号溝 (東より)
- 2 4区5・6号溝 (南東より)
- 3 4区7・8号溝 (東より)
- 4 4区4号溝断面 (西より)
- 5 4区3・4号溝5号土坑土層断面 (東より)
- 図版17-1 2区1号土坑 (南より)
- 2 2区1号土坑土層断面 (南東より)
- 3 3区16号土坑 (南より)
- 4 3区17・18号土坑 (北より)
- 5 4区1号土坑 (北より)
- 6 4区1号土坑土層断面 (南より)
- 7 4区2-4号土坑 (南より)
- 8 4区5号土坑 (北より)
- 図版18-1 1区1面北半A、-B軽石下水田面 (北より)
- 2 1区1面北半低湿地面 (南より)
- 3 1区1面南半微高地面 (南より)
- 4 1区1面低湿地面の凸凹 (東より)
- 5 5区A、-B軽石下水田面 (北より)
- 図版19-1 3区3・4号溝 (東より)
- 2 3区5号溝 (西より)
- 3 3区6号溝 (西より)
- 4 3区7-9号溝 (北西より)
- 5 3区3号溝土層断面 (東より)
- 図版20-1 1区1号掘立柱建物跡 (西より)
- 2 3区柱穴群 (上空より)
- 図版21-1 D-26グリット周辺の柱穴群 (南より)
- 2 E-27グリット周辺の柱穴群 (南より)
- 3 方形の柱穴 (北より)
- 4 円形の柱穴 (東より)
- 5 くり石のある柱穴 (東より)
- 6 くり石のある柱穴 (東より)
- 7 柱穴土層断面 (東より)
- 8 柱穴土層断面 (東より)
- 図版22-1 3区1号溝 (南より)
- 2 3区2号溝 (東より)
- 3 3区2号溝土層断面 (東より)
- 図版23-1 3区1号土坑 (南より)

- 2 3区2号土坑 (南より)
- 3 3区3号土坑 (東より)
- 4 3区4号土坑 (東より)
- 5 3区5号土坑 (東より)
- 6 3区6号土坑 (東より)
- 7 3区7号土坑 (南より)
- 8 3区8号土坑 (東より)
- 図版24-1 3区9号土坑 (南より)
- 2 3区9号土坑土層断面 (南より)
- 3 3区10号土坑 (南より)
- 4 3区10号土坑土層断面 (南より)
- 5 3区11号土坑 (東より)
- 6 3区11号土坑土層断面 (西より)
- 7 3区12号土坑 (東より)
- 8 3区13号土坑 (南より)
- 図版25-1 3区耕作痕 (南より)
- 2 4区耕作痕 (南より)
- 3 4区耕作痕 (東より)
- 図版26-1 1区3面旧河道出土遺物 (1)
- 図版27-1 1区3面旧河道出土遺物 (2)
- 図版28-1 縄文時代のグリット出土遺物 (1)
- 図版29-1 縄文時代のグリット出土遺物 (2)
- 2 3区1・2号住居跡出土遺物
- 図版30-1 4区2号周溝墓出土遺物
- 2 4区1号周溝墓出土遺物 (1)
- 図版31-1 4区1・2号周溝墓の2重口輪蓋
- 2 4区1号周溝墓出土遺物 (2)
- 図版32-1 3区1号墳出土遺物
- 図版33-1 1区2面1-3・5号溝および古墳時代のグリット出土遺物
- 図版34-1 1区2面・2区7号溝出土遺物 (1)
- 図版35-1 1区2面・2区7号溝出土遺物 (2)
- 図版36-1 1区2面・2区7号溝出土遺物 (3)
- 図版37-1 1区2面・2区7号溝出土遺物 (4)
- 図版38-1 1区2面・2区7号溝出土遺物 (5)
- 図版39-1 1区2面2・7号溝出土遺物
- 図版40-1 平安時代の出土遺物
- 2 中・近世の出土遺物 (1)
- 図版41-1 中・近世の出土遺物 (2)
- 2 中・近世の出土遺物 (3)

表 目 次

柱穴規模集計表 56-58

文 中 写 真

7号溝より出土した土器群 (一部) 7
 1区上層のテフラ確認地点 (D-20) 9
 3区ローム層中のテフラ確認地点 (C-26) 9
 1区3面旧河道より出土したコナラ節の太木 (北東より) 16

第1章 調査に至る経過

本遺跡はJ R八高線藤岡駅の東約800mの、藤岡市上戸塚地区内に位置している。

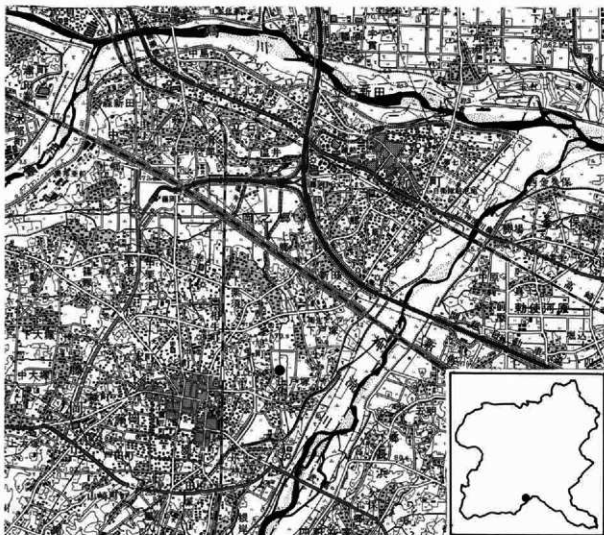
本遺跡の調査は一級河川「中川」に対する小規模河川改修工事に伴う、事前の埋蔵文化財調査であり、中川は藤岡市寺山近辺に端を発し、藤岡台地東縁を北流し台地北縁で温井川と合流する、利根川を幹川とする第3次支川である。本遺跡は流程約7kmの中川の中流域にあり、畠地と田圃の接する地点に位置している。

群馬県は中川に対する小規模河川改修のうち、調査地点から下流約800mの産業道路藤岡・新町級ま

での間の改修事業を実施することとなり、平成2年度に群馬県河川課・同藤岡土木事務所・同教育委員会の間で事前の協議が実施された。

この中で、県教育委員会は平成2年6月に当該地区の埋蔵文化財に対する分布調査ならびに試掘調査を行い、大字上戸塚字正上寺地内において台地部で堅穴住居、低地部でAs-B軽石下の水田面の遺存が想定されたため、埋蔵文化財の事前調査を協議の上、実施することとなった。

発掘調査は県教育委員会の委託により、財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団が実施することとなり、藤岡市教育委員会の協力のもとに、平成4年1月から3月末までの期間で、対象面積2,200㎡の調査を実施することとなった。



第1図 上戸塚正上寺遺跡位置図（国土地理院1/50,000「高崎」使用）

第2章 調査の方法と経過

第1節 調査の方法

今回の調査対象区域は台地部と低地部の境を北方へ流下する中川に沿った、幅22.5m、距離186mの範囲であり、調査区やグリットの設定は対象区域に限定した設定である。今回の調査方法の概要は以下の通りである。

(1) 調査対象区域は小範囲ではあるが、中川の左右両岸に分かれ、道・水路によっても分断されているため、調査の都合上、第2図に示すとおり1～5区に分した。

(2) グリットの設定は国家座標第IX系に合せ(第2図参照)5m方眼を設定し、南西隅をグリット基点として南北軸をアルファベットで東西軸を算用数字で呼称した。

(3) 遺構名称は種別ごとに各区区内で通し番号を付した。また、1区は多面調査となったため、As-B軽石下面を第1面、As-C軽石下面を第2面、縄文時代旧河道確認面を第3面とし、遺構名称も面ごとに番号を付した。

(4) 遺構等の測量には平板測量と写真測量を併用し、1/20縮尺図を原則とした。また、BMは1区と3区の2地点に設定した。

(5) 写真撮影には35mm版と6×9インチ版カメラを使用し、モノクロームとカラーズライドフィルムでの撮影を行った。

(6) 出土遺物の取り上げに際しては完全・大破片については図化等を行ったが、小破片については覆土中として一括して取り上げた。

なお、1区で出土した自然木や種子については、遺存状態が良好で視認できたものについて図化等を行った。

(7) 本遺跡の調査では以下の科学分析を行い、分析結果を巻末に掲載した。

① 1区の埋没谷と3区のローム台地上に分布していた降下火山灰の同定。

② 1区の埋没谷に堆積していた前橋泥炭層に相当(第VII層)する土層の花粉分析。

③ 1区3面の旧河道より出土した自然木と2面2・7号溝より出土した自然木と加工木の樹種同定。

④ 上記と同一地点より出土した種子類の同定。

⑤ 2区7号溝より出土した土師器器内(P-99・100)に付着していた炭化米と想定された炭化物の同定。

第2節 調査の経過

本遺跡の調査は平成4年1月初旬より調査準備に入り、1月27日より本格的に調査を開始した。1月中旬に2区と1区北半の一部の表土を重機により掘削し、2区の遺構確認作業を実施した。

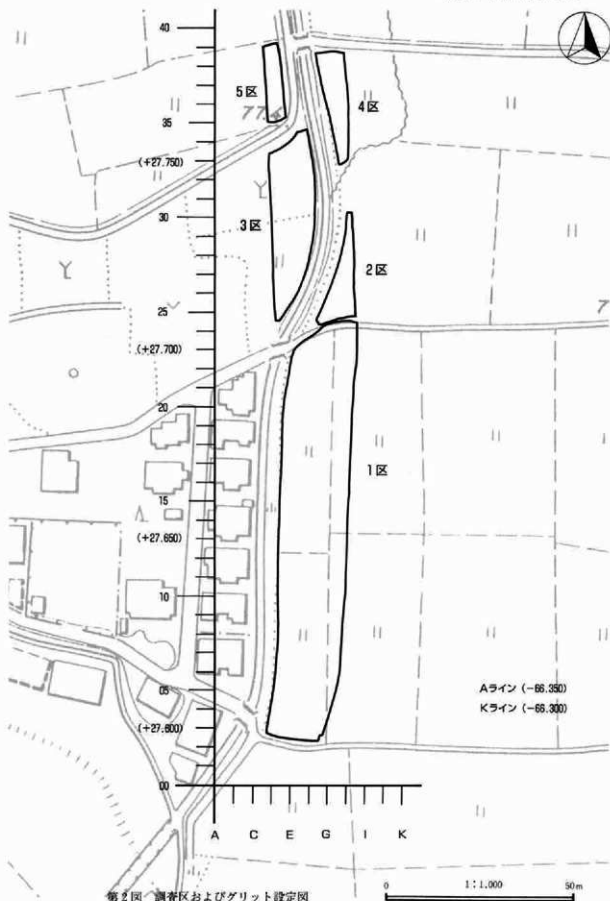
2月は初旬に1区北半全域と3～5区の表土掘削が終了し、全域の概略の遺構確認作業と2区の調査を実施した。中旬には1区北半第1面の調査を終了し、下層の試掘とボーリング調査を実施した。この結果、当初の予想を上回る遺構量が出土し、さらに1区では下層にも文化層が確認されたため、調査期間等の変更について協議を行うこととなった。下旬には4・5区の調査を行いほぼ終了した。

3月初旬からは3区を調査の主体とし、1区南半第1面の表土掘削を行った。中旬には3区の調査と併行して、1区南半第1面の調査を実施した。下旬には1区第1面までと2～5区の調査をほぼ終了し、2・4・5区については掘め戻しを行った。また、調査期間等については協議の結果、さらに翌年度に3ヶ月間延長することとなった。

4月に入り、1区北半については第2面まで、中央部については第3面までの掘削を行い、遺構確認を実施した。また、3区では旧石器時代層に対する試掘を行い、下旬に第2面の溝群の調査を開始した。

5月は引き続き第2面溝群と第3面旧河道の調査を行い、下旬に1・2区を面する市道下の拡張を行い調査を実施した。

6月は中旬に現地調査をほぼ終了し、末日までに調査区の掘め戻しと調査事務所の撤収等を行った。



第2図 調査区およびグリッド設定図

第3章 遺跡の位置と環境

第1節 位置

上戸塚正上寺遺跡はJ R 八高線藤岡駅の東約800mにあり、県西南部を流れる鳥川と神流川の合流点の南西約5 kmに位置している。

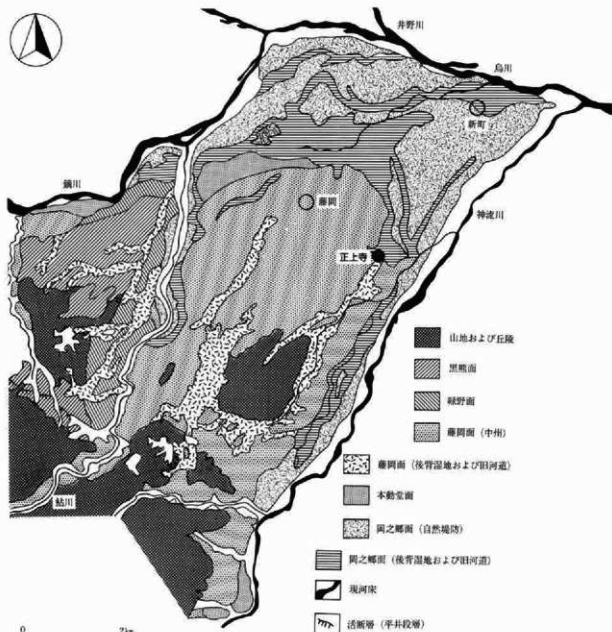
所在地は群馬県藤岡市上戸塚字正上寺194～196・204・205・208～210・219・220で、現況は台地上が畠地に低地内が田圃に利用されている。

第2節 地理的環境

藤岡市は群馬県の南端にあり、東は神流川を境として埼玉県に接している。

藤岡市は地質的には大きく3つに分けられ、南部は関東山地の北縁をなす三波石変成帯の山地地帯であり、中央部は藤岡台地と呼ばれる扇状地が広がり、北部は自然堤防の広がる沖積地となっている。

藤岡扇状地は県西部に源を持つ神流川と鮎川によって形成された扇状地で、礫層上位には「藤岡粘土層」と呼ばれている粘性の高い粘土層が堆積して



第3図 藤岡台地と周辺の地形区分図 (群馬県史通史編1を原図として作図。)

おり、瓦等の生産に利用されてきた。この粘土層中では板葺褐色軽石群や蛤良 Tn 火山灰が検出されている¹³⁾。

本遺跡地を流れる中川は現在、庚申山（標高189m）と呼ばれる独立丘陵の南縁、寺山付近に端を築き、藤岡扇状地の東縁部を南西から北東へ流下している。途中、「釜川堀」¹⁴⁾によって水流を大きく取られるが、本遺跡付近で流れをほぼ北方に変え、流程約7kmで扇状地北方に広がる沖積地帯で温井川と合流する。

本遺跡は幅約4mの小河川である中川の中流域にあり、中川によって開析された藤岡台地の東縁部で中川に沿う後背湿地との境に立地しており、標高はほぼ77mである。

第3節 歴史的環境

藤岡台地周辺では近年の開発に伴う事前調査により、多くの遺跡が発掘調査されている。また、市教育委員会の精力的な分布調査により、台地周辺や丘陵地帯で数多くの遺跡の存在が確認されている。

旧石器時代の遺跡は北山遺跡¹⁵⁾（1）、緑地地区遺跡群¹⁶⁾、株木遺跡¹⁷⁾（2）等で確認されており、台地縁部や丘陵地帯に分布する傾向にある。

縄文時代の遺跡としては縄草期～早期にかけての田島遺跡¹⁸⁾（3）が台地縁部にあり、早期～前期の遺跡は鮎川左岸に多く確認されている。中期になると中大塚遺跡¹⁹⁾（4）、西原遺跡²⁰⁾（5）、北山遺跡、株木遺跡、白石大御堂遺跡²¹⁾、薬師原遺跡²²⁾、寺前遺跡²³⁾（6）等があり、丘陵部や台地全般に分布するようになり数も増大する。後期では滝川遺跡²⁴⁾（7）、明神北遺跡²⁵⁾（8）等があり、遺跡数の減少や沖積地への進出と言った傾向が窺われる。晩期としては緑地遺跡群で土坑等が確認され、谷地遺跡²⁶⁾（9）では埋設土器が確認されている。

当地域の弥生時代の遺跡の確認例は少ないが、森泉遺跡（10）や沖中遺跡²⁷⁾（11）では弥生初期～中期の包含層や再葬墓が確認されており、いずれも沖積地にある。後期では鮎川左岸台地上に竹沼遺跡が

あり、住居址が確認されている。

古墳時代に至ると遺跡数は飛躍的に増大する。まず、前期の遺跡としては堀ノ内遺跡群²⁸⁾（12）や森泉遺跡等があり、分布は鮎川左岸が多く台地内への進出も見られる。中期としては堀ノ内遺跡群や緑地遺跡群等があり、前期からの断続性が窺えるが遺跡数は少ない。後期は遺跡数が最も多い時期で、森遺跡²⁹⁾（13）、森泉遺跡、中道遺跡³⁰⁾（14）、温井遺跡³¹⁾（15）、沖中遺跡、田島遺跡、上栗須遺跡³²⁾

（16）、株木遺跡等があり、台地や丘陵に広範囲に分布し、沖積地への進出も見られる。

また、当地域の古墳分布は神流川流域と鮎川流域の2つに大別される。

前期の古墳としては、三本木に三角縁神獣鏡等が出土した円墳³³⁾があり、小林古墳群（17）内（堀ノ内遺跡群）でも前方後方形の周溝墓が確認され、神流川流域の古墳出現期の優位性が窺われる。また、上栗須遺跡でも方形周溝墓が確認されている。

中期になると白石稲荷山古墳（墳長140mの前方後円墳）（18）や十二天塚古墳（長方墳）（19）が鮎川左岸の丘陵上に出現し、また、後期になると同期で県内最大規模を持つ七真山古墳（墳長約150mの前方後円墳）（20）があり、中・後期での鮎川流域の優位性が確立する。また、後期には神流川沿いに三本木・神田（21）、小林、野見塚（22）、戸塚（23）に古墳群が形成され、鮎川沿いには東平井（24）、西平井（25）、白石（26）、白石嶺田（27）、宗永寺（28）等の古墳群が、さらに、扇端部の上栗須・篠塚・本堂堂（29）にも古墳群が形成される³⁴⁾。

なお、藤岡台地の鳥川を挟んで北方の前橋台地上には出現期より有力な分布を示す下野野、倉賀野、穂貫、八幡原、角洲等の古墳群があり、神流川を挟んで東方の本庄台地上にも多くの小古墳群が分布している。

また、生産地としては上記の集落や古墳群を支えた水田や畠跡は確認されていないが、昭和39年に柴田常恵によって本郷墳輪室跡³⁵⁾が確認され、昭和18・19年に尾崎喜佐雄によって2基が調査されてい



第4図 周辺遺跡分布図 (国土地理院 1/50,000「高崎」使用。)(トーンは周辺の古墳群。)

る²⁰。

奈良・平安時代の遺跡としては中Ⅰ²¹ (31)、中Ⅱ²² (32)、北原²³ (33)、沖²⁴ (34)、森泉、大明神²⁵ (35)、上栗須、下大塚²⁶ (36)、寺前、株木等の遺跡があり、この内、中Ⅱ、上栗須、下大塚、株木の各遺跡では掘立柱建物群や基壇付建物が確認されている。奈良・平安時代の遺跡は数も多く、台地上に大きく展開し沖積地へも広く進出して行く。そして、小野地区遺跡群²⁷ (37)を中心とした沖積地一帯の遺跡では、As-B軽石下の水田址や溝が確

認され、桑里区画の可能性が推定されている。また、鮎川左岸の金井・下日野地区では須恵窯や瓦窯、鉦が確認されている。

中・近世では山内上杉氏の平井城が西平井にあり、関連する城郭が各地に点在する。その後、芦田氏による芦田城 (38) が築城され、城下町としての変遷をたどる。

なお、遺跡名である正上寺は明確ではないが、江戸時代にこの地に存在した寺名によるとされている。

参考文献

- (1) 『群馬県史 通史編Ⅰ』1990 群馬県
- (2) 『藤岡市遺跡詳細分布調査(Ⅰ) 一藤岡地区一』1986 藤岡市教育委員会
- (3) 『北山遺跡』1988 藤岡市教育委員会
- (4) 『F2 緑地地区遺跡群』1985 藤岡市教育委員会
- (5) 『B2 株木遺跡』1984 藤岡市教育委員会
- (6) 『田島遺跡』1987 藤岡市教育委員会
- (7) 『群馬県史 資料編Ⅰ』 群馬県
- (8) 『藤岡市遺跡詳細分布調査(Ⅱ) 一美土里地区一』1983 藤岡市教育委員会
- (9) 『白石大塚堂遺跡』1991 群馬県埋蔵文化財調査事業団
- (10) 『F9 栗原原遺跡』1985 藤岡市教育委員会
- (11) 『年報8-11』 群馬県埋蔵文化財調査事業団
- (12) 『C4 小野地区遺跡群発掘調査報告書』1982 藤岡市教育委員会

- (13) 『C11 沖Ⅱ遺跡』1985 藤岡市教育委員会
- (14) 『A1 堀ノ内遺跡群』1982 藤岡市教育委員会
- (15) 『森遺跡・中Ⅰ遺跡・中Ⅱ遺跡』 群馬県埋蔵文化財調査事業団
- (16) 『B6 中道遺跡』1987 藤岡市教育委員会
- (17) 『温井遺跡』 群馬県埋蔵文化財調査事業団
- (18) 『上栗須遺跡・中大塚遺跡・下大塚遺跡』 群馬県埋蔵文化財調査事業団
- (19) 古墳の分布については『群馬県史 資料編Ⅰ、通史編Ⅰ』や『七瀬山古墳範囲確認調査報告書』、『白石稲荷山古墳範囲確認調査報告書』や藤岡市教育委員会の遺跡詳細分布調査の報告書等を参考。
- (20) 『群馬県史 資料編Ⅲ』 群馬県



7号溝より出土した土器群 (一部)

第4章 標準土層

本遺跡の標準的な土層堆積状態は第5図に示した4地点であり、概要は以下の通りである。

I 層 灰褐色砂質土 現耕作土でAs-A軽石を含む。3区台地部では表記の土質であるが、低地部では灰色粘質土となる。また、層の厚い部分では下層に行くに従いAs-A軽石を多く含むようになり(I-2層、旧耕作土。)低地部では最下部に鉄分の沈着が見られる部分がある。

As-A軽石層 1区北半部に主に分布、黒褐色を呈しやや汚れている。1783(天明3)年に浅間火山より噴出。

II-1層 褐色砂質土 As-B軽石を少量含み、粒子細かく粘性やや高い。

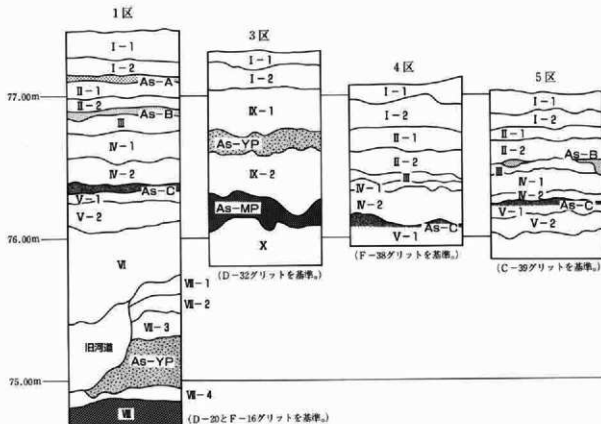
II-2層 暗褐色砂質土 As-B軽石を多量に含み、粒子粗く粘性低い。

これらの最下層には鉄分の沈着層が見られる部分があり、また、As-B軽石の含有率により、さらに分層される部分がある。

As-B軽石層 低地部のほぼ全域に分布、台地上である3区1号墳の周縁上層には二次堆積層がある。黒褐色をなしやや汚れているが、上面にピンク色の火山灰も部分的に確認され一次堆積と考えられる。

III層 黒色粘質土 水田を構成する土層で低地部全域に見られる。粒子密で粘性高く、固く締っている。

IV-1層 灰白色粘質土 低地部全域で見られ、粒子密で粘性高く、やや軟質な土層。洪水等による水成堆積と考え



第5図 上戸塚正上寺遺跡標準土層

土層。洪水等による水成堆積と考えられる。

IV-2層 黄褐色粘質土 IV-1層と同様の土質や分布を示し、成因も同じと考えられる。部分的に砂質を挟む場合がある。

As-C軽石層 低地部のほぼ全域に分布、V層の上層に含まれている。また、1区2面3号溝の低面にはピンク色の火山灰を含んだ純層が堆積していた。

V-1層 黒色粘質土 低地部の全域に分布、粒子密で粘性高く、固く締っている。

V-2層 灰色粘質土 砂粒を含み鉄分が沈着しているが、粒子密で粘性高い。

VI層 灰黄色砂質土 斑点状に鉄分が沈着。

VI-1層 灰色粘質土 斑点状に鉄分が沈着。

VI-2層 灰黒色粘質土 砂粒を含むが粘性高い。

VI-3層 明青灰色粘質土 砂粒を含み、グライ化した粘質土。

浅間-板鼻軽石層 (As-YP) ピンク色の火山灰を含んだ純層で、黄灰色を呈する。

VI-4層 明緑灰色粘質土 グライ化した粘質土。

VII層 黒色粘質土 小礫と植物遺存体を含む。前橋泥炭層に相当する。

IX-1層 明黄褐色ローム マンガンが斑点状に沈着、層をなす部分もある。粘性高く、As-YPを含む。

IX-2層 黄橙色ローム マンガンと鉄分が多量に沈着。

浅間-室田軽石層 (As-MP) 黄橙色を呈し、マンガンと鉄分が沈着。

X層 暗黄橙色ローム 鉄分が少量沈着。暗色帯に相当し、分析の結果、始良Tn火山灰が検出された。

いては科学分析を行った。分析結果は巻末に掲載しており、分析結果と標準土層との対比は以下の通りである。

標準土層	科学分析	標準土層	科学分析
I層	1層	IV-2層	6層
II-1層	2層	V-1層	7層
II-2層	3層	V-2層	8層
III層	4層	VI層	9層
IV-1層	5層		



1区上層のテフラ確認地点 (D-20)



3区ローム層中のテフラ確認地点 (C-26)

以上が本遺跡の標準土層であり、降下火山灰につ

第5章 遺構と遺物

第1節 遺跡の概要

本遺跡は藤岡台地東縁にあり中川に沿う低地帯との境に位置し、標高はほぼ77mである。

調査地点より上流の中川に沿う低地は幅約200mで、調査地点を境に下流は低地幅が約400mと広がっている。また、中川の流れも調査地点を境に流下方向を北東から北方へと変化している。

調査地点は上記の低地に向かって藤岡台地から北東方向へ延びる幅約70～30m、距離約150mの舌状台地の先端部近くに位置している。

この結果、各調査区は1区が台状台地南縁の低地であり、2区は舌状台地南縁で低地との移行部に、3区は舌状台地の中心部で、4区は舌状台地の先端部寄りであり北縁が低地への移行部で、5区は台状台地北縁で低地への移行部にそれぞれ立地している。

今回の調査では縄文時代から中・近世にいたる各種の遺構と遺物が検出された。

旧石器時代に対する試掘を3区ローム台地上で実施したが、遺構・遺物は何ら検出されなかった。

縄文時代の遺構としては3区と5区でそれぞれ1基ずつの長楕円形の土坑を検出した。また、各調査区や他時代の遺構の覆土中から、前期から晩期の土器片や石器・刺片が少量出土した。

また、1区3面では中川の埋没谷中に縄文時代の旧河道の一部を検出し、多量の自然木が出土した。また、前期から晩期の土器片や石器・刺片が少量伴出した。

弥生時代の遺構・遺物は検出されなかったが、1区北端で古墳時代の溝群の下層に、縄文時代の河道より新しくAs-C軽石降下以前の河道が断面観察され、弥生時代に相当する旧河道の存在が判明した。

古墳時代の遺構としては、後期の堅穴住居跡2軒、前期の周溝墓（一部分）2基、後期の円墳（一部分）1基、前期～後期の水路20条、土坑9基を検出した。これらの遺構からは多くの遺物が出

土したが、特に周溝墓からは底部穿孔の二段口縁壺が2個体出土し、1区7号溝からは多量の土器群とともに、火鑽板1点が出土した。

また、台地縁辺に切り回された水路群は灌漑用の水路と考えられ、水田址は検出されなかったが古墳時代に入り急速に周辺の開発が進んだものと考えられる。

奈良・平安時代の遺構としては1区と5区で畦畔等は検出されなかったが、As-B軽石下の水田址の可能性が高い面を検出した。また、溝7条（自然の凹地も含む。）も3区台地上で検出され、本時代の遺物も少量出土した。

中・近世の遺構としては1区で小規模の掘立柱建物跡1軒を検出し、3区では429本の柱穴を検出したが建物構造の解明には至らなかった。また、3区では薬研堀状の溝2条と隅九方形や隅九長方形をした土坑14基を検出した。これらの遺構は出土遺物により中世後半の時期のものと考えられる。

また、3区北半と4区では溝状やピット状をなす耕作痕が検出されたが、時期の特定できるものはなく近世以降のものとして推定された。

第2節 旧石器～弥生時代の遺構と遺物

1 旧石器時代（第6図・図版5-6・7）

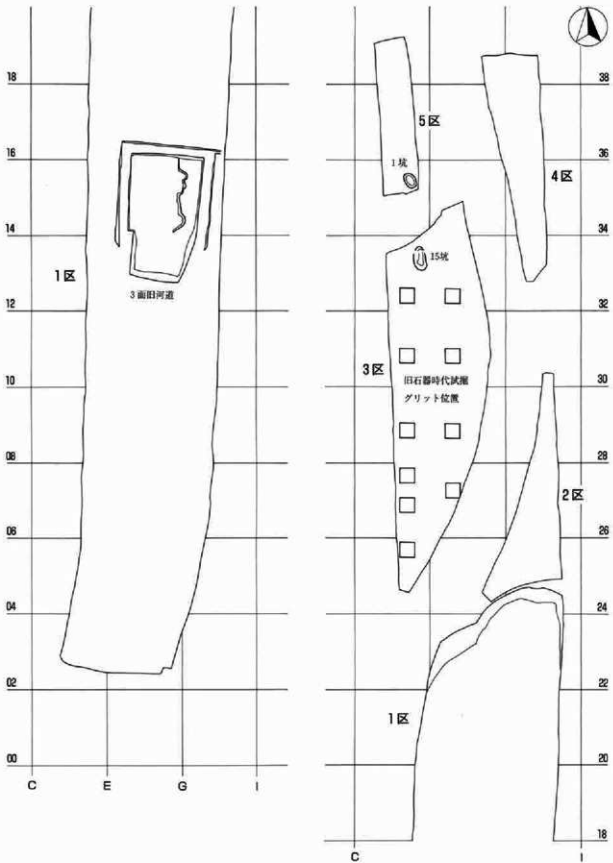
本時代に対する試掘を2m×2mの規模で3区ローム台地上で10ヶ所、4区ローム台地上で1ヶ所実施した。深さはローム上面より-1.0m～-1.5mで、これ以下は出水により調査不能となった。

この試掘の結果の限りでは、本時代の遺構・遺物は何ら検出されなかった。

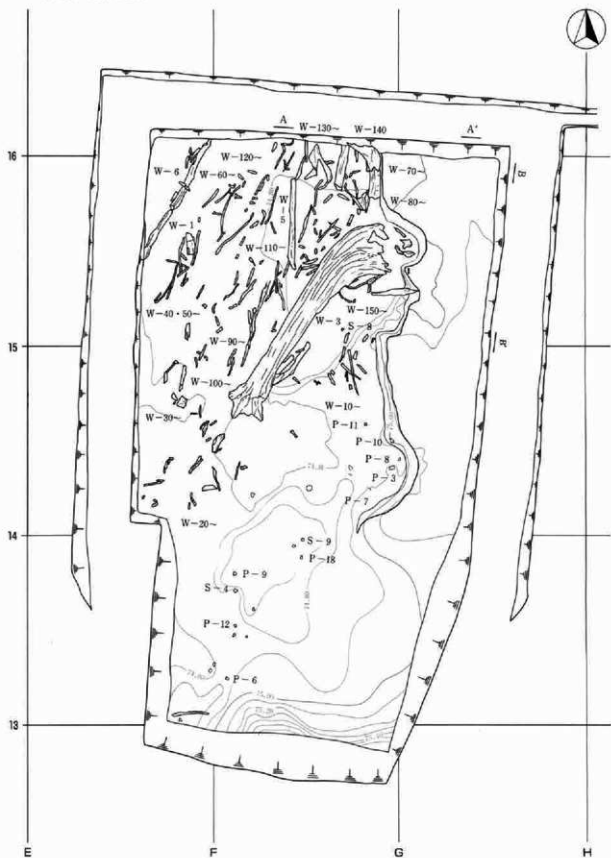
なお、この試掘により3区ローム台地上では暗色帯中にATが、暗色帯の直上にAs-BP群の一つAs-MPが、ローム層上部にAs-YPがそれぞれ検出された。

また、1区低地部でも前橋泥炭層に対比される土層やAs-YPが検出された。（降下火山灰の詳細については巻末に掲載。）

第2節 旧石器-弥生時代の遺構と遺物

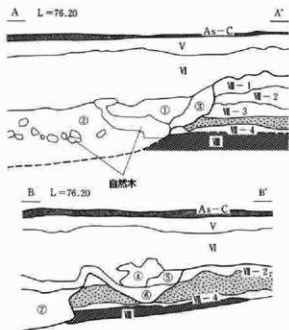


第6図 旧石器-弥生時代遺構全体図



第7图 1区3面旧河道

0 1:100 2.5m



①緑灰色土 粘土質。②灰色土 砂を含む粘土質。旧河道の自然木群を包含する層。③黄灰色土 粘土質。④黄灰色砂礫層 最大径約5cmの円礫。⑤黄灰色砂礫層 最大径約3cmの円礫。⑥灰色砂礫層 最大径2cmの円礫。⑦灰色砂礫層 最大径1cmの円礫。

0 1:60 2m

第8図 1区3面旧河道土層図

2 縄文時代

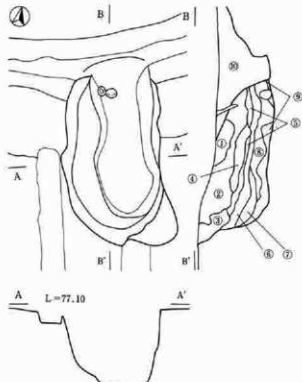
1区3面旧河道 (第7・8図 図版6・7-1-3)

1区については1面の調査が終了後、下層をトレンチ調査し、2面の古墳時代の溝群とともにさらに下層に旧河道を検出、ボーリング調査を行うとともに重機による深掘試掘を実施した。

この結果、旧河道内に自然木や種子類が検出されたため、1区中央部のE-G-13-16グリットを中心とした部分を拡張し調査を実施した。

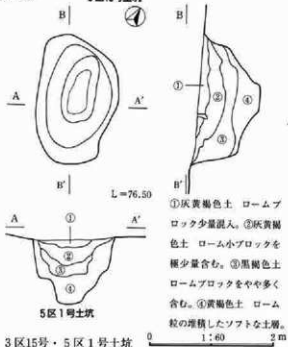
調査範囲は12m×15mで、南から北へ蛇行しながら流下する中川の旧河道右岸縁の一部を検出した。

検出面は第Ⅳ層上面から規模は不明であるが、As-YP層や前橋泥炭層に相当する第Ⅴ層を削り込んでいる。



①黒褐色土 ローム粒を極少量含む。②黒色土 ローム粒を少量含む。③褐色土 ローム粒・小ブロックをやや多く含む。④黒褐色土 ローム小ブロックを極少量含む。⑤灰黄褐色土 ローム粒・小ブロックと黒色土ブロックの混土层。⑥明黄褐色土 ロームの大小のブロックが混じり合っている。⑦灰黄褐色土 ロームブロックと黒色土ブロックの混土层。⑧黒褐色土 ローム粒・小ブロックが少量混入。⑨明黄褐色土 ローム粒の埋積したソフトな土層。⑩3区2号溝覆土。

3区15号土坑



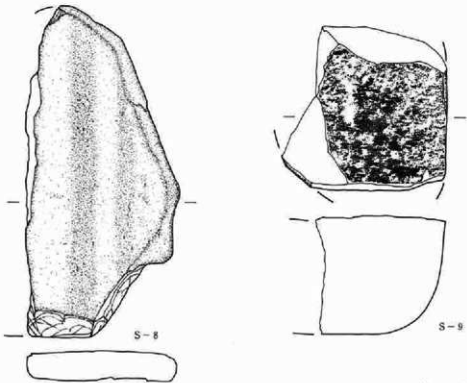
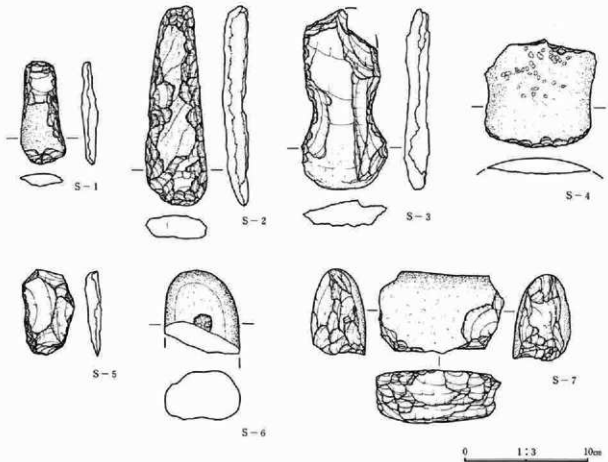
①灰黄褐色土 ロームブロック少量混入。②灰黄褐色土 ローム小ブロックを極少量含む。③黒褐色土 ロームブロックをやや多く含む。④黄褐色土 ローム粒の埋積したソフトな土層。

第9図 3区15号・5区1号土坑



第10图 1区3 圃田河道出土遺物(1)

0 1:3 30cm



第11圖 1区3面旧河道出土遺物(2)



第12図 グリット出土遺物(1)

覆土は自然木や種子等の植物遺体を多量に含んだ灰色粘質土で、底面近くは砂礫層となっていた。

自然木群は北方へ緩やかに流下する旧河道にやや斜行する状態で、ほぼ水平に横たわって出土した。

また、自然木群の中には根回り径約1.3m、長さ約6.5mのコナラ節の大木が含まれていた。また、自然木群の間からはオニグルミやトチノキ等の、多くの種子も出土した。

なお、図示した自然木群の出土状態や同定を行った自然木・種子類については、遺存状態が良好でやや大きなものを極力図示し採集を行ったものであり、微細な遺存物は遺漏している可能性が大きい。

本旧河道からの出土遺物は縄文前期～晩期に至る土器片や石器類で、後期の土器片が多いが全体の遺

物は少なく、土器片は磨滅が著しい。

本旧河道の時期は出土遺物や1区北端での新期河道との切り合い関係により、縄文時代後期～晩期に相当する可能性が高い。

土 坑

3区15号土坑 (第9図 図版7-4)

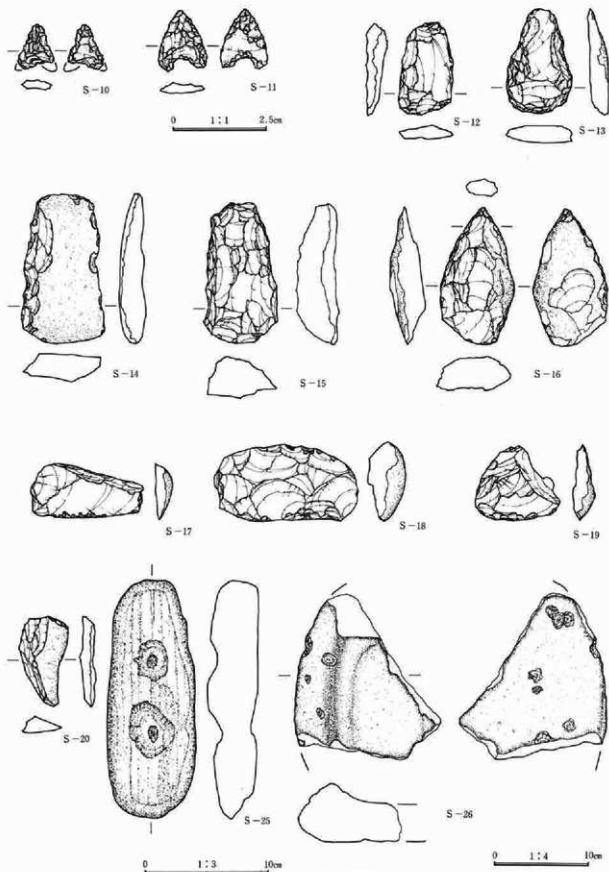
D-33グリットに位置し、舌状台地の北縁寄りにある。また、3区2号溝や耕作痕によって切られている。

平面形は不整長楕円形をなし、規模は2.70m×1.53mで深さは検出面より-1.21mである。長軸方位はN-14°-Wである。



1区3 面旧河道より出土したコナラ節の大木 (北東より)

第2節 旧石器～弥生時代の遺構と遺物



第13図 グリット出土遺物(2)

第5章 遺構と遺物

覆土は自然に埋没した状態を示し、周壁崩落によるローム質土と黒色土が交互に堆積して行った様相を示す。

遺物は出土しなかったが、周辺からは縄文前期の土器片が出土し、近接する3区2号溝の覆土から打製石斧1点が出土した。

5区1号土坑 (第9図 図版7-5)

D-3Sグリットに位置し、舌状台地の北縁にあり3区15号土坑との距離は約10mである。

平面形は不整形円形をなし、規模は2.10m×1.30mで深さは検出面より-1.12mである。長軸方位はN-23°-Wである。

覆土は自然に埋没した状態を示し、周壁崩落によるローム質土が下層に黒色土が上層に堆積していた。

遺物は出土しなかったが、周辺からは石鏃や石皿が各1点出土し、円礫が散乱していた。

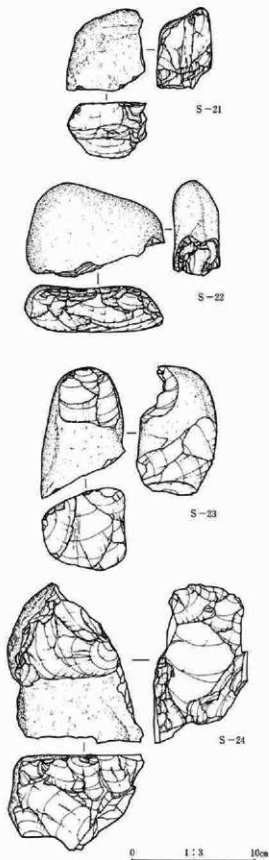
3 弥生時代

1区2面の溝群の調査終了後、幅1m、長さ12mのトレンチを1区北端中央と東壁に沿って南北に設定し、断面観察を行った。

この結果、1区3面旧河道より新しく1区2面の溝群より古く、As-C軽石降下以前の旧河道が観察された。

縄文時代の遺物が少量出土しただけで、弥生時代の遺物は出土しなかったが、降下火山灰と切り合い関係により、弥生時代に相当する新期中川の旧河道と考えられる。

本旧河道の規模等は不明であるが、調査区周辺では南西から北東へ延る舌状台地の南縁に沿って流れていたものと考えられ、1区2面で検出された古墳時代の溝群の開削に影響を与えたものと考えられる。



第14図 グリット出土遺物(3)

第3節 古墳時代の遺構と遺物

1 住居跡

3区1号住居跡(第16図 図版8-1)

D-27グリットにあり、舌状台地の中央部付近に位置している。10本の中世柱穴に切られ、3区1号墳は本住居の埋没後の築造と考えられる。

カマドと東壁付近を調査しただけであり、全体の規模等は不明である。

覆土は自然に埋没した様相を示し、検出面はローム面で上部には直接表土がのっている。

東壁の長さは3.65mで、やや小規模な住居跡と考えられる。カマドの延長を軸とした方位はN-71°-Eである。

周壁の残存高はほぼ18cmで、垂直に立ち上っている。周溝はなく、柱穴も不明である。床面は貼り床され、ほぼ水平で全体がやや固く締っていた。床面下は深さ約10cmの起伏のある掘り方を持つ。

カマドは東壁の中央部やや南に位置し、燃焼部や堀は中世柱穴に切られているため明確でなく、焼土・灰も少ない。煙道部は東壁より約90cm外部へ突出し、横断面はU字状をなしていた。

第17図に図示した遺物はカマド前の床面から出土したもので、他に土師器環・甕の細片約30点が覆土中より出土した。

本住居跡の時期は出土遺物により、鬼高Ⅱ期前半と考えられる。

3区2号住居跡(第18図 図版8-2)

E-34グリットにあり、舌状台地中央部北縁寄りに位置している。3区2号溝により中央部が大きく切られ、耕作痕にも切られている。また、東壁部分も不明である。

覆土は南北壁よりにわずかに残っているだけで、上部に直接表土がのる。

残存する規模は南北軸5.66m、東西軸5.40+αmで平面形は隅丸方形と推定される。カマドの存在が

推定される東西軸の方位はN-77°-Eである。

周壁の残存高はほぼ22cmで、ほぼ垂直に立ち上っている。周溝は西壁の一部で確認され、幅15cm、深さ10cmで断面はU字状をなす。

床面は南北壁寄りの一部で確認されただけであり、貼り床であったことが断面観察された。床面下は約5cmほど全体的に掘り込まれていたものと推定され、プラン内で検出された小ピットは掘り方の起伏と考えられる。

主柱穴はピット1~4の4本で、それぞれ南北壁より平均1.33m、西壁より1.55m内側へ位置している。ピット1は径53cm、深さ66cmで東側に径55cm、深さ36cmの補助柱穴がある。ピット2は径44cm、深さ75cmで西側に径45cm、深さ33cmの補助柱穴がある。ピット3は径42cm、深さ67cmで東側に径46cm、深さ40cmの補助柱穴がある。ピット4は径52cm、深さ65cmで補助柱穴はない。主柱穴の芯心間は東西が平均2.99m、南北が平均2.76mで、方形に近い配置である。

カマドは東壁にあったものと推定され、第17図に図示した土師器甕の付近にわずかに焼土が散布していた。

貯蔵穴と思われる隅丸方形の落ち込みが南東隅寄りにある。規模は58cm×55cm、深さは15cmで底面はやや凸凹していた。

出土遺物はP-30の1点だけで、他は出土しなかった。本住居跡の時期は鬼高Ⅰ後半と考えられる。

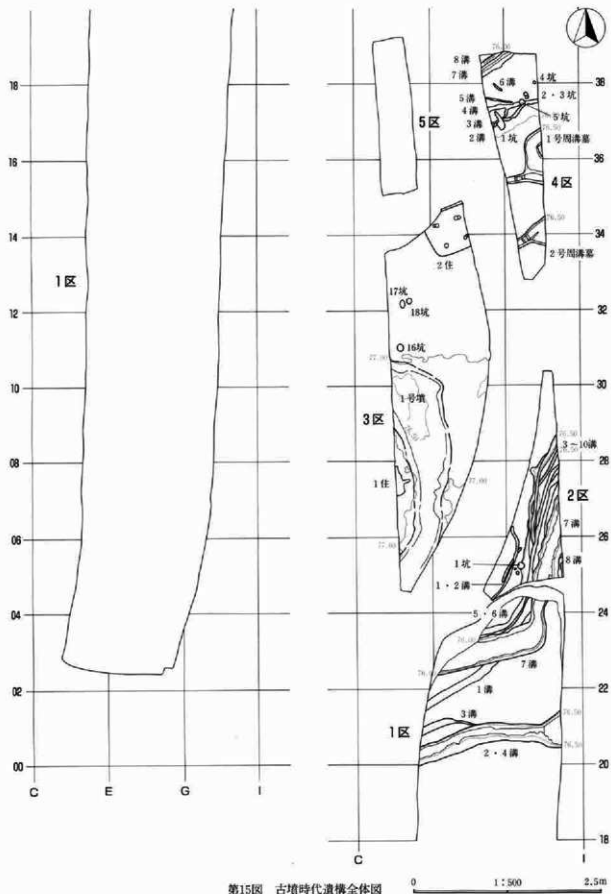
2 周溝墓

4区1号周溝墓(第19図 図版9-2・10-2)

G-35・36グリットにあり、舌状台地の先端部寄りに位置している。調査範囲は極一部であり、全体の形状・規模は明確でないが、前方後方形の周溝墓である可能性が高い。

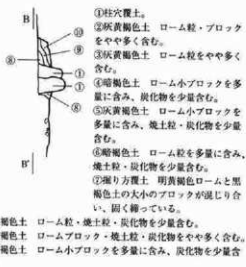
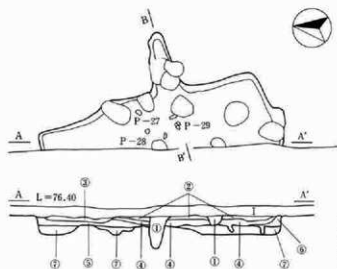
調査箇所が周溝墓のどの部分であるかは明確でないが、墳丘と周溝の一部分と墓道を検出した。

墳丘はコーナー部を検出しただけで、上部には直



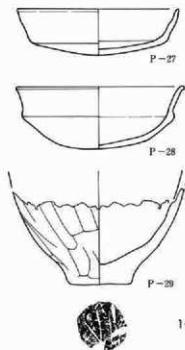
第15図 古墳時代遺構全体図

第3節 古墳時代の遺構と遺物

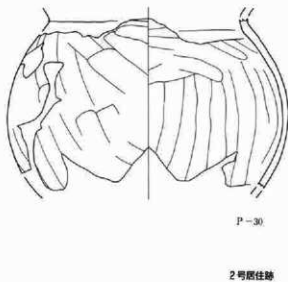


第16図 3区1号住居跡

0 1:60 2m



1号住居跡



2号住居跡

第17図 3区1・2号住居跡出土遺物

0 1:3 10cm

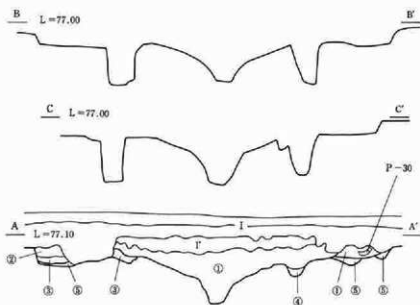
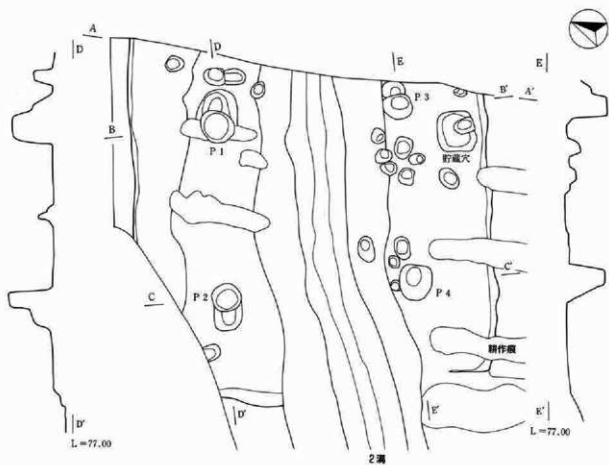
接表土がのっていた。

北辺の周溝は幅2.10m、深さ57cmで墳丘に平行して延びると推定される。コーナー部は幅1.64m、深さ62cmで緩やかに曲がる。西辺の周溝は墓道部に向って膨みを持ち、最大幅2.38m、深さ56cmで、墓道の延長線上の周溝外縁は直線的に延びている。

周溝の覆土は墳丘側からのロームブロックの流入が目立ち、墳丘に盛土があったと考えられる。

墓道は西辺周溝からはほぼ直角に西方に延び、長さ2.70m検出され、幅は1.02m～0.57mである。墓道底面は約1mの間隔において、18cmの段差を持つ2段の階段があり、周溝底面より先端部へ緩やかに立ち上って行く。また、墓道の延長上の西辺周溝底面は西辺周溝中央部底面より、18cm高くなっていた。

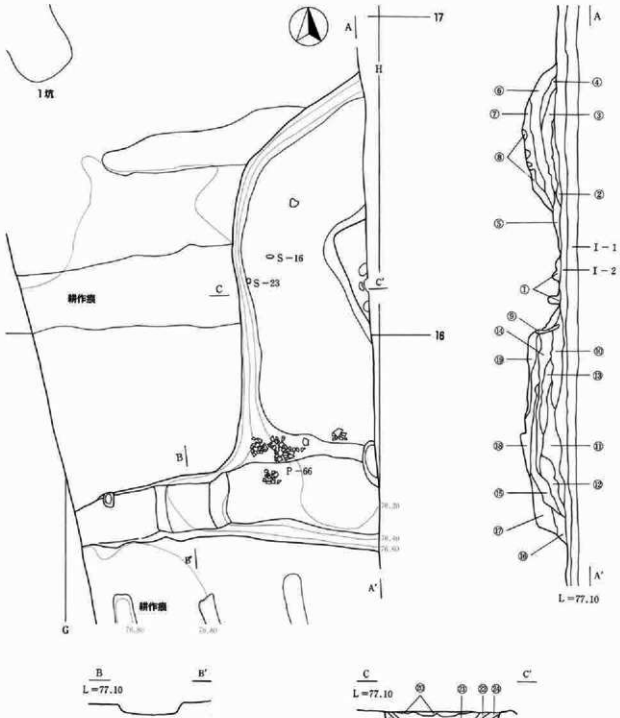
第21図P-67の二重口緑壺は墓道と西辺周溝外縁との接合部で覆土の上層から集中して出土して



①3区2号溝覆土。②灰褐色土 ローム粒を多く含む。③黒褐色土 ロームの大小のブロックを多く含む。④暗黄褐色土 ロームの大小のブロックの間に黒褐色土が混入。柱穴覆土。⑤黄褐色土 ロームと暗褐色土のブロックが混じり合い、固く締っている。掘り方覆土。

第18図 3区2号居住跡

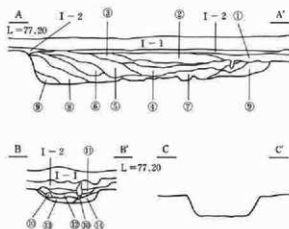
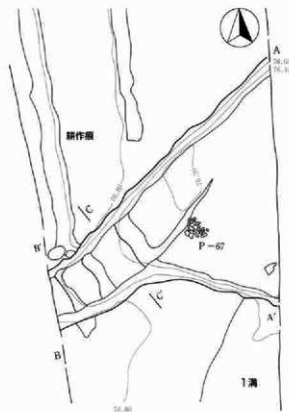
0 1:60 2m



- ①褐色土 ②黒褐色土 ローム小ブロックを少量含む。③黒色土 ローム小ブロックとAs-C軽石?を少量含む。④褐色土 ローム粒を含む。⑤褐色土 ローム小ブロックを少量含む。⑥暗黄褐色土 ローム粒をやや多く含む。⑦暗褐色土 ローム小ブロックを少量含む。⑧黄褐色ロームと黒色の混土层。⑨褐色土 ローム粒を少量含む。⑩暗黄褐色土 ローム粒を多く含む。⑪ロームと黒褐色土の混土层。⑫暗褐色土 ローム粒を少量含む。⑬ロームと黒褐色土のブロックの混土层。⑭ロームと黒褐色土・褐色土の混土层。⑮暗褐色土 ローム小ブロックを含む。⑯黄褐色ロームのブロックの混土层。⑰黄褐色ロームと黒色土のブロックの混土层。⑱ ⑳に類似。㉑黒褐色土 ㉒に類似。㉓黒色土 ローム粒を少量含む。㉔黒褐色土 ローム小ブロックを少量含む。㉕褐色土 ローム小ブロックをやや多く含む。㉖黒褐色土 ローム小ブロックを少量含む。㉗ロームと褐色土の混土层。㉘黄褐色ロームと黒色土のブロックの混土层、ロームブロックが多い。

第19図 4区1号周溝墓

0 1:60 2m



- ① 3区1号溝覆土。② 黒色土 ローム粒を少量含む。③ 黒褐色土
ローム小ブロックとAs-C軽石を少量含む。④ 暗褐色土 ローム
小ブロックをやや多く含む。⑤ 暗褐色土 ローム粒・小ブロック
をやや多く含む。⑥ 暗褐色土 ローム粒を多量に含む。⑦ 黒褐色土
ローム小ブロックを少量含む。⑧ 黄褐色ロームの大小のブロックが
混じり合っている。⑨ 黄褐色ロームと黒褐色土のブロックの混土层。
⑩ 木の根痕。⑪ 黒褐色土 ローム粒が少量混入。⑫ 暗褐色土 ローム
と黒色土の小ブロックをやや多く含む。⑬ 黄褐色土 ローム小
ブロックを多量に含む。⑭ 黄褐色ロームと黒褐色土のブロックの混土
層。

0 1:60 2m

第20図 4区2号周溝墓

り、墓道と西辺周溝との接合部の外縁に据え置かれていたものが、崩落したものと考えられる。P-68～70の土師器壺や器台は北西コーナー部の覆土中より出土した。他の遺物としては石田川期の土師器壺・台付壺・器台の小片が約50点、周溝覆土中より出土した。また、縄文時代の尖頭状石器や石核も混入して出土した。

4区2号周溝墓 (第20図 図版10-1・3・5)

G-33・34グリットにあり、舌状台地の先端部寄りに位置している。調査範囲は極一部であり、全体の形状・規模は明確でないが、前方後方形の周溝墓である可能性が高い。また、1号周溝墓との間隔は約5mで近接した位置にある。

調査箇所は前方後方形周溝墓の前方部コーナーの外縁周溝部分と、これに接続する墓道の一部と考えられる。

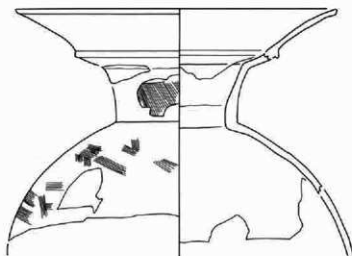
周溝外縁はほぼ60°の角度で直線的に延び三角形状をなす。検出長は3.93m、深さは-48cmである。

周溝の覆土は墳丘側からのロームブロックの流入が目立ち、墳丘は検出されないが墳丘に盛土があったと考えられる。

墓道は前方部前面の周溝の延長線上で、南西から北東へ方向、周溝内に下り込む状態で掘られている。検出された長さは1.90mで、幅は1.13m～0.94mである。墓道底面は50cm～70cmの間隔を置いて、11cm～19cmの段差を持つ3段の階段が繋がっていた。また、墓道の延長上の周溝内は他の底面より約10cm低くなっていた。

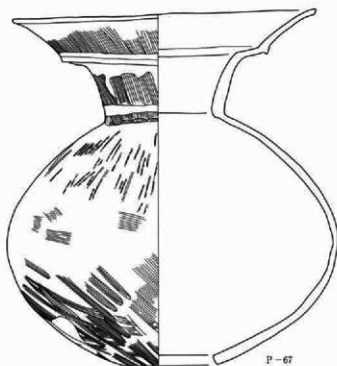
出土遺物は第21図P-66の二重口椀と縄文時代の磨石と切片各1点だけである。P-66はP-67と同様の出土状態を示し、墓道と周溝外縁の接合部寄りの覆土上層に集中して出土しており、接合部外縁に据えおかれたものが崩落したと考えられる。

4区1・2号周溝墓はともに古墳時代前期の石田川の時期である。



P-66

2号周溝墓



P-67

1号周溝墓

0 1:4 10cm



P-68



P-70



P-69

第21図 4区1・2号周溝墓出土遺物

0 1:3 10cm

3 古墳

3区1号墳（正上寺山古墳）（第22図 図版Ⅱ）

3区南半にあり舌状台地の中央部寄りに位置している。本古墳は3区1号住居跡ののち築かれており、奈良・平安時代以降の溝・柱穴・土坑等に切られている。

調査では周堀の1/4弱を検出しただけであるが、墳丘や周堀の名残りが地割りに残っている。

墳丘の名残りのある地番は「上毛古墳総覧」にある神流村第二号正上寺山古墳の地番と合致し、総覧記載の古墳であったことが判明した。

総覧によれば、墳形は円形で規模は径72尺、高さ9尺で、直刀2本と土器が出土したとある。

本調査でも周堀の検出状況から墳形は円墳と考えられ、推定される墳丘規模は径約33mである。しかし、調査範囲内では墳丘の盛土等は検出されなかった。

検出された周堀は本古墳の東側の周堀で、幅は3.60m～8.20mで、深さは-0.31m～-1.48mで北半は幅が広く深さもあり、南半は幅が狭く浅くなり南端は不鮮明となる。周堀は後世の遺構により形状が壊されており、推定される平均幅は5～6mほど考えられる。

周堀覆土の上層にはAs-B軽石の2次堆積層が分布している。また、周堀北半部の墳丘寄りの覆土上半を中心に葎石が崩落しており、葎石を持つ古墳であることが判明した。

また、周堀覆土上半からは約700点の埴輪片が出土し、重複する遺構からも約80点の埴輪片が出土した。これらの埴輪片はほとんどが細片で磨滅したものがほとんどであった。総数約780点の埴輪片の内、形状・部位等が判明し遺存状態の良い破片は156点であった。

内訳は円筒埴輪の口縁部片18点、底部片1点、凸帯付胴部片40点、円形透し付胴部片2点、線刻胴部片2点、その他胴部片77点、朝顔形埴輪片7点、形象埴輪片9点である。

これらの埴輪はやや粗い砂粒を含み、橙色を呈し

焼成がやや不良なものが約70%で、明赤褐色を呈し焼成が良好なものが約30%である。また、ハケ目は、粗く浅いものがほとんどで、外面は縦ハケだけで、内面は横ハケや斜めハケが施されナデ調整されている。

円筒埴輪の特徴として、口縁部はやや外返し端部がM字状をなすものが8点、同じくやや外返し端部が斜めの平面をなすものが8点、強く外返し端部が丸いものが2点となっている。

凸帯については低く狭いものだけで、台形をなすもの15点、M字状をなすもの11点、三角形をなすもの5点、遺存状態が不良で形状不明なもの9点となっている。

円形埴輪の大きさを示す資料は出土しなかったが、各部の特徴から小型の埴輪であったと考えられる。また、円筒埴輪の樹立密度や配列も不明であるが、極めて少量ながら朝顔形埴輪や形象埴輪（馬形埴輪？）等の埴輪も出土しており、本古墳にはこれらの埴輪の組み合わせによる埴輪樹立がなされていたと判断される。

本古墳の時期は出土した埴輪の特徴により6世紀後半と考えられる。

4 溝

1区2面1号溝（第28・29図 図版Ⅱ）

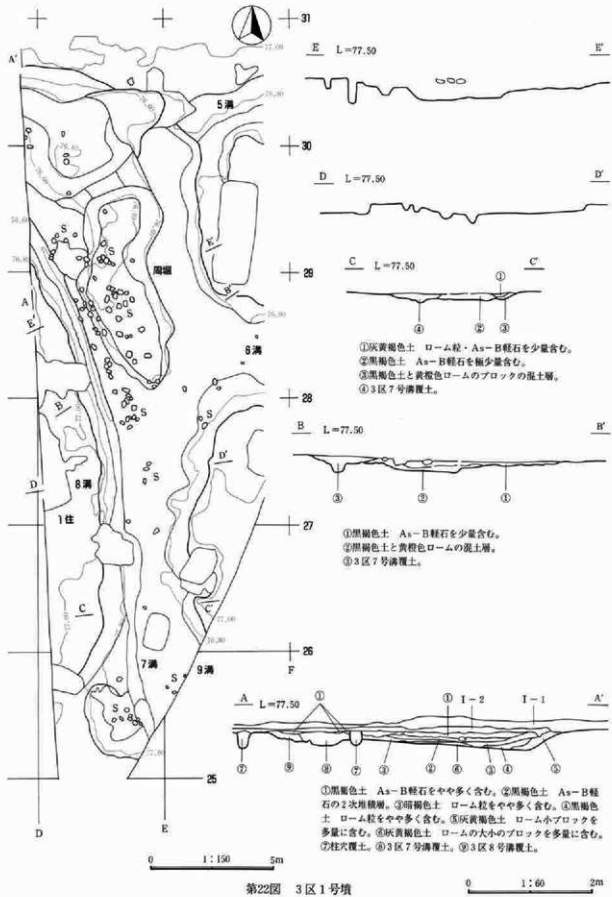
E-21～F-22グリットにかけて検出された。1区2面7号溝によって切られ、検出された長さは約9mである。

1号溝は第Ⅵ-2層上面から掘り込まれ検出されたプランは底面に近い部分であり、調査区西側の土層断面によれば溝本来の規模は、幅2.90m、深さ-62cmと比較的大きな溝であったことがわかる。断面形はU字状をなす。

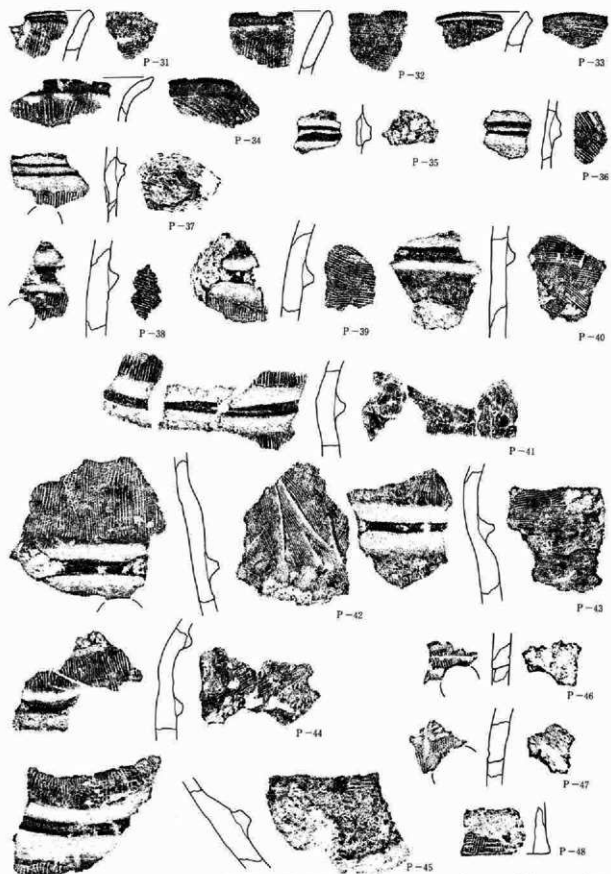
溝は南西から北東へ流下し検出範囲内で約6cmの比高差を持つ。方位は流下方向へN-60°-Eで、下流端でN-34°-Eとわずかに向きを変える。

覆土には砂層も堆積し水流の痕跡が認められ、自然に埋没して行ったものとする。

第3節 古墳時代の遺構と遺物

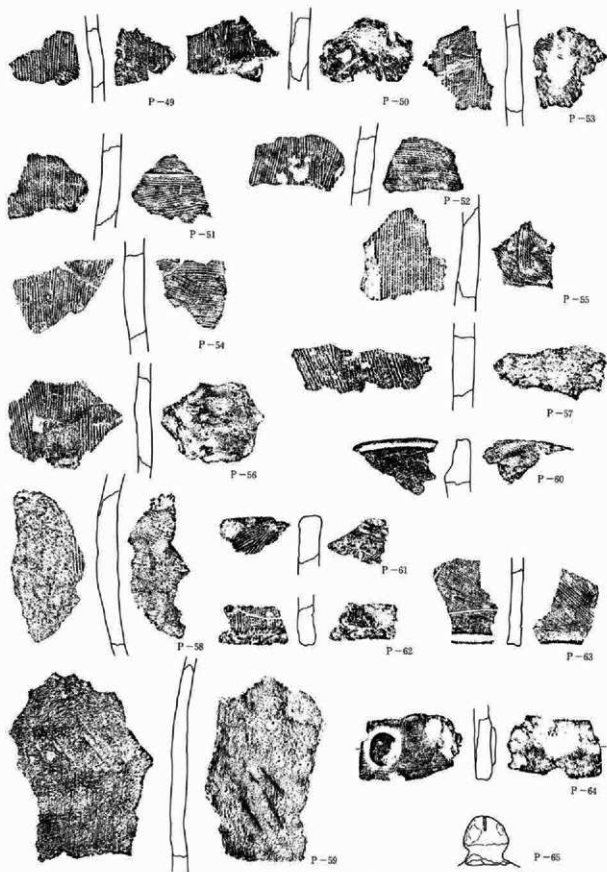


第22図 3区1号墳

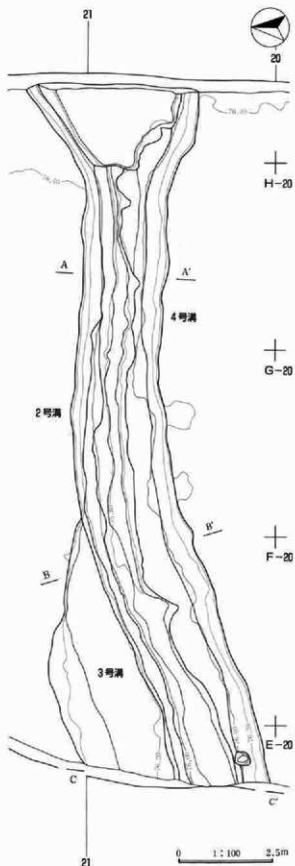


第23図 3区1号墳出土遺物(1)

0 1:3 10cm



第24図 3区1号墳出土遺物(2)



第25図 1区2面2・3・4号溝

出土遺物としては溝底面や覆土下層から土師器片や剥片が約75点出土したが、第27図P-71の高坏以外はほとんど細片である。

出土した土師器片は台付甕片が圧倒的に多く、その他小型甕片や高坏片が少量含まれていた。

溝の時期は出土遺物や切り合い関係により、石田川期後半と考えられる。

1区2面2号溝 (第25・26図 図版13)

D-20-H20グリッドにかけて検出され、3号溝より新しく4号溝より古い。検出された長さは約19mである。

2号溝は第V-1層上面より掘り込まれ、幅は2.25-2.75m、深さは-65-77cmで、断面形はやや逆台形をなし2段に落ち込んでいる。また、調査区西端では幅が3.10mと広くなり、底面も約10cm低くなっている。

調査範囲内では底面の比高差はほとんどないが、地形に沿って西から東へわずかに蛇行を繰り返しながら西から東へ流下していたと考えられ、下流方向に向かって方位はN-69°-E-N-90°-Eである。

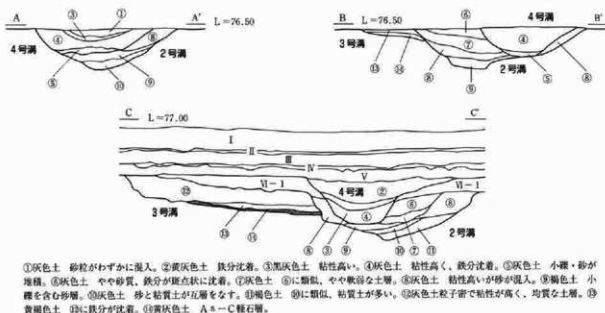
覆土下層は小礫を含む細砂層と粗砂層が互層をなし、盛んな水流の痕跡があり、上層は粘質土で埋没している。また、土層断面の観察では1度大きく改修された状況が窺える。遺物は第27図P71-73高坏や広口罎を含め約160点の土師器類が出土したが甕や台付甕片が多くほとんどが細片である。また、溝底面近くより自然木20数点とオニグルミの核1点、モモの核6点が出土し、板材(W-6)1点も出土した。また、縄文時代前期-中期の土師片や石核6点も混入していた。

2号溝は3号溝の流路をなぞっていると考えられ、時期は石田川期後半と考えられる。

1区2面3号溝 (第25・26図 図版13)

D・E-20グリッドで検出され、2・4号溝によって切られている。検出された長さは約7.5mである。

第3節 古墳時代の遺構と遺物



第26図 1区2面2・3・4号溝土層図

3号溝は第V-1層上面により掘り込まれ、検出された規模は幅3.10m、深さ-55cmで、幅はさらに広がると考えられる。

断面形は逆台形をなし、流下方向は2・4号溝とはほぼ同一と考えられる。

覆土には底面からわずかに間層を挟んで、厚さ5cmのAs-C軽石の1次堆積層があり、上層は粘質土が自然堆積していた。

遺物は第27図P-75の土師器甕や土師器細片が少量覆土中より出土した。

3号溝はAs-C軽石降下直前に掘られ、埋没後2号溝が掘り直されたものと考えられ、時期は石田川期前半と考えられる。

1区2面4号溝 (第25・26図 図版13)

プランは下流端でわずかに右岸立ち上りを検出ただけで、ほとんどが2号溝の土層断面中で検出されただけであり、2号溝の第2回目の掘り直しとも言うべき溝である。しかし、掘り込み面は第VI-1層上面からこの点が異なる。

規模は幅2.42-1.55m、深さは-72-46cmで、断面形はU字状をなす。流下方向は2号溝とはほぼ同一

である。

遺物は土師器甕や台付甕の細片が16点出土しただけであり、縄文時代後期の土器片1点も混入していた。

4号溝は出土遺物等により石田川後半の時期と考えられる。

1区2面5号溝 (第28・29図 図版14-2)

F-23-G-24グリットで検出され、6・7号溝を切っている。検出された長さは約7.30mである。

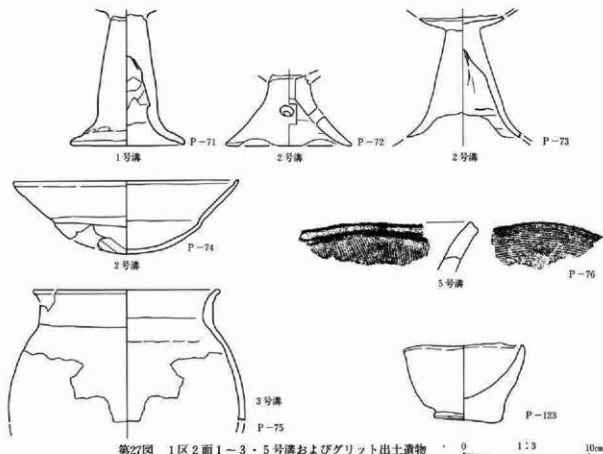
規模は幅90-50cm、深さ-33-47cmで、断面形はU字状をなす。

調査範囲内では底面の比高差はほとんどないが地形に合わせ南西から北東へ流下していたと考えられ、途中、流下方向をN-80°-EからN-31°-Eに変えている。

覆土は粘質土で自然に埋没している。また、覆土中からはP-76の円筒地輪片1点と土師器の坏や甕の細片7点が出土した。

5号溝は2区6号溝と同一である可能性が高い。また、時期は出土遺物により鬼高II期と考えられる。

第5章 遺構と遺物



第27図 1区2面1-3・5号溝およびグリット出土遺物

1区2面6号溝 (第28・29図 図版14-2)

G-23・24グリットで検出され、5・7号溝によって切られている。検出された長さは約5.80mである。

規模は幅1.04m、深さ31-37cmで、断面形はU字状をなす。

調査範囲内では底面の比高差はほとんどないが、南西から北東へ流下していたと考えられ、流下方位はN-34°-Eである。

底面近くの覆土は小礫を含む砂層となっており、水流の痕跡が認められる。

遺物は土師器の台付甍片数点と割れた円礫2点が覆土中より出土した。

6号溝は1号溝と同一である可能性が高く、2区での流路は2区7号溝によって切られたものと考えられる。

6号溝の時期は出土遺物により、1号溝と同じく石田川期後半と考えられる。

1区2面7号溝・2区7号溝 (第28-30図 図版14・15)

1区2面7号溝と2区7号溝は同一のものであり、E-22-G-23-H-26グリットで検出され、検出された長さは約30mである。

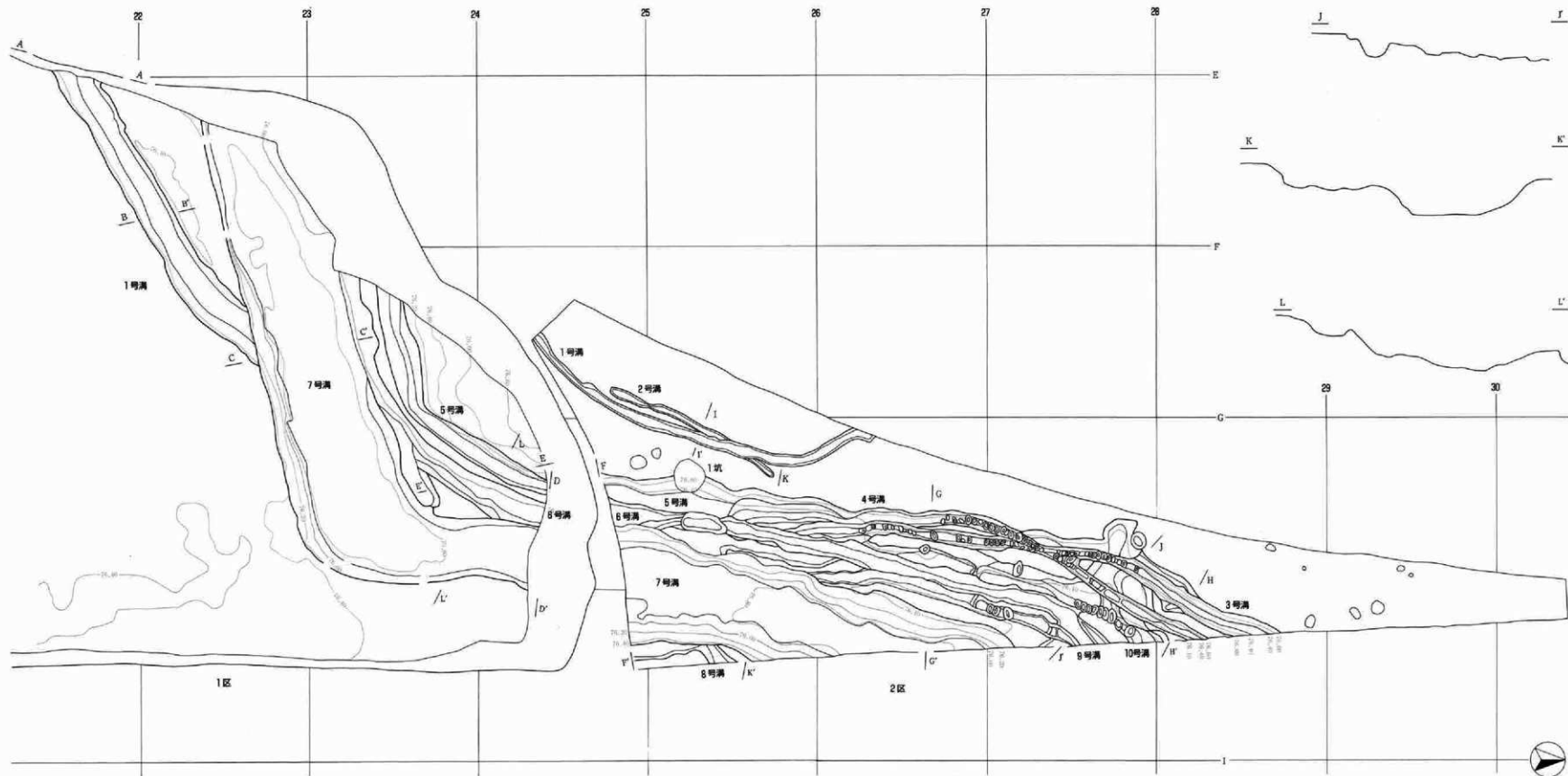
7号溝は1区では1・6号溝より新しく5号溝より古い、2区では6・8-10号溝より古い。

規模は1区では幅3.70m、深さ70cm、2区では幅4.05m、深さ75cmで断面形は逆台形をなす。

舌状台地の北縁を巡る本溝は地形に合わせ、途中で大きく屈曲して流下する。調査範囲内では底面の比高差は約10cmであるが南西から北東へ流下していたものと考えられる。流下方位は上流部の1区ではN-75°-Eで1区北端で約60度曲がり、2区ではN-16°-Eとなる。

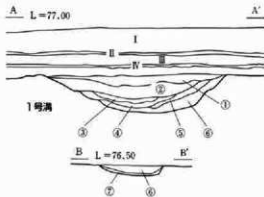
覆土は砂礫層と粘質土が互層をなし、盛んな水流があったことを窺わせる。

本溝からは多量の土師器類が出土し、その総量は



第28图 1区2面1·5·6·7号溝、2区1-10号溝

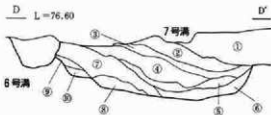
0 1:100 2.5m



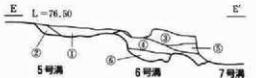
①黄灰色土 灰白色土と黄灰色土の混土层。②灰黄色土 やや砂質で下部に炭化物層が入る。③灰黄色土 ②に類似。シルト質。④灰黄色土 ②に類似。⑤黄灰色土 ①に類似。⑥黄灰色土 ブロック状に堆積。⑦黒色土 白色軽石?粒を少量含む。



①黒褐色土 砂が少量混入。②黄灰色土 砂と粘質土が互層をなして堆積。③灰色土 軽い砂と細かい砂が互層をなす。④灰色土 砂と粘質土のブロック状の混土层。⑤灰色土 粗砂・細砂・炭化物が互層をなす。⑥灰色土 ④に類似。⑦・⑧はA-A'の④・⑦と同様。



①黒色土 固く締っている。②褐色土 砂粒を含み鉄分沈着。③黒色土 砂粒を多く含む。小礫も少量混入。④灰色土 砂粒が主体で小礫も少量混入。⑤灰色土 粘質土中に砂と炭化物が少量混入。⑥黄灰色土 粘性高く、砂層を挟む。⑦灰色土 砂と炭化物が互層をなして堆積。⑧暗灰色土 均質な細砂層。⑨黄灰色土 細砂層。⑩黄灰色土 小礫を多量に含む。⑪灰色土 粘質土で最下部に砂が堆積。



①灰色土 粘性高い。②黄灰色土 砂を少量含むが粘性高い。③灰色土 均質な細砂層。④黒灰色土 砂粒を多量に含む。⑤黄灰色土 ロームブロックを少量含む。

0 1:60 2m

第29図 1区2面1・5・6・7号土層図

パン箱に2箱強であった。また、木製品や石製品、自然木、種子類も出土した。

土器器類の代表的な遺物は第32～36図に掲載してあるが、量的には甕や台付甕片が圧倒的に多く小型甕や高坏は少量となる。また、器種による出土位置の片寄りは見られない。土器器類は1区では溝の下層からの出土が目立ち、2区では上層からの出土が目立つ。

木製品としては火鍬板・農具の柄・板材等が各1点ずつ出土し、枝等の自然木が40数点出土した。また、オニグルミ・クリ・モモ・トチノキ・エゴノキ・ヒョウタンの実が30点弱出土した。これらは溝の底面近くより出土した。

また、勾玉の未製品1点や磨石状の石器等が3点覆土中より出土した。また、縄文時代の土器片や石器等も40数点覆土中に混入していた。

7号溝の時期は出土遺物や切り合い関係により、石田川期後半～和泉期初頭と考えられる。

2区1号溝(第28・30図 図版15-2)

F-24-G-26グリッドで検出され、2号溝によって切られている。検出された長さは約10.50mである。

規模は幅44～28cm、深さはほぼ10cmで断面形はU字状をなす。

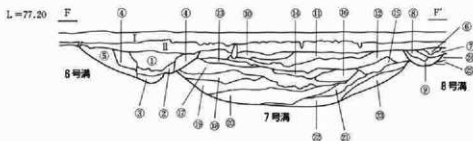
底面の比高差はわずかであるが南西から北東へ蛇行して流下するものと考えられ、調査範囲内では弧状をなす。上流部の流下方位はN-39°-Eで下流部ではN-23°-Wとなる。

覆土は粘質土が堆積し、自然に埋没した様相を示す。覆土中からは土器器の坏・甕の細片が12点出土した。

1号溝の時期は出土遺物により、鬼高Ⅱ期と考えられる。

2区2号溝(第28・30図 図版15-2)

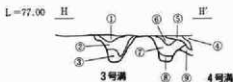
F-24-G-25グリッドで検出され、1号溝によって切られている。検出された長さは約5.30mである。



- ①褐灰色土 粘質土で細砂が極少量混入。②褐色土 ①に鉄分が沈着。③褐灰色土 ①に類似、細砂をより多く含む。④褐色土と黄褐色土のブロックの混土层。⑤黒褐色土 細砂ブロックが混入。⑥灰黄褐色土 ローム小ブロックと細砂が極少量混入。⑦黒褐色土 ローム粒と細砂が少量混入。⑧灰黄褐色土 細砂を多量に含む。⑨褐灰色土 ローム小ブロックと細砂を含む粘質土。⑩褐灰色土 細砂を少量含む粘質土。⑪灰色土 細砂ブロックを少量含む粘質土。⑫黄灰色土 細砂をやや多く含む粘質土。⑬黄灰色土 ローム粒と細砂を含む粘質土。⑭褐灰色土と黒褐色土のブロックの混土层。⑮黄灰色土 細砂ブロックを極少量含む。⑯細砂と黄褐色粘質土のブロックの混土层。⑰褐灰色土 細砂ブロックをやや多く含む粘質土。⑱黄褐色土 細砂多量。⑲褐灰色土 細砂を極少量含む粘質土。⑳粗砂と細砂が互層をなして堆積。㉑褐灰色土 細砂をやや多く含む粘質土。㉒灰色土 細砂を少量含む粘質土。㉓褐灰色粘質土と砂が互層をなして堆積。㉔灰黄褐色土 細砂を少量含む。㉕黒褐色土 細砂を少量含む。



- ①褐色土 粘質土。②褐灰色土 ローム粒を多く含む粘質土。③黒褐色土 粘性高い。④褐色土 細砂を極少量含む粘質土。⑤黄褐色土 細砂を少量含む粘質土。⑥黒褐色土 細砂を多く含む粘質土。⑦黒褐色土と黄褐色土のブロックの混土层。⑧灰黄褐色土 砂を極少量含む粘質土。⑨明褐色土 鉄分が沈着、粘質土。⑩明褐色粘質土と灰黄褐色粘質土のブロックの混土层。⑪灰黄褐色土 細砂を極少量含む粘質土。⑫褐灰色土 細砂をやや多く含む粘質土。⑬灰白色土 細砂と灰黄褐色粘質土のブロックの混土层。⑭灰褐色土 ロームと細砂を少量含む粘質土。⑮黄灰色土 細砂を極少量含む粘質土。⑯灰黄褐色土 細砂を多く含む粘質土。⑰褐色土 細砂を少量含む粘質土。⑱灰色粘質土と細砂のブロックの混土层。⑲灰色粘質土に炭化物が少量混入。⑳灰色の粘質土と細砂が互層をなし、炭化物が少量混入。㉑褐色土 細砂ブロックを多く含む粘質土。㉒褐灰色土 細砂と炭化物を少量含む粘質土。㉓灰色粘質土に小礫をやや多く混入。㉔黒褐色土 細砂と炭化物をやや多く含む。



- ①黒褐色土 ローム小ブロックを少量含む。②褐灰色土 ローム粒・小ブロックを多量に含む。③黄褐色土と黒褐色土の混土层。④褐灰色土 ローム粒を少量含む。⑤褐灰色土 ローム小ブロックを多量に含む。⑥灰黄褐色土 ローム小ブロックを極少量含む、やや砂質。⑦黒褐色土 ローム小ブロックを少量含む、やや砂質。⑧明黄褐色土 ロームブロックを多く含む。⑨黒褐色土 ローム小ブロックを少量含む。



- ①黒褐色土 ローム粒を極少量含む。②黒褐色土 ローム小ブロックを少量含む、粘性高い。③黒褐色土 ローム小ブロックを少量含む、白色軽石?粒を含む。

第30図 2区1～10号溝土層図

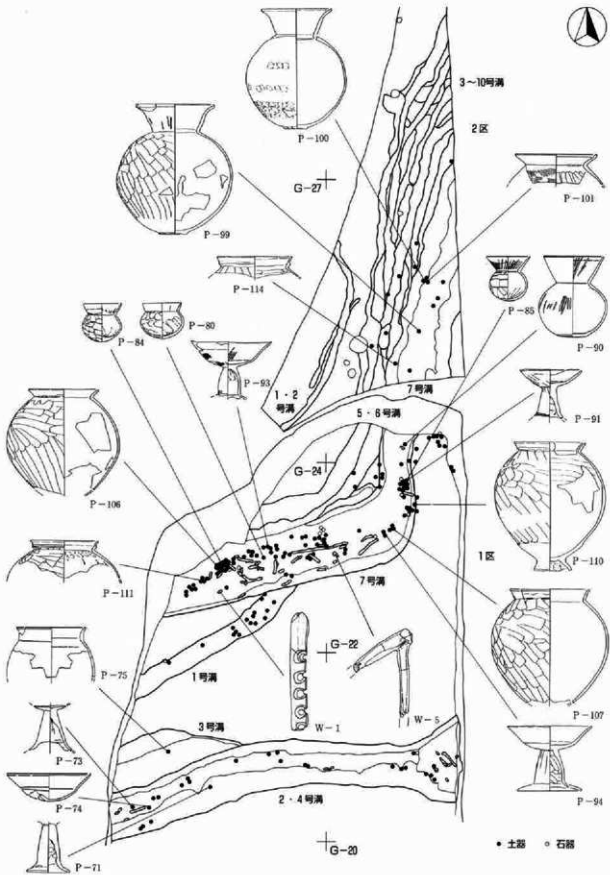
0 1:60 2m

規模は幅30～18cm、深さはほぼ6cmで、断面形はU字状をなす。

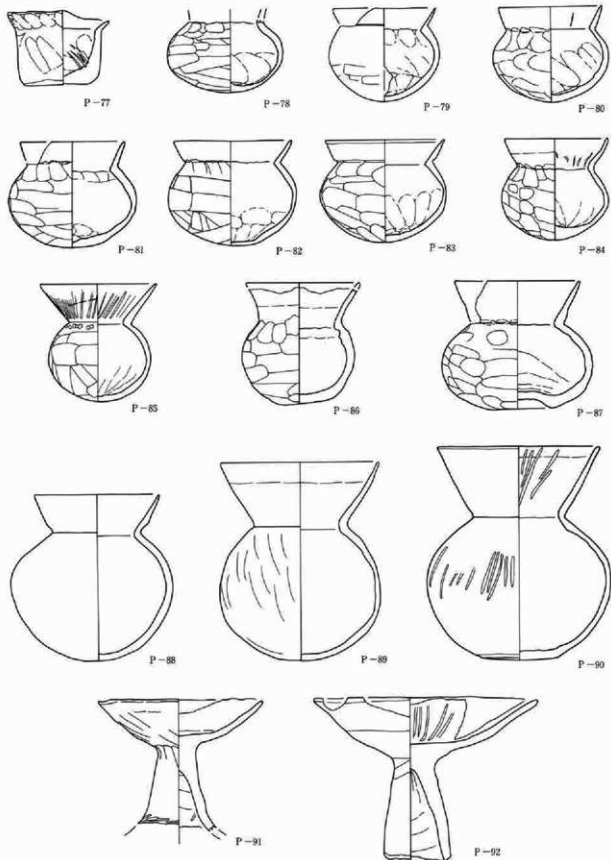
底面の比高差はほとんどないが、蛇行しながら南西から北東へ流下していたものと考えられ、調査範囲内での流下方位はN-21°-Wである。

覆土は粘質土が堆積し、自然に埋没した様相を示す。出土遺物はない。

2号溝の時期は1号溝と合い前後する、鬼高Ⅱ期と推定される。

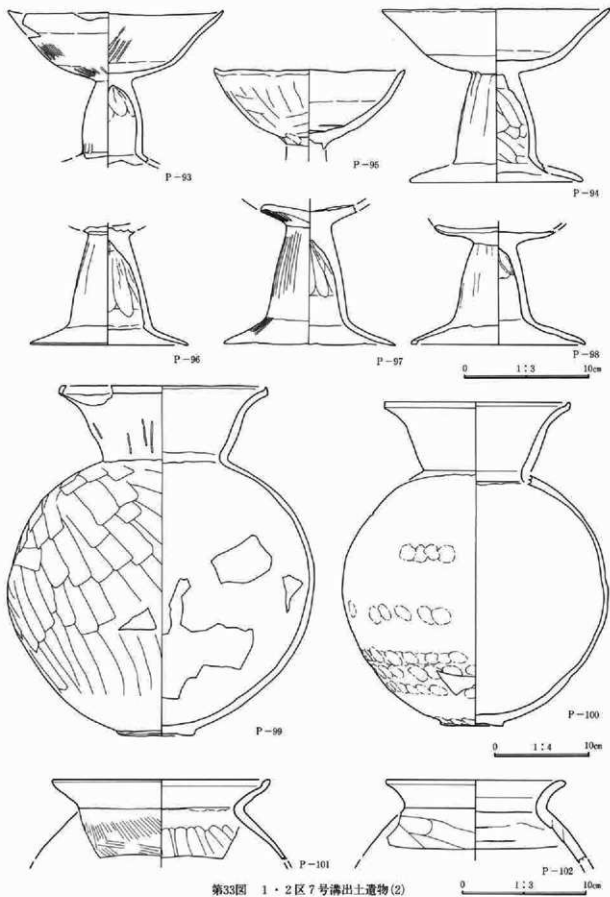


第31図 1区2面1～7号溝、2区1～10号溝遺物出土概要図

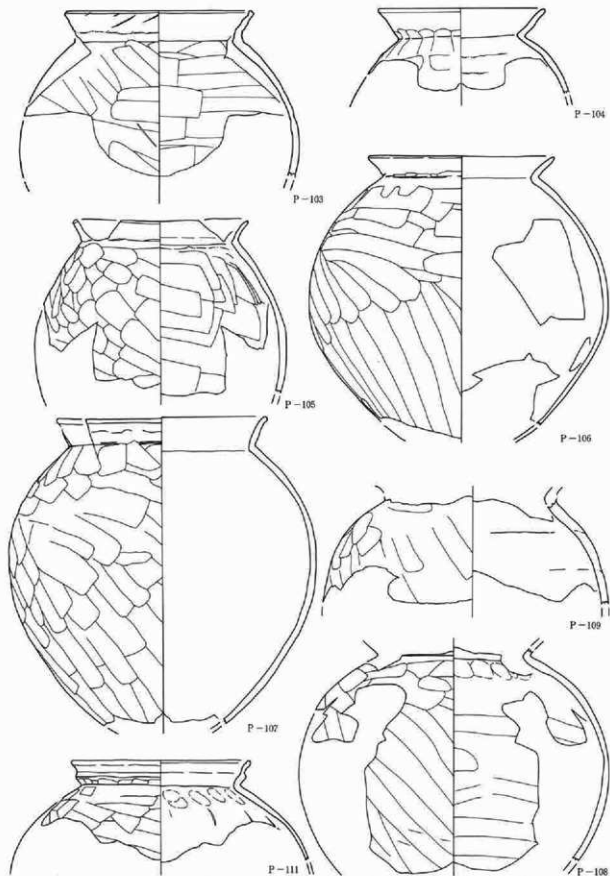


第32図 1・2区7号溝出土遺物(1)

第3節 古墳時代の遺構と遺物

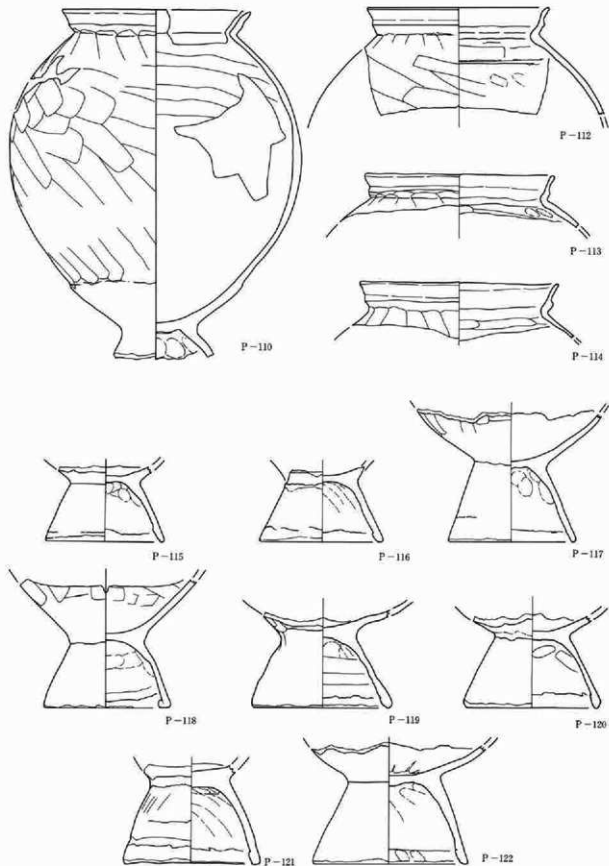


第33図 1・2区7号溝出土遺物(2)



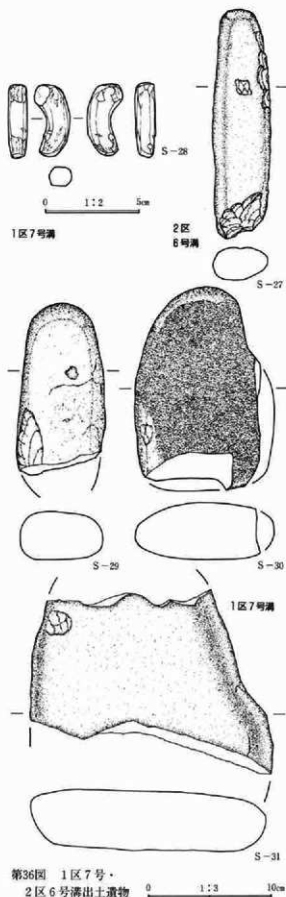
第34图 1・2区7号溝出土遺物(3)

第3節 古墳時代の遺構と遺物



第35図 1・2区7号溝出土遺物(4)

0 1:3 10cm



第36図 1区7号・
2区6号溝出土遺物

2区3号溝 (第28・30図 図版15)

G-25-H-28グリットで検出され、4・10号溝を切り、6号溝によって切られている。検出された長さは約18.50mである。

規模は幅60-46cm、深さは43-34cmで、断面形は上端が広がるU字状をなす。

底面の比高差はほとんどないが、南から北東へ流下したものと考えられ、上流部の流下方向はほぼ南北で下流部はわずかに曲りN-30°-Eとなる。

また、溝底面には鋤先痕と考えられる楕円形で断面三角形の連続した掘り込み痕が検出された。

覆土は粘質土で自然埋没した様相を示し、覆土中より土師器の坏・甕の細片6点が出土した。

3号溝は1度改修をした痕跡があり、時期は出土遺物や切り合い関係により、鬼高Ⅱ期と考えられる。

2区4号溝 (第28・30図 図版15-1・3・4)

G-25-H-28グリットで検出され、5号溝を切り、3・6号溝によって切られている。検出された長さは約14mである。

規模は64-42cm、深さはほぼ-44cmで断面形はU字状をなす。

流下方向は3号溝とはほぼ同じで、3号溝と同様に底面に鋤先痕跡が認められる。

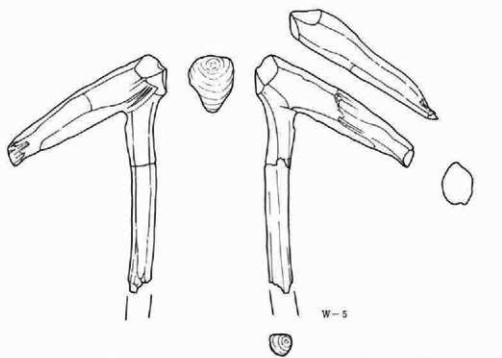
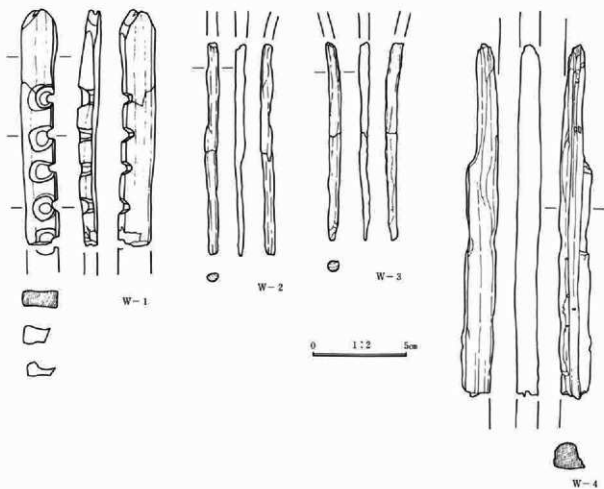
覆土は砂質土と粘質土が互層をなし、自然に埋没した様相を示す。覆土中からは土師器の坏・甕の細片が約60点出土した。

4号溝の時期は出土遺物や切り合い関係により、鬼高Ⅱ期と考えられる。

2区5号溝 (第28・30図 図版15-1)

G-24・25グリットで検出され、4・6号溝・2区1号土坑によって切られている。検出された長さは約4mで、6号溝によって流路を削られたものと考えられる。

残存する規模は幅1.06-0.56m、深さ-36cmで、断面形はU字状をなす。



第37図 1区2面7号溝出土遺物



第38図 1区2面2号溝出土遺物

流下方向は6号溝と同じく、南西から北東と考えられる。覆土は粘質土で自然埋没し、覆土中より石田川期と鬼高Ⅱ期の土師器・甕の細片が約40点出土した。

5号溝の時期は出土遺物や切り合い関係により、鬼高Ⅱ期と考えられる。

2区6号溝 (第28・30図 図版15-1・3)

G-24~H-27グリットで検出され、3~5・7

号溝を切り、9号溝に切られている。検出された長さは約15mである。

規模は幅1.92~1.47m、深さ56~44cmで、断面形は上端が開くU字状をなす。

底面の比高差はほとんどないが、南西から北東へ流下するものと考えられ、流下方位はN-14°-Eで下流端でN-55°-Eとなり曲がっている。

覆土は砂粒を含んだ粘質土が堆積し、改修を行っている可能性がある。覆土中から石田川期と鬼高Ⅱ期の甕や甕の細片が約70点出土し、敵石状の石器も1点出土した。

6号溝は1区5号溝と同一である可能性が高く、時期は出土遺物や切り合い関係により鬼高Ⅱ期と考えられる。

2区8号溝 (第28・30図 図版15-1)

H-24・25グリットで検出され、7号溝を切っている。検出された長さは約3mと短い。

規模は幅65cm、深さ26cmで、断面形はU字状をなす。

底面の比高差はないが南から北東へ流下していたと考えられ、流下方位は上流部がN-10°-W、下流部がN-58°-Eで途中で大きく曲がる。

覆土は砂質土と粘質土が互層をなして堆積、遺物は出土しなかった。

8号溝の時期は確証に欠けるが、1~6号溝と同様の時期と推定される。

2区9号溝 (第28・30図 図版15-1・3)

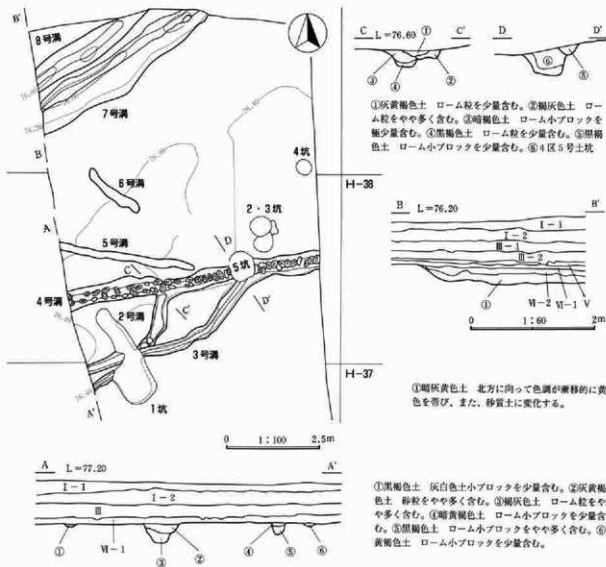
G-26~H-27グリットで検出され、6・7号溝を切っている。検出された長さは約8mである。

規模は幅48~25cm、深さ19~15cmで、断面形はU字状をなす。

底面は北東方向へわずかに低くなり、南西から北東へ流下していたと考えられ、流下方位はN-18°-Eである。また、溝底面の一部には鋤先痕が残存していた。

覆土は砂粒を含んだ粘質土が堆積し、覆土中から

第3節 古墳時代の遺構と遺物



第39図 4区2～8号溝

は石田川期と鬼高Ⅱ期の坏や甕の細片が少量出土した。

9号溝は6号溝を改修した溝と考えられ、時期は出土遺物や切り合い関係により、鬼高Ⅱ期と考えられる。

2区10号溝 (第28・30図 図版15-1・3)

G-25～H-27グリットで検出され、7号溝を切り、3・6号溝によって切られている。検出された長さは約14mである。

規模は幅60～52cm、深さ29～21cmで、断面形はU字状をなす。

底面の比高差はほとんどないが、南から北東へ流下していたものと考えられ、流下方位は上流部ではほぼ南北で、下流部はN-27°-Eとなり緩やかに曲がる。

覆土は粘質土が堆積し、覆土中からは土師器坏・甕の細片が少量出土した。

10号溝の時期は出土遺物や切り合い関係により、鬼高Ⅱ期と考えられる。

4区2号溝 (第39図 図版16-1)

F-36～G-37グリットで検出され、4区1号土坑を切り、4号溝に合流している。3号溝とも重複し

第5章 遺構と遺物

ているが前後関係は不明。検出された長さは約3.2mである。

掘り込み面は第VI-2層上面と考えられ、規模は幅38-23cm、深さ-16cmで、断面形はU字状をなす。

底面はわずかに比高差を持ち南西から北東へ流下し、流下方位は上流部でN-54°-E、下流部でN-10°-Eとなり緩やかに曲がり、約70度の角度で4号溝に合流している。

また、底面には楕円形をなし断面が三角形をなす、鋤先と考えられる掘り込み痕が一部に残っている。

2号溝の時期は掘り込み面から推察すると、石田川期後半-和泉期初頭と考えられる。

4区3号溝 (第39図 図版16-1・5)

F-36-G-37グリットで検出され、1・4号土坑を切り、4号溝に合流している。検出された長さは約5mである。

掘り込み面は第VI-1層上面と考えられ、規模は幅50-22cm、深さは-16cmで、断面形はU字状をなす。また、底面の一部には掘り込み痕が残る。

底面の比高差はほとんどないが南西から北東へ流下していたと考えられ、流下方位は上流部でN-75°-E、下流部でN-37°-Eで緩やかに曲がり、約43度の角度で4号溝に合流する。

覆土は粘質土が堆積し、覆土中からは土師器の壺片が1点出土した。

3号溝の時期は出土遺物や掘り込み面により、石田川期後半-和泉期初頭と考えられる。

4区4号溝 (第39図 図版16-1・4・5)

F-G-37グリットで検出され、4号土坑を切り、2・3号溝が合流している。検出された長さは約7mである。

掘り込み面は第VI-2層上面と考えられ、規模は幅50-40cm、深さ-30cmで、断面形は逆台形をなす。

底面には2列の鋤先痕と考えられる掘り込み痕跡が良好に残っている。

底面は検出範囲内で約10cmの比高差を持ち、西か

ら東へ流下し、流下方位はN-80°-Eでほぼ直線的に延びている。

覆土は砂粒を含む粘質土が堆積し、覆土中からは遺物は出土しなかった。

4号溝は1度改修した痕跡があり、改修時に2・3号溝を付け替えた可能性がある。時期は掘り込み面等により、石田川期後半-和泉期初頭と考えられる。

4区5号溝 (第39図 図版16-1・2)

F-G-37グリットで検出され、検出された長さは約3.5mと短い。

掘り込み面は第VI-2層上面と考えられ、規模は幅25-18cm、深さ-15cmで、断面形はU字状をなす。

底面の比高差はわずかであるが流下方向は西から東と考えられ、流下方位はN-98°-Eで直線的に延びる。

覆土は粘質土が堆積し、覆土中からは遺物は出土しなかった。

5号溝の時期は掘り込み面より、石田川期後半-和泉期初頭と考えられる。

4区6号溝 (第39図 図版16-2)

F-37グリットで検出され、検出された長さは約1.6mと短い。

底面近くが検出されただけで、規模は幅30-17cm、深さ-8cmである。流下方向は不明であるが、検出された方位はN-126°-Eである。また、時期も明確でないが2-5号溝と同様と推定される。

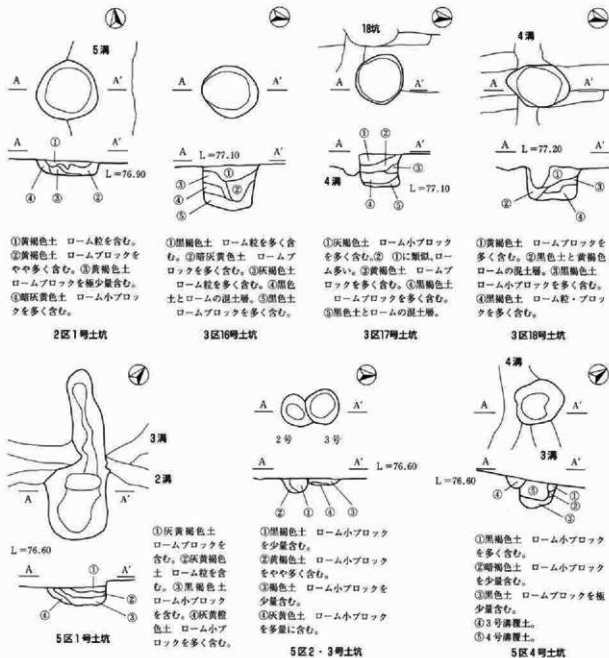
4区7号溝 (第39図 図版16-3)

F-G-38グリットで検出され、検出された長さは約5mである。

掘り込み面は第V-1層上面で、規模は1.03-0.85m、深さ-34cmで、断面形は浅いU字状をなす。

底面の比高差はほとんどないが南西から北東へ流

第3節 古墳時代の遺構と遺物



第40図 2区1号・3区16-18号・4区1~4号土坑

下していたと考えられ、流下方位はN-56°-Eである。

覆土は第VI-2層と同質の粘質土が堆積し、覆土中からは遺物は出土しなかった。

7号溝の時期は掘り込み面から、石田川期後半と考えられる。

4区8号溝(第39図 図版16-3)

F-38グリットで検出され、検出された長さは約3mである。

掘り込み面は第V-1層上面で、規模は幅73cm、深さ-33cmで、断面形は浅いU字状をなす。

流下方向や覆土は7号溝と同一であり平行して走向しているが、8号溝が古いと推定される。時期についても7号溝と合前後する時期と考えられる。

5 土坑

2区1号土坑 (第40図 図版17-1・2)

G-25グリットに位置し、5号溝を切っている。

平面形はほぼ円形で断面形は丸底状をなし、規模は径94cm、深さ-28cmである。

覆土は急激に埋没した様相を示し、覆土中からは土師器の台付甕片1点と坏片8点が出土した。時期は7世紀代と考えられる。

3区16号土坑 (第40図 図版17-3)

D-31グリットに位置し、耕作痕に切られている。平面形はほぼ円形で断面形は円筒状をなし、規模は径65cm、深さ-1.03mである。

覆土は急激に埋没した様相を示し、覆土中からは遺物は出土しなかった。

3区17号土坑 (第40図 図版17-4)

D-32グリットに位置し、4号溝と耕作痕によって切られ18号土坑の西に接近する。

平面形は円形で断面形は円筒状をなし、規模は径72cm、深さ-80cmである。

覆土は急激に埋没した様相を示し、覆土中からは鬼高期の甕片2点が出土した。

3区18号土坑 (第40図 図版17-4)

D-32グリットに位置し、4号溝と耕作痕によって切られ17号土坑の東に接近する。

平面形は不整形円形で断面形は円筒状をなし、規模は98×71cmで深さ-80cmである。

覆土は急激に埋没した様相を示し、遺物は出土しなかった。

4区1号土坑 (第40図 図版17-5・6)

F-36・37グリットに位置し、2・3号溝に切られている。平面形は不整形長円形で断面形は丸底状をなし、規模は2.65×0.95mで深さ-32cmである。

覆土は急激に埋没した様相を示し、遺物は出土しなかった。

4区2号土坑 (第40図 図版17-7)

G-37グリットに位置し、3号土坑を切っている。平面形はほぼ円形で断面形は丸底状をなし、規模は径48cmで深さ-21cmである。

覆土は急激に埋没した様相を示し、遺物は出土しなかった。

4区3号土坑 (第40図 図版17-7)

G-37グリットに位置し、2号土坑によって切られている。平面形はほぼ円形で断面形は丸底状をなし、規模は径54cmで深さ-12cmである。

覆土は急激に埋没した様相を示し、遺物は出土しなかった。

4区4号土坑 (第40図 図版17-7)

G-38グリットに位置している。平面形はほぼ円形で断面形は丸底状をなし、規模は径40cm、深さ-16cmである。

覆土は急激に埋没した様相を示し、遺物は出土しなかった。

4区5号土坑 (第40図 図版17-8)

G-37グリットに位置し、3・4号溝に切られている。平面形は不整形円形で断面形は丸底状をなし、規模は径75cmで深さ-47cmである。

覆土は急激に埋没した様相を示し、遺物は出土しなかった。

第4節 奈良・平安時代の遺構と遺物

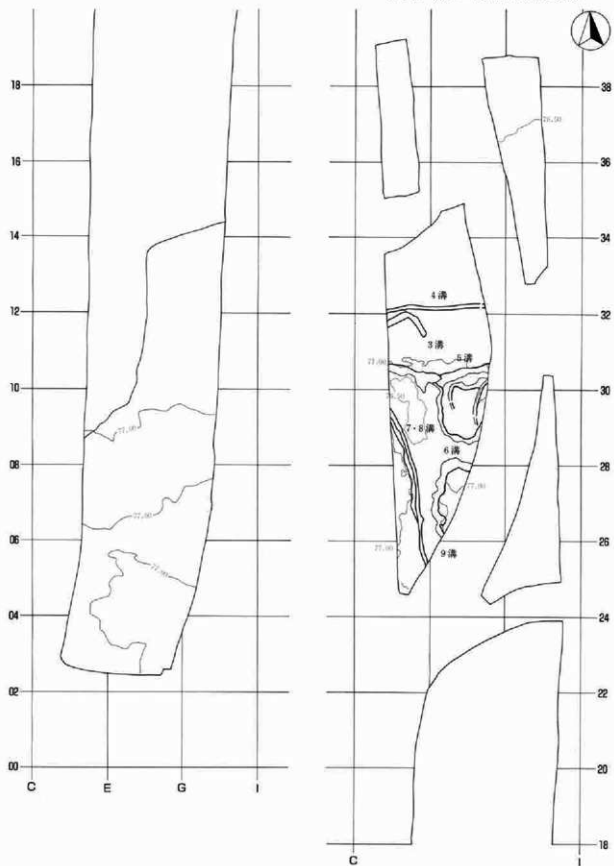
1 水田址

1区1面水田址 (第42図 図版18-1-4)

1区では表土下-30-40cmの深さでAs-B軽石(天仁元年 1.108年噴出)の純層が、5-10cmの厚さでほぼ全面(南半の堆積は薄くなる。)に堆積していた。

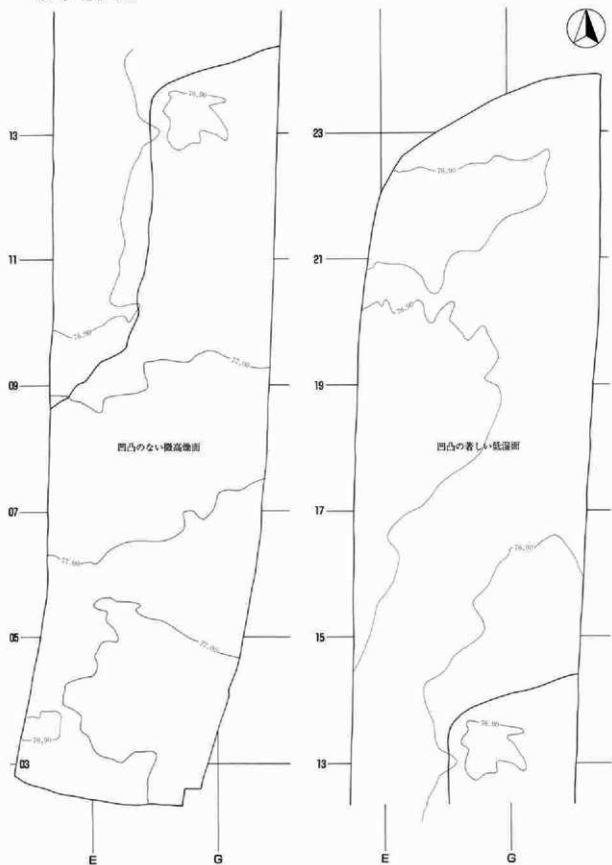
As-B軽石下は粘質土となっており、水田址が

第4節 奈良・平安時代の遺構と遺物



第41図 奈良・平安時代遺構全体図

0 1:500 2.5m



第42図 1区1面As-B軽石下水田面

考えられず、他の原因によるものと考えられる。

5区水田址 (第43図 図版18-5)

5区の調査範囲は小範囲ではあるが、調査区北半部において、1区と同様にAs-B軽石の堆積が認められ1区の北半部と同じように第Ⅲ層上面に凸凹が見られた。

第Ⅲ層は1区も5区も同質であり、5区第Ⅲ層でも稲作が行われていた可能性は高い。なお、2・4区ではAs-B軽石層は認められなかったが、1・5区と同質の第3層黒色粘質土が堆積しており、中川に沿う低地帯のAs-B軽石直下の黒色粘質土中で稲作が行われていた可能性が指摘される。

2 溝

3区3号溝 (第44図 図版19-1・5)

C-D-31グリットに位置し、耕作痕によって切られている。検出された長さは約7mである。

規模は幅54-92cm、深さ-25-41cmで、断面形はU字状をなす。

本溝は舌状台地の頂部に位置し、L字状に曲がり込み止まっている。底面の比高差は調査範囲内で約16cmあり、上流部側の方位はN-63°-Eで下流部側はN-143°-Eとなる。

覆土は自然に埋没した様相を示し、遺物は縄文土器片1点と土師器壺片3点が出土した。

3区4号溝 (第44図 図版19-1)

C-F-32グリットで検出され、17・18号土坑を切り、1号溝・耕作痕によって切られている。検出された長さは約12.5mである。

規模は幅40-57cm、深さ-32cmで、断面形はU字状をなす。

本溝は舌状台地の頂部を縦断し、底面の比高差はわずかであるがほぼ西から東へ流下していたと考えられ、流下方位はN-87°-Eである。覆土は自然に埋没した様相を示し、遺物は出土しなかった。



第43図 5区As-B軽石下水田面

検出される可能性が高いため、第Ⅲ層上面の精査を実施した。

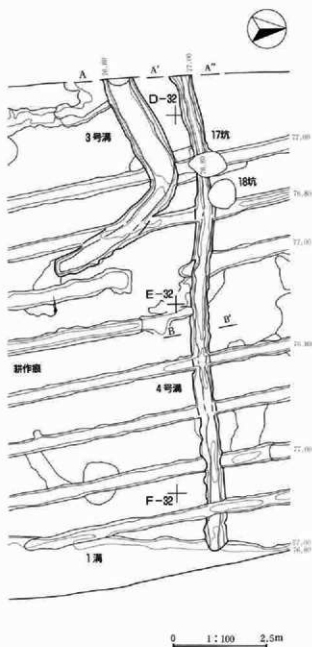
この結果、北半部は凸凹の著しい黒色粘質土の低湿面が検出され、南半部は凸凹のない灰色粘質土の微高燥面が検出された。また、南半部は北半部に比べ約10cm高くなっていた。

しかし、水田に伴う畦畔や溝等は何ら検出されなかったため、第Ⅲ層のプラント・オパール分析を行い、水田として使用していたかどうかの判定を試みた。

プラント・オパールの分析により第Ⅲ層黒色粘質土中から、イネの植物珪酸体 $5,100$ 個/gと高い密度で検出され、第Ⅲ層で稲作が行われていた可能性が高くなった。

As-B軽石降下において畦畔等が遺存せず水田区画が不明な点についての原因は判然としないが、第Ⅲ層において稲作が行われていた高い可能性は指摘できるものと考えられる。

なお、1区北半部の第Ⅲ層上面の凸凹は足跡とは



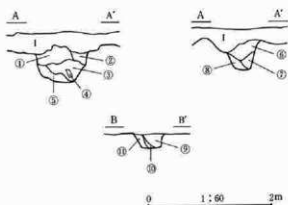
3区5号溝 (第45図 図版19-2)

E・F-30グリッドで検出され、1号墳周堀より新しく、9号土坑や中世柱穴群に切られている。検出された長さは約8mである。

規模は幅1.80-3.00m、深さ-22-32cmで、断面形は皿状をなす。

本溝は1号墳構築後にできた台地から低地へ流れ出す自然の凹みと考えられ、覆土直上にAs-B軽石の2次堆積層がのっている。

流出方位はN-104°-Wで途中よりN-176°-W



- ①黒褐色土 ローム粒・小ブロックを少量含み、炭化物を極少量含む。
- ②暗褐色土 ローム小ブロックを多量に含む。
- ③灰褐色土 ローム粒・小ブロックを多量に含む。
- ④暗褐色土ブロック。
- ⑤灰褐色土 ローム小ブロックを多量に含む。
- ⑥暗灰黄色土と黒褐色土の混土层でローム粒・小ブロックを少量含み、As-B軽石を極少量含む。
- ⑦ ⑥に類似し、ローム粒・小ブロックをより多く含む。
- ⑧暗黄褐色土 ローム粒・小ブロックを多量に含む。
- ⑨暗褐色土 ローム粒・小ブロックを多量に含み、炭化物を少量含む。
- ⑩黒褐色土 ローム粒・小ブロックを多量に含む。
- ⑪灰褐色土 ローム小ブロックを多量に含み、As-B軽石を極少量含む。

第44図 3区3・4号溝

と南へ曲がり込み、6号溝や9号溝の方向へ流出していったものと考えられる。覆土は粘質土が堆積し、覆土中からは遺物は出土しなかったが、河原石が流出部に6点散乱していた。

3区6号溝 (第45図 図版19-3)

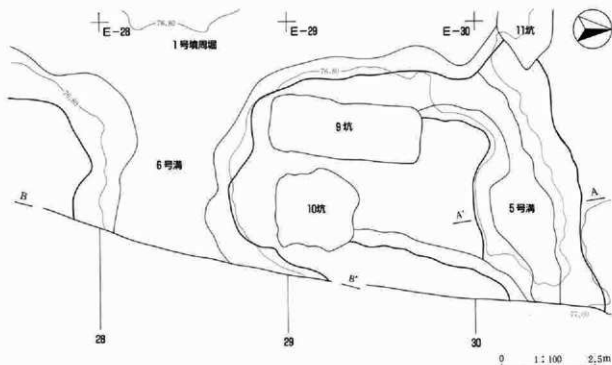
E・F-28グリッドで検出され、1号墳より新しく、中世柱穴群に切られている。

規模は幅約4m、深さ-12-22cmで、断面形は皿状をなす。

本溝も1号墳構築後にできた自然の凹みと考えられ、覆土直上にAs-B軽石の2次堆積層がのっていた。流出方位はほぼ西から東へ流れ出し、さらにN-26°-E方向へ曲がり込んでいる。

覆土は粘質土が堆積し、覆土中からは土師器製の細片9点と灰釉陶器の縄と壺片各1点が出土した。

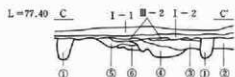
第4節 奈良・平安時代の遺構と遺物



①暗褐色土 ローム粒とAs-B軽石を少量含む。②黄棕色ロームと黒褐色土のブロックの混土层。③黒褐色土 ローム小ブロックをやや多く含む。④灰褐色土 ロームブロックを多く含む。⑤灰色土と黄棕色ロームの混土层。



①暗黄褐色土 ローム粒を少量含む、As-B軽石をやや多く含む。②暗灰黄色土 ローム小ブロック、As-B軽石をやや多く含む、やや砂質。③黄棕色ロームのブロック状の堆積。



①柱穴覆土。②1号墳覆土。③暗黄褐色土 ローム粒を含む。④暗灰黄色土 ローム粒を含む。⑤黄灰色土 ローム粒を多量に含む。⑥黄灰色土 ロームブロックを多量に含む。



①黒褐色土 As-B軽石を多量に含む。②黒褐色土 ローム粒を含む。③明黄褐色土。④黒褐色土と黄棕色ロームの混土层。⑤1号墳覆土。



①柱穴覆土。②黒褐色土 ローム小ブロック・As-B軽石を少量含む。③黒褐色土 ローム小ブロックを多く含む。④黒褐色土 ローム小ブロックを極少量含む。⑤黒色土 ローム小ブロックをやや多く含む。⑥暗褐色土 ロームの大小のブロックを多く含む。

第45図 3区5・6号溝および3区5-9号溝土層図

0 1:60 2m



第46図 3区7・8・9号溝

3区7号溝 (第45・46図 図版19-4)

D-25-29グリットに位置し、1号墳・8・9号溝を切り、3・4・12号土坑や中世柱穴に切られている。

本溝は1号墳の周堀内縁を通過して台地から低地へ流れ込んでおり、覆土直上にはAs-B軽石の2次堆積層がのっていた。検出された長さは約21mである。

規模は幅32-65cm、深さ9-14cmで、断面形はU字状をなす。

本溝は周堀の湾曲に沿って緩やかな弧状を描いて北西から南東へ流下し、底面の比高差は検出範囲内約10cmである。流下方位は上流部でN-28°-W、途中でほぼ南北となり、下流部でわずかに再びN-25°-Wとなる。

覆土は粘質土が堆積しており、覆土中からは土師器杯・甕の細片15点と、円筒埴輪の細片4点、羽釜の細片1点が出土した。

3区8号溝 (第45・46図 図版19-4)

D-26-28グリットで検出され、1号墳を切り、7号溝や3・4号土坑・中世柱穴に切られている。

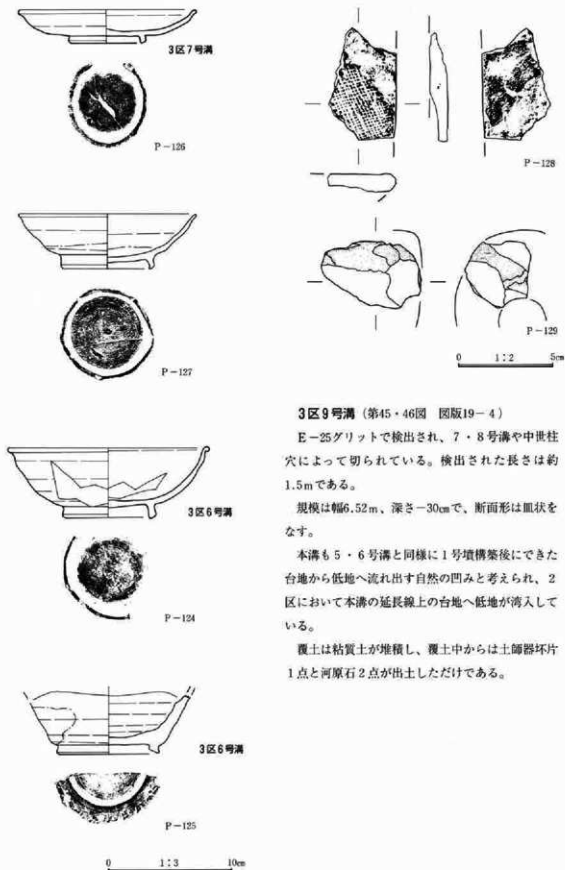
7号溝は本溝の改修後の溝であり、7号溝により左岸を切られている。また、下流部は流路が不明となるが、1号墳周堀内側に沿って緩やかな弧を描きながら流下している。

残存する規模は幅57-66cm、深さ19-27cmで、断面形は浅いU字状をなす。

検出範囲内での底面の比高差は約10cmで、流下方位は7号溝と同じ北西から南東で、流下方位も7号溝と同様である。

覆土は粘質土が堆積しており、覆土中からは遺物等は出土しなかった。

1号墳の周堀は平安時代には完全に埋没しておらず、墳丘も良好に残存していたものと考えられ、7・8号溝は墳丘と周堀の境界の地形を利用して掘られたと考えられる。



第47図 3区6・7号溝およびグリット出土遺物

第5節 中・近世の遺構と遺物

1 掘立柱建物

1区1号掘立柱建物(第49図 図版20-1)

G・H-22・33グリットにあり、1区の低地面に位置している。本建物は調査区外のさらに東へ延びると考えられ、全体の形状・規模は不明である。

検出された柱間は梁行1間、桁行1間で南に縁か庇の付く構造で、棟は東西と考えられ、桁行はさらに東に延びると考えられる。推定される棟方位はN-84°-Eである。

規模は梁行が1.90mと2.00m、桁行が2.40mと2.62mで縁か庇の出は1.15mと1.38mである。

構造にやや歪みがあり測値にばらつきがあるが、梁行が7尺、桁行8尺、縁か庇の出が4尺を基準にしたものと考えられる。

柱穴は円形で平均規模は径30cm、深さ-30cmで縁か庇の柱穴は規模が一回り小さい。

柱痕が検出された柱穴は4本で、柱直径は約15cmである。

時期を示す遺物等は出土しなかったが、As-B軽石降下以降、As-A軽石降下以前の建物跡である。

3区柱穴群(第50～52図 図版20-2・21)

3区台地南半部で429本の柱穴が検出された。これらの柱穴は1号墳周堀や5-9号溝を切り、同じ分布傾向を示す1-12・14号土坑とは重複関係にある。

今回の調査は範囲が狭くかつ、密集度が高いため建物構造や規模の解明までには至らなかった。

429本の柱穴のうち、平面形が円形のもの165本と約4割で、方形のもの210本と約5割となり、不明は54本の約1割である。

柱穴の規模は最大径75cm、最小径14cmで平均径は31cmである。深さは検出面より平均-25cmである。

また柱痕が25本の柱穴で検出され、柱痕の最大

柱穴規模集計表

(単位 cm)

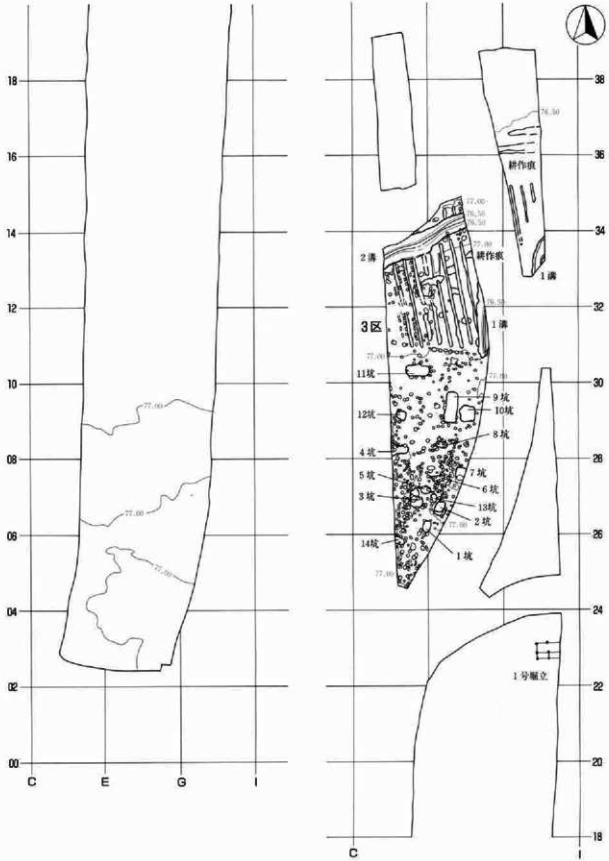
番号	平面形	規模	深さ	柱直径	番号	平面形	規模	深さ	柱直径	番号	平面形	規模	深さ	柱直径
1	円	44×-	-65		28	方	48×44	-20		55	方	42×38	-27	
2	方	48×58	-24		29	円	34×38	-19		56	円	29×42	-18	
3	円	22×32	-34	10	30	円	26×26	-31		57	方	28×32	-24	10
4	円	40×36	-41		31	方	42×-	-37		58	円	-×28	-15	
5	円	28×28	-24		32	方	50×34	-36		59	円	34×-	-30	
6	円	28×-	-20		33	方	46×46	-30		60	円	-×28	-32	
7	方	34×32	-39		34	円	46×41	-38	16	61	円	29×24	-15	
8	方	30×-	-30		35	方	34×40	-30		62	方	24×26	-21	
9	方	36×28	-32	14	36	円	32×24	-22		63	方	32×35	-20	16
10	方	32×28	-17		37	円	29×29	-20		64	方	40×43	-40	
11	方	36×53	-17		38	方	39×-	-28	14	65	円	30×32	-32	
12	方	40×-	-12		39	方	44×40	-45		66	方	30×22	-11	
13	方	43×38	-35	13	40	方	42×40	-20		67	円	43×32	-28	
14	方	46×32	-34		41	円	44×38	-33		68	方	29×24	-12	
15	円	40×42	-50		42	円	-×48	-48	15	69	円	25×35	-26	
16	方	45×48	-26		43	円	35×-	-15		70	円	22×24	-10	
17	方	40×38	-40		44	円	36×42	-41		71	方	37×34	-44	
18	方	68×41	-30		45	円	28×24	-30		72	円	23×24	-34	
19	円	50×63	-37	9	46	円	36×38	-40	15	73	円	34×35	-34	
20	方	38×38	-39		47	円	39×41	-51		74	方	34×36	-76	
21	円	30×28	-32		48	円	28×54	-41		75	方	56×61	-35	
22	円	30×32	-20		49	方	35×34	-40		76	円	-×31	-43	
23	方	50×30	-16		50	円	28×28	-31		77	方	40×-	-48	
24	方	57×44	-51		51	円	27×33	-32		78	円	44×45	-77	
25	円	26×24	-7		52	方	29×30	-18		79	円	49×-	-34	
26	円	35×-	-36		53	円	27×28	-26	10	80	円	34×31	-10	
27	方	47×-	-22		54	円	25×28	-20	15	81	方	33×41	-28	

第5節 中・近世の遺構と遺物

番号	平面形	規模	深さ	柱状径	番号	平面形	規模	深さ	柱状径	番号	平面形	規模	深さ	柱状径
82	方	32×23	-11		140	方	30×34	-39		198	方	52×64	-26	
83	方	-×33	-51		141	方	30×31	-35		199	方	12×-	-26	
84	方	30×40	-22		142	円	41×40	-32		200	方	47×38	-60	
85	方	35×37	-22		143	方	25×36	-24		201	方	25×30	-31	
86	方	29×23	-15		144	-	40×-	-30		202	方	30×26	-21	
87	方	30×48	-28	20	145	-	30×-	-25		203	方	40×30	-13	
88	方	23×33	-32		146	円	28×36	-34		204	方	22×18	-7	
89	方	37×43	-26		147	方	37×24	-11		205	円	24×24	-34	
90	方	33×36	-35		148	方	34×47	-5		206	方	30×28	-17	
91	円	-×43	-28		149	方	28×21	-22		207	円	28×34	-18	
92	円	26×25	-28		150	方	23×25	-12		208	方	48×46	-31	
93	円	32×-	-19		151	方	36×-	-10		209	円	46×44	-22	
94	方	40×-	-37		152	-	23×-	-12	10	210	方	32×30	-34	
95	方	40×35	-30		153	円	30×29	-14		211	方	26×-	-23	
96	円	-×28	-23		154	方	25×22	-39		212	円	36×32	-23	
97	方	34×28	-30		155	円	-×57	-15		213	方	26×-	-10	
98	方	44×48	-27		156	-	35×-	-33		214	円	28×28	-22	
99	円	35×35	-65	15	157	方	62×59	-69		215	方	28×40	-40	
100	円	33×27	-44		158	方	36×51	-35		216	方	32×53	-40	
101	方	30×38	-48		159	方	32×32	-23		217	円	26×22	-8	
102	方	30×35	-23	20	160	円	29×34	-61		218	円	39×24	-19	
103	方	22×24	-23		161	方	27×32	-29	10	219	方	42×40	-48	
104	方	39×41	-44		162	円	25×25	-22		220	方	37×35	-39	
105	円	28×30	-20		163	方	50×48	-40		221	円	44×42	-42	
106	円	25×29	-6		164	方	-×-	-14		222	円	35×50	-27	
107	方	63×47	-36	16	165	円	28×26	-11		223	円	39×-	-27	
108	円	27×27	-42		166	円	33×33	-21		224	円	32×26	-33	
109	円	37×31	-23		167	方	30×32	-10		225	方	47×35	-23	
110	方	29×28	-62	12	168	円	54×53	-40		226	方	30×32	-22	
111	方	31×31	-35	11	169	方	79×-	-18		227	円	25×27	-17	
112	-	55×-	-41		170	円	30×26	-25		228	円	31×45	-10	
113	方	30×26	-34		171	方	48×36	-27		229	円	34×35	-40	
114	円	30×27	-43		172	方	29×36	-42		230	方	24×26	-20	
115	円	35×44	-45		173	方	36×31	-25		231	円	24×-	-40	
116	方	30×34	-37		174	方	40×-	-30		232	円	25×-	-45	
117	方	27×-	-25		175	方	62×45	-66		233	円	38×-	-20	
118	円	33×33	-30		176	円	36×24	-7		234	-	26×-	-25	
119	方	34×29	-32	17	177	円	26×21	-20		235	-	20×-	-18	12
120	方	67×54	-30	20	178	方	14×16	-10		236	-	19×-	-17	
121	円	40×35	-45		179	方	24×20	-15		237	円	30×21	-29	
122	円	35×32	-35		180	円	44×40	-40		238	円	55×45	-53	
123	方	47×39	-45		181	円	24×30	-15		239	円	35×24	-35	
124	方	40×39	-53		182	方	38×28	-19		240	方	34×56	-23	
125	方	36×28	-10		183	円	30×22	-17		241	円	29×32	-38	
126	方	43×34	-41		184	方	22×32	-24		242	円	30×28	-21	
127	円	38×40	-46		185	円	18×17	-14		243	円	36×33	-47	
128	-	32×-	-40		186	円	20×20	-11		244	円	27×35	-48	
129	円	43×41	-26		187	方	34×64	-10		245	円	29×29	-28	
130	方	-×32	-33		188	方	48×46	-30		246	円	33×33	-23	
131	方	30×32	-41		189	円	34×44	-27		247	円	25×26	-37	
132	方	31×22	-28		190	方	24×33	-15		248	円	44×36	-35	
133	方	47×49	-21		191	円	26×34	-18		249	円	32×30	-47	21
134	方	35×42	-37		192	円	32×29	-35		250	円	-×33	-20	
135	円	30×34	-35		193	円	34×30	-17		251	方	38×30	-31	
136	方	38×34	-26		194	円	34×34	-32		252	方	70×43	-28	
137	円	41×39	-37		195	円	26×30	-12		253	円	28×25	-14	
138	方	33×35	-36		196	円	33×32	-18		254	方	-×28	-14	
139	円	25×33	-44	16	197	方	40×50	-40		255	方	24×-	-45	

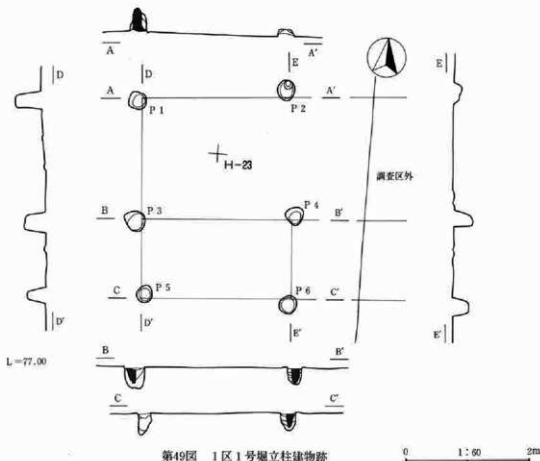
第5章 遺情と遺物

番号	平面形	規模	深さ	柱痕径	番号	平面形	規模	深さ	柱痕径	番号	平面形	規模	深さ	柱痕径
256	方	24×21	-16		314	方	26×31	-30		372	方	27×24	-19	
257	方	26×24	-14		315	方	29×-	-30		373	方	-×47	-8	
258	円	-×22	-4		316	方	30×30	-21		374	方	28×34	-20	
259	円	40×42	-7		317	方	24×22	-9		375	方	18×16	-9	
260	円	44×40	-40		318	円	-×39	-21		376	方	22×20	-9	
261	円	19×22	-24		319	円	25×25	-32		377	方	19×27	-6	
262	円	26×21	-4		320	円	19×19	-10		378	方	30×23	-28	
263	円	41×-	-27		321	円	39×38	-32		379	方	29×25	-12	
264	円	35×31	-27		322	方	-×35	-17		380	方	29×33	-3	
265	円	30×27	-19		323	円	19×17	-18		381	方	22×25	-9	
266	円	35×41	-17		324	方	-×23	-16		382	方	-×25	-14	
267	方	29×55	-43		325	円	21×21	-25		383	方	22×25	-12	
268	円	61×40	-73		326	円	29×31	-29		384	円	-×33	-23	
269	円	71×73	-35		327	方	55×42	-33		385	方	32×35	-35	
270	円	28×30	-36		328	方	41×36	-11		386	方	24×43	-4	
271	方	17×23	-51		329	円	31×38	-13		387	方	27×36	-15	
272	方	22×28	-46		330	方	36×35	-23		388	方	20×27	-29	
273	円	35×30	-16		331	円	22×28	-6		389	円	22×17	-23	
274	円	-×40	-28		332	円	-×34	-28		390	方	23×18	-19	
275	方	29×30	-15		333	円	-×20	-12		391	方	29×29	-23	
276	方	32×33	-45		334	方	22×18	-3		392	円	-×31	-16	
277	方	38×58	-9		335	方	22×18	-11		393	方	21×25	-12	
278	円	23×22	-20		336	円	32×28	-5		394	方	19×29	-17	
279	方	26×26	-17		337	方	32×34	-10		395	方	31×43	-16	
280	円	33×35	-6		338	方	28×27	-19		396	方	57×50	-8	
281	方	45×41	-17		339	円	42×31	-21		397	方	26×27	-16	
282	方	35×-	-28		340	円	24×24	-19		398	円	23×22	-13	
283	円	34×41	-25		341	方	18×14	-9		399	方	30×27	-10	
284	円	31×28	-17		342	方	15×29	-6		400	方	25×27	-16	
285	円	29×28	-12		343	方	24×-	-18		401	方	25×25	-10	
286	円	25×22	-5		344	方	29×20	-29		402	円	26×26	-22	
287	方	22×25	-29		345	円	26×25	-9		403	方	35×30	-22	
288	方	26×45	-5		346	方	33×36	-17		404	方	23×-	-10	
289	円	31×29	-9		347	方	23×20	-11		405	方	30×23	-25	
290	円	23×29	-58		348	方	38×29	-11		406	方	38×31	-28	
291	円	-×30	-46		349	円	34×28	-22		407	方	29×33	-22	
292	方	29×36	-33		350	円	24×20	-11		408	方	25×19	-10	
293	円	32×34	-43		351	方	53×33	-67		409	方	34×43	-10	
294	円	30×27	-26		352	円	22×30	-13		410	方	46×36	-10	
295	円	32×35	-29		353	円	20×19	-3		411	円	25×27	-10	
296	方	33×-	-19		354	円	32×30	-33		412	方	32×29	-29	
297	円	33×-	-41		355	円	16×21	-10		413	円	33×28	-12	
298	方	24×20	-11		356	方	32×28	-4		414	円	40×37	-28	
299	方	32×40	-59		357	方	30×26	-11		415	方	29×-	-19	
300	方	75×35	-22		358	方	30×24	-27		416	方	24×27	-34	
301	方	38×35	-7		359	方	26×32	-14		417	方	20×30	-12	
302	方	22×30	-10		360	方	28×28	-32		418	方	33×37	-56	
303	円	37×32	-21		361	方	22×20	-9		419	方	24×28	-30	
304	円	24×24	-19		362	方	-×26	-8		420	方	21×29	-6	
305	方	30×28	-60		363	円	22×22	-19		421	方	22×23	-18	
306	方	22×30	-13		364	円	23×26	-21		422	方	31×31	-34	
307	円	38×29	-30		365	方	18×16	-24		423	方	32×32	-33	
308	方	27×25	-10		366	方	-×16	-25		424	方	11×34	-7	
309	方	33×28	-14		367	円	38×44	-13		425	方	25×21	-5	
310	円	29×32	-27		368	円	32×29	-26		426	方	33×29	-24	
311	円	36×36	-10		369	方	36×-	-5		427	方	37×25	-25	
312	方	28×50	-4		370	方	23×20	-2		428	方	32×25	-28	
313	方	27×23	-10		371	円	34×23	-22		429	方	-×26	-11	



第48図 中・近世遺構全体図

0 1:500 2.5m



第49図 1区1号竪立柱建物跡

径は21cm、最小径は9cmで、平均径は14cmである。

また、柱穴内に栗石を入れたものや底石を入れたものがわずかに存在する。

また、54本の柱穴から縄文時代の打製石斧（S-13）や古墳時代～平安時代の土師器片や円筒埴輪片等が混入して出土した。

時期を示す遺物としては74号柱穴から山茶埴片（P-130）1点が、121号柱穴から景德元寶（M-2）1点が、165号柱穴から軟質陶器鉢片1点が、175号柱穴から皇宋通寶1点がそれぞれ出土した。また柱穴はAs-B軽石降下以降、As-A軽石降下以前のものであり、重複する土坑群の時期や出土遺物から、柱穴群の時期は中世後半と考えられる。

柱穴群は切り合い関係を持つものが多く密集度も高い。台地南半部を居住地として占地し、建て改えを繰り返しながら長期にわたって建物群が存続していたものと考えられる。

2 溝

3区1号溝（第53図 図版22-1）

F-30～32グリットで検出され、4号溝を切り、耕作痕によって切られている。検出された長さは約10mである。

規模は幅1.75m、深さ92cmで、断面形は葉研堀状をなす。

本溝は台地頂部を起点に台地北縁方向へほぼ南北に直線的に横断し、調査範囲内での底面の比高差はほとんどない。

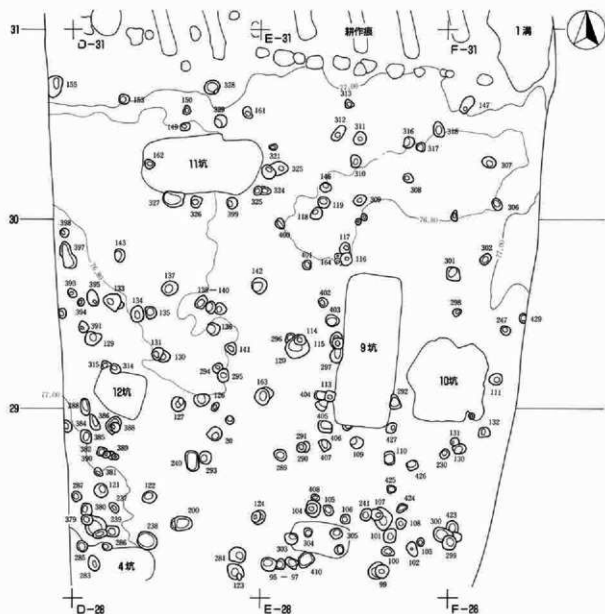
覆土は粘質土で自然に埋没した様相を示し、水流の痕跡はあまり認められない。

覆土中からは土師器杯・甕の細片15点、形状不明の鉄材1点、銅片1点、河原石2点が出土しただけである。



第50図 3区柱穴群(1)

0 1:100 2.5m



第51図 3区柱穴群(2)

0 1:100 2.5m

3区2号溝(第54図 図版22-2・3)

C-33-E-34グリッドで検出され、2号住居跡・15号土坑を切り、耕作痕によって切られている。検出された長さは約12mである。

規模は幅3.20m、深さ-98cmで、断面形は葉研堀状をなす。

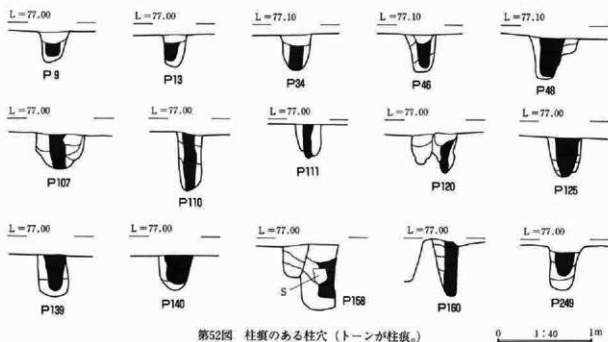
本溝は台地の北縁部に沿ってやや蛇行しながら南西から北東へ流下し、調査範囲の底面の比高差は約10cmである。流下方位はN-65°-Eである。

覆土は粘質土で自然に埋没し、わずかに水流の痕

跡が認められた。

覆土中からは土師器杯・甕の細片10点、円筒埴輪片2点、打製石斧(S-14)1点、刺片1点が出土した。また、溝の下層から中層にかけて河原石13点が混入していた。

3区1・2号溝からは時期を示す遺物は出土しなかったが、覆土の状況からAs-B軽石降下以降、As-A軽石降下以前の時期であり、断面形状の特徴により中世のものと考えられる。



第52図 柱痕のある柱穴 (トーンが柱痕。)

4区1号溝 (第56図)

E-32グリッドで検出され、2号周溝墓を切っている。検出された長さは約4mである。

規模は幅1.12~1.30m、深さ13cmで、断面形は皿状をなす。

検出範囲内での比高差はほとんどないが、4区台地南縁を弧を描いて南から北東へ流下している。流下方向はN-25°-Eである。

覆土は粘質土で自然に埋没し、遺物は出土しなかった。覆土中にAs-A軽石が混入しており、A軽石降下以降の新しい溝である。

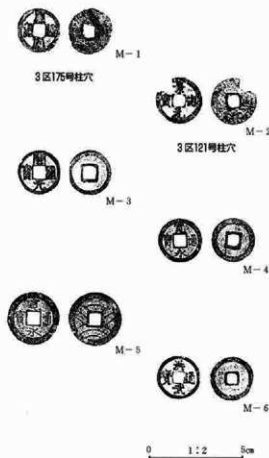
3 土 坑

3区1号土坑 (第58図 図版23-1)

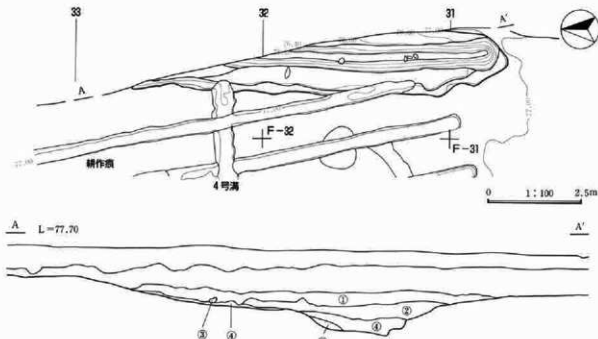
D-26グリッドに位置し、1号墳周堀を切っている。

平面形は隅丸長方形で、規模は1.03×1.44m、深さ64cmで、長軸方位はN-10°-Eである。

覆土は自然に埋没した様相を示し、覆土中からは、土師器・須恵器の坏・甕の細片4点が出土し、河原石3点が混入していた。



第53図 柱穴およびグリッド出土の銭貨



①黒褐色土 ローム粒・小ブロックを少量含む砂質土。②灰褐色土と灰黄褐色土がラミナ状に堆積。③ロームブロック。④黄褐色土 粒子粗く水成堆積の様相を示す。⑤灰黄色土 壁面崩落によるロームの二次堆積層。

第54図 3区1号溝

0 1:60 2m

3区2号土坑 (第58図 図版23-2)

E-27グリッドに位置し、中世柱穴と重複している。

平面形は不整隅丸長方形で南壁は2段に落ち込む。規模は1.47×1.92m、深さ-41cmで、長軸方位はN-31°-Eである。

覆土は自然に埋没した様相を示し、覆土中からは土師器坏細片3点、円筒埴輪片8点とともに、軟質陶器鉢片1点と灰軸平茶堿(P-131)片1点が出土した。また、覆土上部には河原石11点が混入していた。

3区3号土坑 (第58図 図版23-3)

D-26グリッドに位置し、中世柱穴と重複している。

平面形は東西に軸を持つ隅丸長方形の土坑で、北から長方形の落ち込みが取り付き、底面にも円形の落ち込みがある。隅丸長方形の土坑の規模は1.30×1.63m、深さ-64cmで、長軸方位はN-81°-Wで

ある。

覆土は自然に埋没した様相を示し、覆土中からは土師器や円筒埴輪の細片11点とともに、白磁皿(P-132)片1点と軟質陶器内耳鍋(P-133)片1点が出土した。

3区4号土坑 (第58図 図版23-4)

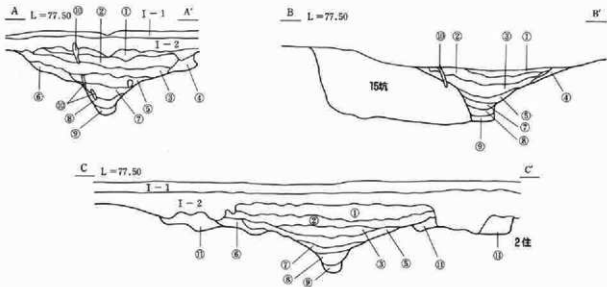
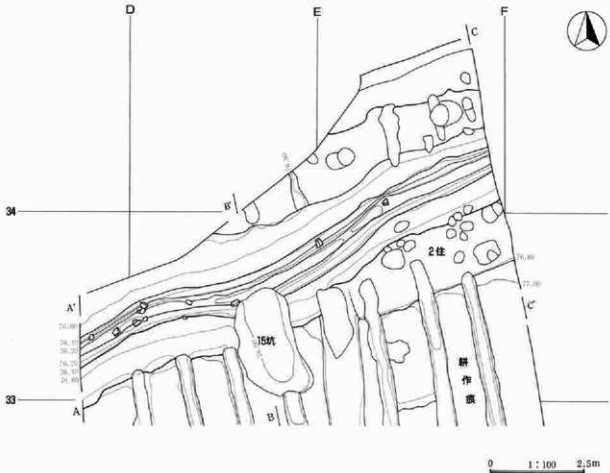
D-28グリッドに位置し、中世柱穴に切られている。

平面形が隅丸長方形で幅1.00m、深さ-68cmでは東西に長軸を持つ土坑の西に、さらに土坑が重複しているものと考えられる。

覆土は自然に埋没した様相を示し、遺物は出土しなかった。

3区5号土坑 (第58図 図版23-5)

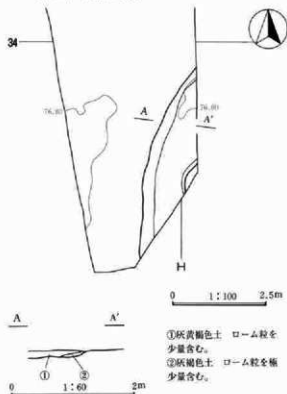
D-27グリッドに位置し、1号墳周堀を切っている。



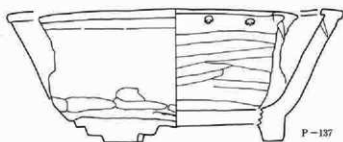
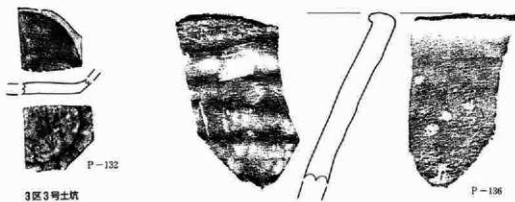
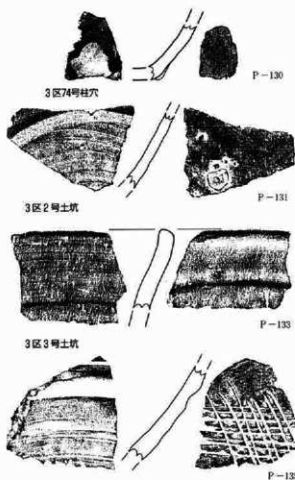
①暗褐色土 ローム粒を少量含む。②暗褐色土 ローム粒をやや多く含む。③暗褐色土 ローム粒・小ブロックをやや多く含む。④明褐色土 ロームと暗褐色土がブロックで混じり合っている。⑤暗灰黄色土 灰褐色土中にローム小ブロックが混入。⑥黄褐色土 ローム小ブロックを多く含む。⑦暗灰黄色土 灰褐色土とローム小ブロックがウミナ状に堆積。⑧灰黄褐色土 ロームブロック中に暗褐色土小ブロックが混入。⑨灰黄褐色土 ロームの大小のブロックが混じり合っている。⑩木の根痕。⑪2号住居跡。⑫15号土坑遺土。

第55図 3区2号溝

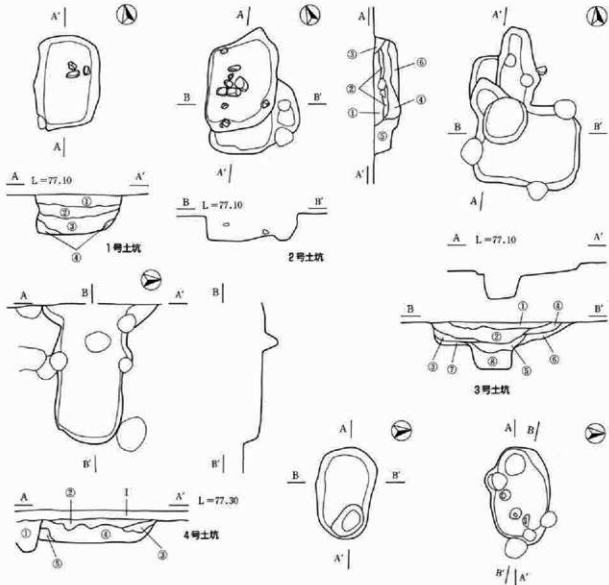
0 1:60 2m



第56図 4区1号溝



第57図 柱穴・土坑およびグリット出土遺物



1号土坑

①暗褐色土 ローム粒を極少量含む。②黒褐色土 ローム小ブロックを少量含む。③黒褐色土 ローム小ブロックを少量含む、粘性高い。④黒褐色土 黒色土小ブロックとローム小ブロックが混入。

2号土坑

覆土全体にA-B軽石粒が混入。①暗褐色土 褐色土ブロックとロームブロックが混入。②暗褐色土 ローム粒を多く含む。③黒褐色土 ローム小ブロックをやや多く含む。④黒褐色土 ロームブロックを多く含む。⑤黒褐色土 ロームブロックを含む。⑥褐色土と黒褐色土の混土層。

3号土坑

①暗褐色土 ローム小ブロックをやや多く含む、炭化物・A-B軽石を少量含む。②黒褐色土 A-B軽石・ロームブロックを多く含む。③黒褐色土 ②に類似、やや粗い。④暗褐色土 ロームブロック・炭化物を少量含む。⑤黒褐色土 ロームブロックをやや多く含む。⑥灰褐色土 ローム粒・マンガンを含む。⑦暗褐色土 ロームブロックを少量含む。⑧黒褐色土 ロームブロックを多く含む。

4号土坑

①柱穴覆土。②灰褐色土 ローム小ブロックを少量含む。③灰褐色土 ローム粒を含む。④灰褐色土 ロームブロックを多く含む。⑤暗褐色土 ローム粒多い。

5号土坑

①暗褐色土 ローム粒を多く含む。②黒褐色土 ロームブロックをやや多く含む。③黒土 ローム粒を多く含む、炭化物を少量含む。

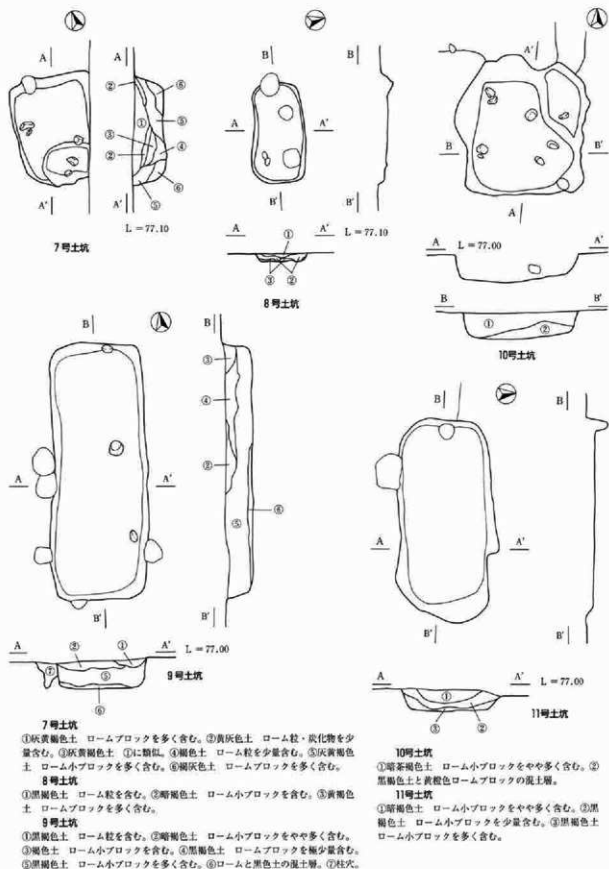
6号土坑

①柱穴覆土。②黒褐色土 ロームブロックを少量含む。③黒褐色土 ローム粒を多く含む。④暗褐色土 ローム粒を多く含む。

第58図 3区1～6号土坑

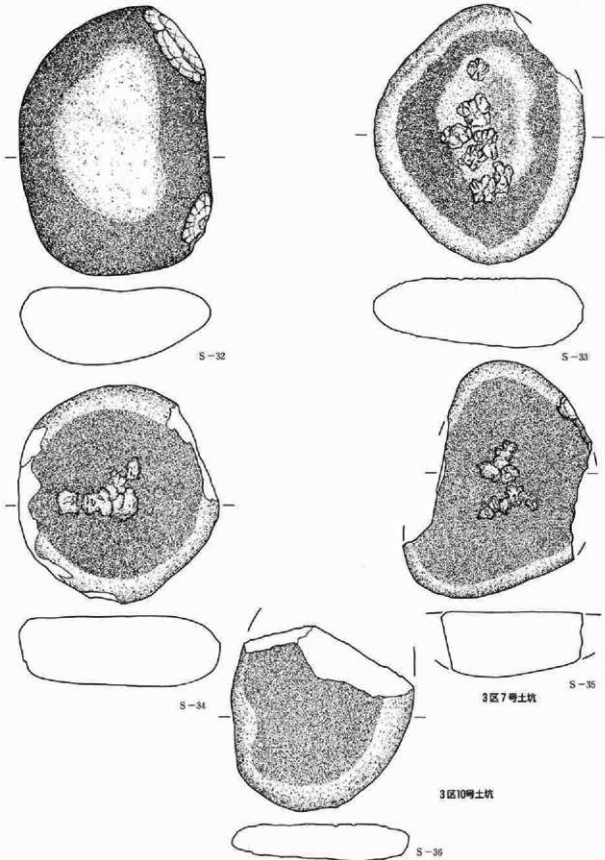
0 1:60 2m

第5章 遺構と遺物



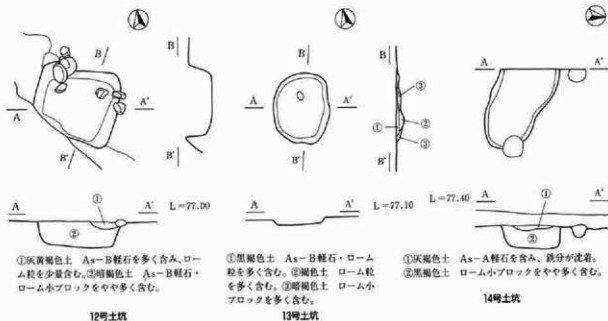
第59図 3区7～11号土坑

0 1:60 2m



第60図 3区7・10号土坑およびグレット出土遺物

0 1:3 10cm



①灰黄褐色土 As-B軽石を多く含む、ローム粒を少量含む。②暗褐色土 As-B軽石・ローム小ブロックをやや多く含む。

12号土坑

①黒褐色土 As-B軽石・ローム粒を多く含む。②褐色土 ローム粒を多く含む。③暗褐色土 ローム小ブロックを多く含む。

13号土坑

①灰褐色土 As-A軽石を含み、鉄分が沈着。②黒褐色土 ローム小ブロックをやや多く含む。

14号土坑

第61図 3区12-14号土坑

0 1:60 2m

平面形は隅丸長方形で規模は0.91×1.42m、深さ-30cmで、長軸方位はN-81°-Wである。

覆土は自然に埋没した様相を示し、覆土中より、円筒埴輪片15点が出土した。

3区6号土坑 (第58図 図版23-6)

E-27グリットに位置し、中世柱穴と重複している。

平面形は楕円形で規模は0.92×1.52m、深さ-25cmで、長軸方位はN-89°-Wである。覆土中からは土師器甕片2点が出土しただけである。

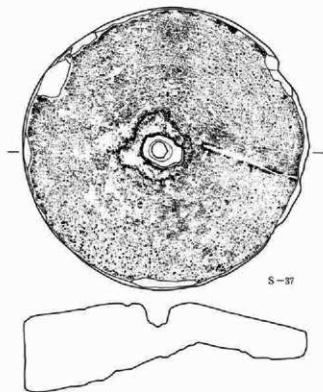
3区7号土坑 (第59図 図版23-7)

E-27グリットに位置し、中世柱穴と重複している。東壁部は未調査である。

平面形は隅丸方形で底面南端は楕円形状に一段落ちこむ。規模は1.22±α×1.72m、深さ-53cmで、長軸方位はN-7°-Eである。覆土は自然に埋没した様相を示し、河原石4点とともに台石(S-35)1点が出土した。

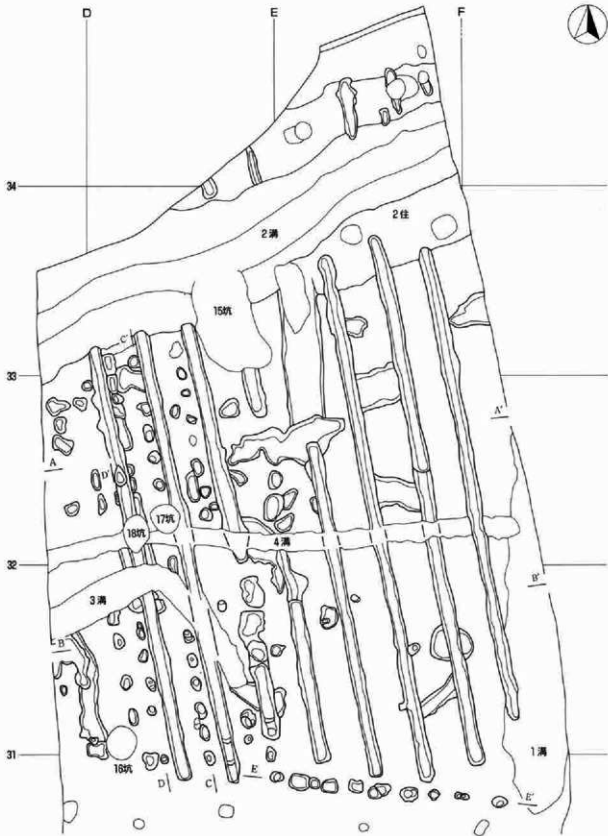
3区8号土坑 (第59図 図版23-8)

E-28グリットに位置し、1号埴堀を切り、中世柱穴と重複している。



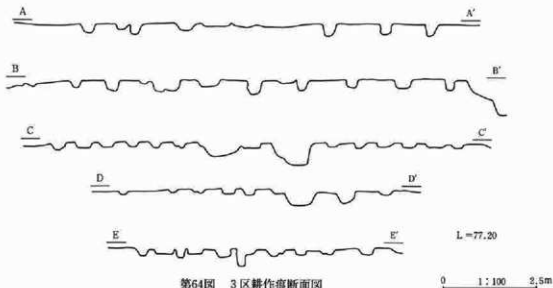
第62図 3区12号土坑出土遺物

0 1:4 10cm



第63図 3区耕作痕

0 1:100 2.5m



第64図 3区耕作痕断面図

平面形は隅長方形で規模は0.81×1.54m、深さ15cmで、長軸方位はN-83°-Wである。覆土中からは遺物等は出土しなかった。

3区9号土坑 (第59図 図版24-1・2)

E-29グリットに位置し、5号溝や中世柱穴を切っている。

平面形は隅丸長方形で規模は1.50×4.02m、深さ49cmで、長軸方位はN-6°-Eである。

覆土は短期間と考えられるが自然に埋没した様相を示し、土師器坏・甕片や円筒埴輪片19点が出土した。

3区10号土坑 (第59図 図版24-3・4)

E-29グリットに位置し、中世柱穴と重複している。

平面形は不整隅丸方形で北東壁は2段に落ち込む。規模は2.10×2.22m、深さ40cmで、長軸方位はN-6°-Eである。

覆土は短期間と考えられるが自然に埋没した様相を示し、覆土中からは土師器甕片4点と台石(S-36)1点、河原石7点が出土した。

3区11号土坑 (第59図 図版24-5・6)

D-30グリットに位置し、1号埴輪堀を切り、中

世柱穴と重複している。

平面形は隅丸長方形で規模は1.52×3.20m、深さ38cmで、長軸方位はほぼ東西である。覆土は短期と考えられるが自然に埋没した様相を示し、遺物は出土しなかった。

3区12号土坑 (第61図 図版24-7)

D-29グリットに位置し、1号埴輪堀や7号溝を切り、中世柱穴と重複している。

平面形は隅丸方形で規模は1.11×1.33m、深さ43cmで、長軸方位はN-68°-Wである。

覆土は自然に埋没した様相を示し、覆土中からは土師器甕片4点と石臼(S-37)1点が出土し、河原石4点も混入していた。

3区13号土坑 (第61図 図版24-8)

E-26グリットに位置し、1号埴輪堀を切り、中世柱穴と重複している。

平面形は楕円形で規模は0.90×1.10m、深さ13cmで、長軸方位はN-12°-Eである。遺物等は出土しなかった。

3区14号土坑 (第61図)

D-25グリットに位置し、中世柱穴と重複する。西端部は調査区外となる。

平面形は楕円形と推定され、規模は $0.80 \times 1.43 + \alpha$ m、深さ-36cmで、長軸方位は $N-70^{\circ}-W$ である。

覆土は自然に埋没した様相を示し、灰軸皿(P-134)片1点が出土した。

4 耕作痕

3区耕作痕 (第63・64図 図版25-1)

3区ローム台地の北半に壺掘り状の耕作痕と布掘り状の耕作痕が検出された。これらの耕作痕はA s-A 軽石を含む第1層表土が入っており、近・現代に属するものである。

壺掘り状の耕作痕は布掘り状のものよりも古く、東西に1列南北に6列検出され、0.50-1.00mの間隔で不定形に掘り込まれている。

布掘り状の耕作痕は幅40-50cm、深さ-50-70cmの溝が約1.30mの間隔で9列、南北に検出された。

これらの耕作痕には土師器類や近・現代の陶磁器片等が約70点混入していた。

4区耕作痕 (第65図 図版25-2・3)

4区ローム台地上でも3区の布掘り状の耕作痕の続きの耕作痕が3列検出され、東西方向の耕作痕も2列検出された。これらも覆土は第1層表土であり、近・現代に属するものである。

4区で検出された耕作痕には掘り込み時の工具痕跡が認められたが3区の耕作痕には残っていないかった。



第65図 4区耕作痕

0 1:60 2m

第6章 まとめ

1 中川の古環境

今回の調査で中川の最も古い谷内で約1.3~1.4万年前のテフラが確認されたことは約1.5万年前と推定されている藤岡台地の段丘と符合するものである。

また、谷内で検出された前橋泥炭層（Ⅲ層黒色粘質土）に相当する土層の分析によれば、約1.3万年前~約1.5万年前の植生は亜寒帯常緑針葉樹と冷温落葉広葉樹林が周辺地域に分布していたと推定され、最終氷期の環境が反映されていた。

2 旧河道について

今回の調査では自然木が多量に出土した縄文時代後期~晩期に推定される河道と、弥生時代と推定される河道の2本が検出された。

縄文時代河道の自然木は試料の採取方法や巨木の存在に資料的片寄りが一部あるが、広葉落葉樹林を中心とした当時の自然木の様相を一部示すものと考えられる。

3 古墳時代について

① 周溝墓

検出された2基の周溝墓は前方後方形と考えられ近接した位置にあり、舌状台地の先端部に占地している。

周溝墓から出土した底部穿孔の二重口縁壺は特徴を同じくし、出土状態も同様である。

器形の特徴としては口縁部は二重に強く外反し、端部は上段が掴み出しがなく鋭い稜を持ち、下段は下方へ弱く掴み出され、掴み出しの退化傾向が見られる。胴部はやや半球形で、底部は焼成前の穿孔である。

2個体とも外面の磨滅が著しいが技法はハケナデ後粗く研磨され、やや技法の退化傾向が見られる。文様の施文はなく外面は赤色塗彩されている。

伴出した土器はS字口縁台付甕・甕・高坏・器台であるがいずれも細片である。

本遺跡出土の二重口縁壺は編年観の中では後半に位置付けられるものであり、2基の周溝墓は前半期の荒砥北原1号周溝墓・下佐野寺前地区3号周溝墓・倉賀野万福寺1号周溝墓等に続く、後半期の下郷SZ01・32号周溝墓・堀の内CK-2号周溝墓・御正作1号周溝墓等と同様の時期と考えられる。

また、今回の調査で周溝内へ階段を付けて下り込む墓道が検出されたことは、周溝墓の形態等を考える上で新たな資料となるものであろう。

② 3区1号墳（正上寺山古墳）

今回の調査では部分的な確認に止まったが、本古墳は6世紀後半に属し、葦石・埴輪樹立を持つ墳丘規模約33mの円墳であることが判明した。

中川流域の後期を中心とする古墳群は上流域に小林古墳群が、中流域右岸に野見塚古墳が、下流域左岸に戸塚古墳群が存在する。本古墳は中流域左岸の舌状台地上に位置しており、戸塚古墳群とは距離を置くものの戸塚古墳群に属するかその一支群にあたる古墳と推定される。

③ 竪穴住居

今回検出された2軒の住居跡は、舌状台地上に占地する鬼高期前半の一般的な竪穴住居跡である。

後期に至り中川に沿う低地帯の再開発に伴い、藤岡台東線に拠点を置く住居群の一部が、鬼高期前半の一時期的生産基盤に近接した舌状台地へ進出したものと考えられる。

④ 溝群

今回の調査では1・2区7号溝から多量の土器類や木製品・石製品が出土し、他の溝からも少量ながら土器類が出土した。以下、各溝より出土した土器類の特徴を記すとともに、重複関係等により確認された溝間の前後関係を記し、溝群の変遷を述べることとする。

1区1号溝の高坏(P-71)は坏部を欠損するが、脚柱部が細長く裾部は強く屈曲し短い。石田川期後半の特徴を持つ。

1区2号の高坏(P-73)は7号溝の高坏類に近い特徴を持ち、器台(P-72)や広口埴(P-74)は石田川期後半の特徴を持つ。

1区3号溝の甕(P-75)の口縁部は短くわずかに外反し、石田川期前半の様相を示し、溝の埋没過程で混入したものと考えられる。また、1区4号溝からは7号溝と同様の甕片が出土した。

1区5・6号溝からは鬼高Ⅱ期の土器片や埴輪片が出土した。

1・2区7号溝の小型甕(P-78-83)は、頸部がくの字に屈曲し口縁部は短く内湾ぎみに開く。胴部はやや偏球形をなし底部は丸底で、胴部外面ヘラケズリ、内面ナアといった、器形・技法ともほぼ共通した特徴を持つ。小型壺(P-84-87)は口縁部が直線的に開き、胴部は球形と偏球形とが、底部も丸底と凹底とがある。技法は小型甕と共通する。埴は口縁部がやや長く直線的に開き、胴部が球形をなすもの(P-88)と、口縁部がやや内湾ぎみに大きく開き、胴部がやや偏球形をなすもの(P-89-90)とがある。高坏(P-91-98)も器形に微差を持つ2種がある。ひとつは坏部が浅く内湾してそのまま立ち上がり、脚部は脚柱部が細く直線的に下り裾部が緩やかに外反する。他のひとつは坏部が浅く内湾して開き口縁部が外反し、脚部は脚柱部が内湾ぎみに膨みを持って下り裾部が強く外反する。外面の調整はともにヘラナアや放射状研磨が見られる。

P-99・100の単口縁壺は共通した特徴を持つ。口縁部は外傾して立ち上がり上半で外反し、端部は上方に掴み出されている。胴部は球形で底部はやや突出した平底である。胴部外面は斜め上方にヘラケズリされている。甕の内、P-101の胴部外面にはハケ目が見られ、P-102は口縁部が強く外反する。P-103-109はほぼ共通の特徴を持つ。口縁部は短く外傾し頭部はくの字に屈曲する。胴部は球形に近い外面は斜め上方にヘラケズリされ、内面は横方向

にヘラナアされている。P-110-122の台付甕も共通した特徴を持つ。口縁部はわずかに屈曲し外反も弱く、わずかにS字口縁の名残を残す。胴部は長胴化し外面は斜め上方へのヘラケズリとなっている。脚部はハの字に直線的に開き端部内面は折り返されている。以上の点から、1・2区7号溝の出土土器は石田川期後半と泉期初頭の特徴を持つものと考えられる。

なお、2区1-6・8-10号溝からは石田川期や鬼高Ⅱ期の土器片が少量出土し、4区2-8号溝からは石田川期後半と泉期初頭と考えられる土器片がわずかながら出土した。

次に掘り込み面が確認された溝、および溝間の重複関係は以下の通りである。

掘り込み面が確認された溝の内、古い順から記すると。1区3号溝がⅤ-1層上面から、1区2号溝・4区7・8号溝がⅣ-2層中から、1・2区1・7号溝と4区2-6号溝がⅣ-2層上面から、1区4号溝がⅣ-1層上面からとなる。

また、溝間の重複関係としては、1区では3号溝→2号溝→4号溝、1号溝→7号溝→5・6号溝の関係にある。2区では7号溝が全てに古く、他は1号溝→2号溝、4号溝→3号溝、5号溝→6号溝、10号溝→3号溝、10号溝→6号溝→9号溝の関係にある。4区では8号溝→7号溝の関係にあり、4号溝は改修を行い3号溝と2号溝を付け替えている。

以上の点から、本道跡で確認された古墳時代の溝群は時期では前期-中期初頭のもの、後期前半のものに分けられ、両者は断絶している。

最古の溝は1区3号溝で、その間削は前期初頭に比定され、1区2号溝から1区4号溝へと改修を繰り返しながら中期初頭まで存続する。本溝は低地中央部寄りを流下する幹線水路として、継続性が高かったものと考えられる。

また、1区1・7号溝は前期後半-中期初頭(1区2・4号溝と併存する。)にかけて、台地縁部を巡る大水路として機能していたと考えられる。

また、4区の溝群も前期後半-中期初頭にかけて

改修・付け替えを行いながら、舌状台地北方に広がる低地湾入部に沿う台地縁辺部の小水路として機能していたと考えられる。これらの溝群は中期初頭で一端途絶えるが、再び溝が開削されるのは後期に入ってからである。

2区で確認された1・6・8・10号溝は改修を繰り返しながら、後期後半を中心に台地縁辺部を巡る小水路として機能していたと考えられる。

今回の調査では水田の痕跡は検出されなかったが、対応する土層ではイネ科のプラント・オパールがやや低い値ではあるが確認されており、低地帯で水田耕作を行っていた可能性は十分にある。溝群は水田開発に伴う灌漑用水路として、取水、排水の機能をしていたものと考えられる。

⑤ 火鑽板

1区7号溝の底面近くから出土した火鑽板は伴出土器により前期後半～中期初頭の時期のものであり、県内では3例目となる。

古代における火鑽板の一般例は長さ10～30cm、厚さ10～20mm（10mm前後が多い）、火鑽臼の径は10mm前後で、柁目・板目の両者があり、針葉樹が多いとされる。

これらの例からすると、7号溝出土の火鑽板は形状・規模ともほぼ一般的な例であり、広葉樹を使用している点は身近な材を利用したものと考えられる。

4 奈良・平安時代について

今回の調査では水田の痕跡は検出されなかったが、As-B 軽石直下のⅢ層が水田として利用されていた高い可能性が指摘でき、古墳時代後期以降、As-B 軽石降下時まで継続的に水田耕作が行われていたと考えられる。なお、古墳時代後期以降、台地部から水田への給水を行う手法が加わった可能性がある。

5 中・近世について

中世前半の遺溝・遺物は不明であるが14・15世紀以降、舌状台地南半は建物群が繰り返し建て替えられ、長期にわたり居住空間として占拠される。この間、薬研型状の2本の溝は居住区の北限と東限を画する溝として、一時期機能していたものと考えられる。また、建物群と重複する土坑群は長方形を呈する大型のものと隅丸方形を呈する小型のものに分けられ、時期も建物群と重なるが性格は不明である。

以上、今回の調査は小範囲ではあったが、藤岡台地東縁を流下する中川中流域の歴史の変遷の一部を垣間見ることができた。

縄文～弥生時代にかけてはわずかに人為の痕跡を見るだけであるが、古墳時代前期に至り、中川に沿う低地帯は水田地帯として開発されて行ったことが検出された多くの灌漑用水路により判明した。また、生産基盤を見据える舌状台地先端部には小首長の奥津城である周溝墓群が形成され、居住域はおそらく藤岡台地東縁部の一部に占拠していたと考えられる。

その後、中期では遺跡の動勢は一端不明となるが後期になると低地帯は水田地帯として再開発され、舌状台地先端部まで居住域が進出するようになった。しかし、後期後半には舌状台地上は再び墓域として占地されるようになる。

奈良・平安時代には藤岡台地周辺の遺跡の動向と同じく、水田耕作面の拡大が図られて行ったと考えられる。しかし、As-B 軽石の降下により水田耕作に大打撃を受け、Ⅲ層黒色粘質土面は現在に遺存したものと考えられる。

参考文献

- (1) 「火の道具」高橋幸男 1985 柏書房

遺 物 観 察 表

遺物番号	種類・器種	出土位置	残存状態	胎土・色調	特徴・その他
P-1 第10図	縄文土器 浅鉢	1区3面 旧河道	口縁部片	◎砂粒を多く含む。 ◎にぶい赤褐色	口縁端部に刺突による列点を配し、下部に平行沈線により木葉文の区画をなす。沈線間には筋目が施される。器面磨滅。図説3
P-2 第10図	縄文土器 深鉢	1区3面 旧河道	胴部片	◎白色鉱物粒を多く含む。 ◎橙色	半截竹管断面使用の平行沈線と鋸歯状沈線2条が横位に施される。器面磨滅。図説3
P-3 第10図	縄文土器 深鉢	1区3面 旧河道	胴部片	◎粗砂粒を多く含む。 ◎淡黄色	隆帯が2条横位に走り、器面が磨滅しているため筋は不明であるが縄文が施されている。加曾利E出現期
P-4 第10図	縄文土器 深鉢	1区3面 旧河道	口縁部片	◎粗砂粒を多く含む。 ◎にぶい橙色	透しのある突起を持つと考えられ、口縁部は隆帯で区画し内部に沈線がめぐる。口縁直下よりL R縄文が施されている。大木系加曾利E1
P-5 第10図	縄文土器 深鉢	1区3面 旧河道	口縁部片	◎小礫・砂粒を多く含む。 ◎灰白色	口縁部文様帯は1条の隆帯で横位に区画し、渦巻文によって連結させていると考えられる。区画内は同位の沈線で充填していると考えられる。器面磨滅。加曾利E3(古)
P-6 第10図	縄文土器 深鉢	1区3面 旧河道	口縁部片	◎粗砂粒を多く含む。 ◎にぶい橙色	波状口縁をなすと考えられ、口唇部直下に乱れた交互刺突による沈線がめぐる。以下は器面が磨滅しているため不明。加曾利E3?
P-7 第10図	縄文土器 深鉢	1区3面 旧河道	胴部片	◎砂粒を多く含む。 ◎淡黄色	地文にL R縄文が縦位に施され、横位に走る隆帯から蛇行する隆帯が垂下する。器面磨滅。加曾利E3(古)
P-8 第10図	縄文土器 深鉢	1区3面 旧河道	胴部片	◎粗砂粒を多く含む。 ◎にぶい橙色	器面が磨滅しているため地文は不明であるが、平行する隆帯が弧状に施され1条の隆帯が蛇行して垂下する。加曾利E3(古)
P-9-1 P-11 第10図	縄文土器 深鉢	1区3面 旧河道	胴部片	◎粗砂粒を多く含む。 ◎灰白色	3点は同一側面と考えられ、平行する4条の垂下沈線と弧状をなす平行沈線によって文様が構成され、円形刺突が施されている。沈線は幅が広い。器面磨滅。加曾利E3
P-12 第10図	縄文土器 深鉢	1区3面 旧河道	口縁部片	◎砂粒を多く含む。 ◎淡黄色	円孔を持つ把手片で外面は孔に沿って沈線と隆線がめぐり、内面も沈線が施される。器面磨滅。堀之内1
P-13 第10図	縄文土器 深鉢	1区3面 旧河道	口縁部片	◎砂粒を含む。◎ 黒褐色	口唇部外面がくの字状に肥厚し、直下から縄文が施されているが器面が磨滅しているため明確ではない。堀之内2?
P-14 第10図	縄文土器 深鉢	1区3面 旧河道	口縁部片	◎砂粒を含む。◎ 暗灰黄色	平行口縁に沿って1条の沈線が横位に走り、内部にL R縄文が充填されている。器面磨滅。加曾利B1?
P-15 第10図	縄文土器 深鉢	1区3面 旧河道	口縁部片	◎砂粒を多く含む。 ◎にぶい橙色	強く外反する無文の口縁部片である。器面磨滅。堀之内2?
P-16 第10図	縄文土器 深鉢	1区3面 旧河道	口縁部片	◎砂粒を多く含む。 ◎淡黄色	口唇部外面がくの字状に肥厚する無文土器で、胴部は外湾ぎみとなる。器面磨滅。堀之内2?
P-17 第10図	縄文土器 深鉢	1区3面 旧河道	胴部片	◎砂粒を多く含む。 ◎にぶい橙色	弧状をなす平行沈線が施され、縄文を充填している。器面磨滅。堀之内2?
P-18 第10図	縄文土器 深鉢	1区3面 旧河道	胴部片	◎砂粒を多く含む。 ◎にぶい橙色	沈線で文様区画し、区画内にL Rを充填施文している。弧状の区画文間に三叉文がみられる。変形3a?
P-19 第10図	縄文土器 深鉢	1区3面 旧河道	胴部片	◎砂粒を多く含む。 ◎灰白色	斜行沈線が施される。器面磨滅。加曾利B
P-20 第10図	縄文土器 深鉢	1区3面 旧河道	胴部片	◎砂粒を多く含む。 ◎黒褐色	斜行沈線が施される。器面磨滅。加曾利B
P-21 第10図	縄文土器 注口土器	1区3面 旧河道	注口部片	◎砂粒を多く含む。 ◎褐色	円筒状をなし上縁部に突起を持つ。後期中葉。

遺物観察表

遺物番号	種類・器種	出土位置	残存状態	粘土・色調	特徴・その他	
P-22・ 第12区	縄文土器 深鉢	4区1号 周溝墓	胴部片	◎砂礫を含む。 ◎暗灰黄色	同一個体の破片で、ループ文を地文とし竹管により山形に平行沈線が施される。岡山	
P-24 第12区	縄文土器 深鉢	1区2面 7号溝	頸部-口 縁部片	◎砂粒を多く含む。 ◎灰黄色	頸部はくびれ口縁部は外反し、口唇部がくの字に内傾する。口唇部には1条の沈線めぐり、刻みを施した垂下帯部には頸部の2条の沈線上で8の字状の貼付文が付けられている。器面磨滅。堀之内1	
P-25・ P-26 第12区	縄文土器 深鉢	1区2面 7号溝	胴部片	◎ともに砂粒を多く含む。 ◎黒褐色と褐色	別個体であるがともに3条の平行沈線が垂下する。堀之内1	
遺物番号	種類・器種	出土位置	残存状態	計測値 (cm)	粘土・焼成・色調	特徴・その他
P-27 第17区	土師器 坏	3区1住 カマド前	写残存	器高3.7口径 12.8残径11.0	◎砂粒を含む。◎ 普通◎にぶい褐色	口縁部はわずかに屈曲して外方に立ち上り、残は丸く、体部は浅い。器面磨滅し整形不明。
P-28 第17区	土師器 坏	3区1住 カマド前	ほぼ完形	器高4.9口径 13.3残径12.2	◎砂粒を含む。◎ 普通◎にぶい褐色	口縁部はわずかに外反して立ち上り頸部は丸く肥厚する。残は縁や口に突出し体部はやや深い。器面がやや磨滅しているが口縁部内外面横ナデ、体部外面へラケズリ。
P-29 第17区	土師器 甕	3区1住 カマド前	胴部下平 -底部片 写残存	残存高7.6 底径4.6	◎粗砂粒・小礫を 含む。◎普通◎明 赤褐色	胴部は緩やかな膨みを持ち、底部はやや突出する平底。胴部外面斜め上方へラケズリ、内面ナデ。底部に木炭圧痕あり。
P-30 第17区	土師器 甕	3区2住 南東隅覆 土	胴部上半 片写残存	残存高13.5 最大最大径22 .3	◎粗砂粒を多く含 む。◎普通◎明赤 褐色	中位に最大径を持つと考えられる膨みのある胴部で、外面は斜め上方へラケズリ、内面はナデ整形。
遺物番号	種類・器種	出土位置	残存状態	粘土・焼成・色調	特徴・その他	
P-31 第23区	円筒埴輪	3区1墳 周堀覆土	口縁部片	◎砂粒を多く含む。 ◎普通◎棕色	やや外反した断面で、口縁端部はわずかに山形をなし残は弱い。外面縦ハケ、内面横ハケ。	
P-32 第23区	円筒埴輪	3区7溝 覆土	口縁部片	◎砂粒を多く含む。 ◎不良◎棕色	やや外傾した断面で、口縁端部は斜めの平面をなし残は弱い。外面縦ハケ、内面横ハケ。器面やや磨滅。	
P-33 第23区	円筒埴輪	3区1墳 周堀覆土	口縁部片	◎粗砂粒を多く含 む。◎不良◎棕色	やや外反した断面で、口縁端部はM字状をなし残は弱い。外面縦ハケ、内面横ハケ。器面やや磨滅。	
P-34 第23区	円筒埴輪	3区1墳 周堀覆土	口縁部片	◎砂粒を多く含む。 ◎普通◎棕色	強く外反した断面で、口縁端部は丸く残は弱い。端部内外面横ナデ、外面粗い縦ハケ、内面粗い斜めハケ。	
P-35 第23区	円筒埴輪	3区1墳 周堀覆土	胴部片	◎粗砂粒を多く含 む。◎良好◎明赤 褐色	断面がM字状の低く狭い凸帯が付き、残は弱い。内面縦線。	
P-36 第23区	円筒埴輪	3区1墳 周堀覆土	胴部片	◎粗砂粒を多く含 む。◎良好◎明赤 褐色	断面がM字状の低く狭い凸帯が付き、上端残は強く下端残は強くやや高い。内面斜めハケ。	
P-37 第23区	円筒埴輪	3区4坑 覆土	胴部片	◎粗砂粒を多く含 む。◎良好◎明赤 褐色	断面がM字状の低く狭い凸帯が付き、残はやや強く上端がやや高い。円形透し孔の一部が残る。内外面縦ハケ。内面一部縦線。	
P-38 第23区	円筒埴輪	3区1墳 周堀覆土	胴部片	◎砂粒を多く含む。 ◎普通◎棕色	断面が三角形の低く狭い凸帯が付き、残は弱い。円形透し孔の一部が残る。外面縦ハケ、内面斜めハケ。	
P-39 第23区	円筒埴輪	3区1墳 周堀覆土	胴部片	◎砂粒を多く含む。 ◎良好◎棕色	断面が台形の低く狭い凸帯が付き、残は弱い。外面縦ハケ、内面斜めハケ。	

遺物番号	種類・器種	出土位置	残存状態	粘土・焼成・色調	特徴・その他
P-40 第23回	円筒埴輪	3区5坑 覆土	胴部片	◎粗砂粒を多く含む。 ◎不良◎橙色	断面が台形の低く狭い凸帯が付き、稜は弱く上端がやや高い。外面縦ハケ、内面斜めハケ。器面やや磨滅。
P-41 第23回	円筒埴輪	3区1墳 周層覆土	胴部片	◎粗砂粒を多く含む。 ◎良好◎赤褐色	断面が台形の低く狭い凸帯が付き、稜は弱い。外面縦ハケ、内面ナデ。粘土結核み上げ痕が内面に残る。
P-42 第23回	朝顔形埴輪	3区1墳 周層覆土	胴部片	◎粗砂粒を多く含む。 ◎普通◎明赤褐色	やや内湾する断面で、断面が台形で低く狭い凸帯が付き、稜は弱い。円形透し孔の一部が残る。外面縦ハケ、内面斜めハケ。
P-43 第23回	朝顔形埴輪	3区1墳 周層覆土	口縁部下 端～胴部 上端片	◎粗砂粒を多く含む。 ◎不良◎橙色	屈曲した断面で、断面が台形でやや高く狭い凸帯が付き、稜はやや強い。外面縦ハケ、内面横ハケ後ナデ調整。内面に粘土結核み上げ痕が残る。器面やや磨滅。
P-44 第23回	朝顔形埴輪	3区1墳 周層覆土	口縁部下 端片	◎粗砂粒を多く含む。 ◎普通◎橙褐色	強く外反した断面で、断面が台形と考えられる低くやや広い凸帯が付き、稜は弱い。外面縦ハケ、内面横ハケ後ナデ調整。
P-45 第23回	朝顔形埴輪	3区1墳 周層覆土	胴部上端 片	◎粗砂粒を多く含む。 ◎良好◎明赤褐色	内傾する断面で、断面が台形で低くやや広い凸帯が付き、稜は弱い。外面縦ハケ、内面横ハケ後ナデ調整。内面やや磨滅。
P-46 第23回	円筒埴輪	3区1墳 周層覆土	胴部片	◎粗砂粒を多く含む。 ◎普通◎橙褐色	円形の透し孔の一部が残る。外面縦ハケ、内面割離。
P-47 第23回	円筒埴輪	3区4坑 覆土	胴部片	◎粗砂粒を多く含む。 ◎普通◎明赤褐色	円形の透し孔の一部が残る。外面縦ハケ、内面ナデ。
P-48 第23回	円筒埴輪	3区1墳 周層覆土	基部片	◎粗砂粒を多く含む。 ◎普通◎明赤褐色	やや内湾みに立ち上る断面である。外面横ハケ後縦ハケ。器面の割離が著しい。
P-49 第24回	円筒埴輪	3区1墳 周層覆土	胴部片	◎粗砂粒を多く含む。 ◎良好◎明赤褐色	内外面とも縦ハケ。
P-50 第24回	円筒埴輪	3区8溝 覆土	胴部片	◎粗砂粒を多く含む。 ◎不良◎橙褐色	外面縦ハケ、内面ナデ調整。器面やや磨滅。
P-51 第24回	円筒埴輪	3区1墳 周層覆土	胴部片	◎粗砂粒を多く含む。 ◎普通◎橙褐色	外面縦ハケ、内面横ハケ。
P-52 第24回	円筒埴輪	3区1墳 周層覆土	胴部片	◎粗砂粒を多く含む。 ◎普通◎橙褐色	外面縦ハケ、内面横ハケ。
P-53 第24回	円筒埴輪	3区7溝 覆土	胴部片	◎粗砂粒を多く含む。 ◎普通◎橙褐色	外面縦ハケ、内面ナデ調整一部割離。
P-54 第24回	円筒埴輪	3区1墳 周層覆土	胴部片	◎粗砂粒を多く含む。 ◎普通◎明赤褐色	外面縦ハケ、内面横ハケ。
P-55 第24回	円筒埴輪	3区1墳 周層覆土	胴部片	◎粗砂粒を多く含む。 ◎良好◎明赤褐色	外面縦ハケ、内面ナデ調整一部縦ハケ。
P-56 第24回	円筒埴輪	3区205 号柱穴	胴部片	◎粗砂粒を多く含む。 ◎良好◎橙褐色	外面縦ハケ、内面ナデ調整大部分が板状に割離。器面に屈曲があり、形象埴輪の一部の可能性あり。
P-57 第24回	円筒埴輪	3区1墳 周層覆土	胴部片	◎粗砂粒を多く含む。 ◎良好◎橙褐色	外面縦ハケ、内面ナデ調整。粘土結核み上げ痕が内面に残る。

遺物観察表

遺物番号	種類・器種	出土位置	残存状態	粘土・焼成・色調	特徴・その他	
P-58 第24区	形象埴輪	3区1墳 周溝覆土	基部?片	◎粗砂粒を多く含む。 ◎不良、還元状態。 ◎灰色	やや内湾した断面で、上端に粘土の接合痕がある。外面縦横2種の縦ハケ、内面ナデ調整一部縦ハケ。	
P-59 第24区	形象埴輪	3区1墳 周溝覆土	基部?片	◎粗砂粒を多く含む。 ◎良好◎赤褐色	外面上半は粘土の刺痕があり、下半は縦ハケ。内面ナデ調整。	
P-60 第24区	形象埴輪	3区2墳 覆土	輪の前輪 か後輪片	◎粗砂粒を多く含む。 ◎普通◎明赤褐色	P-60からP-64は馬形埴輪の一部と考えられる。上面の平担部は幅0.9cmで、長軸に沿って中心に窪みを持つ。外面斜め方向のハケ目。	
P-61 第24区	形象埴輪	3区1墳 周溝覆土	輪の前輪 か後輪片	◎粗砂粒を多く含む。 ◎普通◎褐色	P-60と異なり上面の平担部に窪みは見えず、幅は1.4cmを計る。外面斜め方向のハケ目。	
P-62 第24区	形象埴輪	3区8溝 覆土	降泥の下 端部片?	◎粗砂粒を多く含む。 ◎普通◎褐色	磨滅しているため細部は明らかでないが、縦状を呈し、表面のみに縦方向のハケ目と弧状の沈線が見られる。	
P-63 第24区	形象埴輪	3区80号 柱穴	降泥の下 端部片?	◎粗砂粒を多く含む。 ◎良好◎褐色	縦状を呈し、下面平担部は長軸に沿って窪みを持つ。表面は斜め方向のハケ目と直線的な沈線が見られ、表面は斜め方向のハケ目。	
P-64 第24区	形象埴輪	3区3墳 覆土	銅板の先 端部片?	◎粗砂粒を多く含む。 ◎普通◎褐色	緑金の表現は見られず、銅を装したと思われる粘土粒の張り付けが見られる。	
P-65 第24区	形象埴輪	3区7溝 覆土	舟輪片	◎粗砂粒を多く含む。 ◎普通◎明赤褐色	径3.5cmの球形をした胎で、上端に1条の刻み目を入れ外面はナデ調整が加えられている。内部は中空となっている。	
遺物番号	種類・器種	出土位置	残存状態	計測値 (cm)	粘土・焼成・色調	特徴・その他
P-96 第21区	土師器 二重口鉢蓋	4区2号 周溝墓 周溝覆土 上層	胴部上半 -口縁部 下半残存	残存高24.5 下段口径21.8 胴部径12.8	◎粗砂粒を含む。 ◎不良 ◎灰色	上段を欠損するが二重口縁で、胴部はわずかに外反して立ち上り、下段口縁部は強く外反し端部は鋭い稜を持つ。内面もやや強い稜を持って屈曲する。胴部は球形をなす。内外面とも器面の磨滅が著しいが、口縁部や胴部外面にハケナデ調整痕や赤色塗彩痕が見える。
P-67 第21区	土師器 二重口鉢蓋	4区1号 周溝墓 周溝覆土 上層	上段口縁 部の写と 胴部下半 写を欠損	器高36.8 口径32.4 胴部径12.7 最大径35.0 底部孔径9.6	◎粗砂粒を多く含む。 ◎良好 ◎赤褐色	二重口縁で胴部はやや外反して立ち上り、上下段の口縁部はともに強く外反する。内面もやや強い稜を持って屈曲し、上段口縁は段を持って立ち上る。上段口縁端部はやや鋭り、下段口縁端部は下方へ突き出され鋭い稜を持つ。胴部は球形をなし、底部は焼成前の穿孔。口縁部と胴部下半の外面はハケナデ調整され、胴部上半外面には棒状工具により研磨されており、赤色塗彩痕が見える。内面は磨滅が著しく調整不明。
P-68 第21区	土師器 美	4区1号 周溝墓 周溝覆土	口縁部- 胴部上半 片	残存高10.0 推定口径16.8	◎粗砂粒を多く含む。 ◎普通 ◎鈍い灰色	口縁部はわずかに屈曲して外反し鋭い。胴部はやや膨らみを持つ。口縁部内外面横ナデ。胴部上半外面ハケナデ、中位ヘラケズリ、内面ハケナデ、縦横み痕が見える。器面やや磨滅。
P-69 第21区	土師器 器台	4区1号 周溝墓 周溝覆土	器受部下 半-脚部 上半片	残存高4.5 脚部径3.3	◎粗砂粒を含む。 ◎良好 ◎褐色	脚部はわずかに内湾きみに開き、器受部はわずかに外反して立ち上る。脚部側面には円形透し孔が3つあり、基部にも径1.3cmの円孔が穿孔されている。脚部外面ハケナデ、基部-器受部外面横ナデ。
P-70 第21区	土師器 高杯	4区1号 周溝墓 周溝覆土	器受部と 脚部部を 欠損	残存高6.1 脚部径3.3	◎粗砂粒を含む。 ◎普通 ◎にぶい褐色	脚部は内湾きみに大きく開き、3個ずつの円形透し孔が2段に7島に穿孔されている。外面はハケナデ、内面基部はヘラケズリ、胴部はハケナデ。器面やや磨滅。

遺物番号	種類・器種	出土位置	残存状態	計測値 (cm)	胎土・焼成・色調	特徴・その他
P-71 第27区	土師器 高坏	1区2面 1溝底面	脚部残存	残存高9.1脚 基部径2.9脚 裾部径9.1	◎砂粒を含む。◎ 普通◎褐色	脚柱部は細長くやや内湾してわずかに開き、裾部は強く外反して短かく開く、端部は丸い。胴柱部内面指ナデ。裾部外面ヘラケズリ後横ナデ。内面横ナデ。
P-72 第27区	土師器 器台	1区2面 2溝底面	脚部与 残存	残存高5.5脚 基部径3.3脚 裾部径10.0	◎砂粒を多く含む。 ◎普通◎褐色	小型の器台で、脚部は強く内湾して開き端部は丸い。径9mmの円孔が3つ側面に穿孔され、基部も径8mmの円孔が穿孔されている。器面磨成。
P-73 第27区	土師器 高坏	1区2面 2溝覆土	坏部底面 一脚部上 半残存	残存高9.5脚 基部径2.7	◎砂粒を多く含む。 ◎普通◎褐色	坏部はやや内湾して開く。脚部は直線的に開き下半で強く外反する。外面は磨成が著しく、脚部内面は紋り目が明瞭で下半は横ナデ。
P-74 第27区	土師器 広口罎	1区2面 2溝覆土	与残存	器高5.8口径 18.0径径11.8	◎砂粒を多く含む。 ◎普通◎明赤褐色	口縁部は直線的に斜め上方へ大きく開き、端部はやや内湾する。凹縁状の縁を持ち、底部は浅く丸い。器面の磨成が著しいが、口縁部内外面横ナデ、底部外面不定方向のヘラケズリ。
P-75 第27区	土師器 壺	1区2面 3溝覆土	口縁部一 脚部上半 残存	残存高10.8口 径14.8推定最 大径18.9	◎粗砂粒を多く含む。 ◎不良◎褐色	頸部は短く直線的に立ち上り、口縁部も短く外反し端部は丸い。胴部はやや膨みを持つ。器面の磨成が著しいが、胴部内面に輪積み痕が残る。胴部外面は一部が熱を受け赤化。
P-76 第27区	円筒埴輪	1区2面 5溝覆土	口縁部片	—————	◎砂粒を多く含む。 ◎普通◎褐色	やや外反する断面で、口縁端部はM字状をなし、縁は面い。外面短ハケ、内面横ハケ。
P-77 第32区	手捏ね土器	1区2面 7溝覆土	ほぼ完形	器高3.9口径 5.4底径3.6	◎砂粒を多く含む。 ◎不良◎にぶい黄 褐色	口縁部は強く外傾し、胴部は円筒状で底部は平底。口縁部は指面押えにより屈曲。胴部外面指ナデ、胴部内面指ナデ。一部ヘラケ工具による横痕あり。
P-78 第32区	土師器 小型壺	1区2面 7溝覆土	口縁部欠 損	残存高5.7胴 部最大径9.1	◎砂粒を多く含む。 ◎良好◎褐色	胴部は中位に最大径を持ち扁球形をなし。底部は丸底。胴部外面横方向のヘラケズリ。内面横ナデ。底部外面不定方向のヘラケズリ。内面指ナデによるナデ。
P-79 第32区	土師器 小型壺	1区2面 7溝覆土	与残存	器高7.3口径 8.2胴部最大 径8.8	◎砂粒を含む。◎ 不良◎にぶい黄褐 色	頸部はくの字に屈曲し、口縁部は短く内湾みに開く。胴部は中位に最大径を持ち、わずかに扁球形をなし。底部は丸底。器面は磨成しているが、胴部外面横方向のヘラケズリ。内面指ナデ。
P-80 第32区	土師器 小型壺	1区2面 7溝底面	与残存	器高7.5口径 8.2胴部最大 径9.2	◎砂粒を多く含む。 ◎不良◎にぶい黄 褐色	頸部はくの字に屈曲し、口縁部は短く内湾みに開く。胴部中位に最大径を持ち、やや扁球形をなし。底部は丸底。器面やや磨成。口縁部内外面横ナデ。胴部上半横方向のヘラケズリ。中位横方向のヘラケズリ。内面指ナデ。底部外面不定方向のヘラケズリ。
P-81 第32区	土師器 小型壺	1区2面 7溝覆土	与残存	器高8.3口径 8.3胴部最大 径10.2	◎砂粒を多く含む。 ◎普通◎にぶい黄 褐色	頸部はくの字に屈曲し、口縁部は短く直線的に開く。胴部は中位に最大径を持ち、やや扁球形をなし。底部は丸底。器面やや磨成。口縁部内外面横ナデ。胴部上半横方向のヘラケズリ。中位横方向のヘラケズリ。内面指ナデ。底部外面不定方向のヘラケズリ。
P-82 第32区	土師器 小型壺	1区2面 7溝底面	ほぼ完形	器高8.3口径 9.3胴部最大 径10.2	◎砂粒を多く含む。 ◎不良◎褐色	頸部はくの字に屈曲し、口縁部は短くわずかに内湾して開く。胴部は中位に最大径を持ち、やや扁球形をなし。底部は丸底。器面やや磨成。口縁部内外面横ナデ。胴部上半横方向のヘラケズリ。中位横方向のヘラケズリ。内面指ナデ。底部外面不定方向のヘラケズリ。

遺物観察表

遺物番号	種類・器種	出土位置	残存状態	計測値 (cm)	胎土・焼成・色調	特徴・その他
P-83 第32区	土師器 小型甕	1区2面 7溝底面	ほぼ定形	器高8.0口径 9.5胴部最大 径10.0	◎砂粒を多く含む。 ◎普通◎に ◎黄色	頸部はくの字に屈曲し、口縁部は短く直線的に開き 底部内外面はわずかに段を持つ。胴部は中位に最大径を 持ち、やや扁球形をなす。底部は丸底、口縁部内外面 横ナデ。胴部横方向のヘラケズリ、内面指ナデ。底部 外面不定方向のヘラケズリ。胴部外面横ナデ。
P-84 第32区	土師器 小型甕	1区2面 7溝底面	定形	器高8.0口径 8.2胴部最大 径8.5	◎砂粒を多く含む。 ◎普通◎にふい ◎黄色	頸部は丸みを帯てくの字に屈曲し、口縁部は内湾して 開く。胴部は中位に最大径を持ち、球形をなす。底部 は丸底、口縁部内外面横ナデ、内面に放射状の磨蝕 あり。胴部上半横方向、中位横方向のヘラケズリ、内面 指ナデ。底部外面不定方向のヘラケズリ。
P-85 第32区	土師器 小型甕	1区2面 7溝底面	ほぼ定形	器高9.3口径 9.3胴部最大 径8.1	◎砂粒を多く含む。 ◎普通◎にふい ◎黄 ◎黄色	頸部はくの字に屈曲し、口縁部はやや長く直線的に大 きく開く。胴部は中位に最大径を持ち球形をなす。底 部丸底、口縁部内外面とも横ナデ後放射状磨蝕。胴部 外面横方向のヘラケズリ。底部外面不定方向のヘラケ ズリ、内面指ナデ。器面やや磨蝕。
P-86 第32区	土師器 小型甕	1区2面 7溝底面	口縁部 欠損	残存高9.2推 定口径9.1胴 部最大径9.0 底径3.5	◎砂粒を多く含む。 ◎普通◎にふい ◎黄色	頸部は丸みを帯てくの字に屈曲し、口縁部はやや長く 外湾して開く。胴部は中位に最大径を持ち球形をなす。 底部はやや平底を呈す。口縁部内外面横ナデ。胴部上 半横方向、中位横方向のヘラケズリ。底部一定方向の ヘラケズリ。胴部内面指ナデ。
P-87 第32区	土師器 小型甕	1区2面 7溝底面	口縁部一 部欠損	器高10.0推定 口径10.0胴部 最大径12.0底 径5.0		頸部はくの字に屈曲し、口縁部はやや長く直線的に開 く。胴部は中位に最大径を持ち扁球形をなす。底部は 凹底。胴部横方向のヘラケズリ。胴部内面指ナデ。 器面やや磨蝕。
P-88 第32区	土師器 埴 土	1区2面 7溝底面	口縁部一 部欠損	器高13.0口径 10.0胴部最大 径12.9	◎砂粒を含む。◎ ◎良好◎赤褐色	頸部はやや段を持つてくの字に屈曲し、口縁部はやや 長く直線的に開く。胴部は中位に最大径を持ち球形を なす。底部は丸底。器面は熱を受け赤化し磨蝕。
P-89 第32区	土師器 埴 土	1区2面 7溝底面	口縁部と 胴部の一 部欠損	器高15.6口径 12.6胴部最大 径12.8	◎砂粒を多く含む。 ◎普通◎にふい ◎赤 ◎褐色	頸部はやや丸みを帯てくの字に屈曲し、口縁部は長く 内湾して開く。胴部は下半に最大径を持ちやや扁球形 をなす。底部は丸底、器面磨蝕。口縁部内外面横ナデ。 胴部外面横方向のヘラケズリ。
P-90 第32区	土師器 埴 土	1区2面 7溝底面	胴部一 部欠損	器高16.7口径 12.8胴部最大 径14.6底径6. 1	◎砂粒を多く含む。 ◎普通◎にふい ◎黄色	頸部はくの字に屈曲し、口縁部は長く直線的に開く。 胴部は中位に最大径を持ちやや扁球形をなす。底部は やや突出した平底。器面は一部が熱を受け赤化し煤が 付着し、磨蝕している。口縁部内面と胴部外面に放射 状磨蝕が見られる。
P-91 第32区	土師器 高坏	1区2面 7溝底面	胴部欠 損	残存高9.8口 径13.2脚基部 径3.0	◎砂粒を多く含む。 ◎良好◎に ◎黄色	坏部は浅く内湾して開く。胴部は細く直線的に開き 、底部へ横やかに外反する。坏部内外面ヘラナデ。脚柱 部外面ヘラナデ、内面指ナデ。器面やや磨蝕。
P-92 第32区	土師器 高坏	1区2面 7溝覆土 上層	口縁部一 部と脚 柱部欠損	残存高12.8口 径17.8脚基部 径3.2	◎砂粒を多く含む。 ◎不良◎に ◎灰白色	坏底部は内湾して開き口縁部はやや外反する。脚柱部 は細く内湾きみに開く。脚柱部下端は人為的に打ち欠 かされている。器面やや磨蝕。坏部内面放射状磨蝕。脚 柱部外面ヘラケズリ、内面紋目以下指ナデ。
P-93 第32区	土師器 高坏	1区2面 7溝底面	口縁部一 部と脚 柱部欠損	残存高11.8口 径17.0脚基部 径2.9	◎砂粒を多く含む。 ◎不良◎にふい ◎黄 ◎褐色	坏底部は内湾して開き口縁部は外反する。脚柱部は内 湾きみに磨目を持って開き、胴部へ強く外反する。器 面やや磨蝕。坏部内外面放射状磨蝕。胴部外面ヘラナ デ、内面紋目目明指ナデ。

遺物番号	種類・器種	出土位置	残存状態	計測値 (cm)	胎土・焼成・色調	特徴・その他
P-94 第33団	土師器 高坏	1区2面 7溝底面	口縁部欠 と脚柱部 残存	残存高12.9口 径18.1脚基部 径3.8	◎砂粒を多く含む。 ◎普通◎にふい 褐色	坏底部はやや内湾して開き縁やかに屈曲し、口縁部は 外傾し肩部はやや外反する。脚柱部はやや内湾して開 き、基部へ強く外反する。器面やや磨滅。脚柱部外面 ヘラナデ、内面指ナデ。脚基部内面ヘラケズリ。
P-95 第33団	土師器 高坏	1区2面 7溝底面	坏部残存	残存高6.3口 径15.1脚基部 径3.0	◎砂粒を多く含む。 ◎普通◎褐色	坏底部から口縁部へ内湾して縁やかに開く。坏部外面 ヘラナデ。器面磨滅。
P-96 第33団	土師器 高坏	1区2面 7溝底面	脚部残存	残存高9.4脚 基部径3.2脚 基部径12.6	◎砂粒を多く含む。 ◎普通◎にふい 褐色	脚柱部は内湾きみに開き下端で強く外反し、基部は直 線的に開く。脚柱部外面ヘラナデ、内面指ナデ。基部 に絞り目。器面やや磨滅。
P-97 第33団	土師器 高坏	1区2面 7溝底面	坏底部の 一部と脚 部残存	残存高11.0脚 基部径3.6脚 基部径13.7	◎砂粒を多く含む。 ◎普通◎褐色	坏底部は内湾きみに開く。脚柱部は内湾きみに開き下 端で強く外反し、基部は直線的に開く。坏部外面放射 射状研磨。脚柱部外面ヘラナデ、内面指ナデ。基部内 面絞り目。脚部外面放射状研磨。器面やや磨滅。
P-98 第33団	土師器 高坏	1区2面 7溝底面	坏底部の 一部と脚 部残存	残存高9.2脚 基部径3.4脚 基部径13.8	◎砂粒を多く含む。 ◎普通◎褐色	坏底部は内湾きみに開き、端部で弱く屈曲する。脚柱 部は内湾きみに開き下端で強く外反し、基部は直線的 に開き肩部は内湾する。脚柱部外面ヘラナデ、内面指 ナデ。基部内面絞り目。器面磨滅。
P-99 第33団	土師器 単口鉢壺	2区7溝 覆土上層	ほぼ完形	器高36.7口径 22.2胴部最大 径32.4底径8. 2	◎砂粒を多く含む。 ◎不良◎にふい 赤褐色	頸部はくの字に屈曲し、口縁部は外傾して立ち上り上 半で外反する。口縁部は上方に弧み出され外面は平 面をなし内面に棱を持つ。胴部は中位に最大径を持ち 球形を呈す。底部はやや突出した平底で、わずかに凹 底状をなす。口縁部外面放射状研磨。胴部外面斜め上 方のヘラケズリ、約4回で周りを上げる。器面やや磨滅。
P-100 第33団	土師器 単口鉢壺	2区7溝 覆土上層	口縁部欠 損	残存高26.6胴 部最大径28.0 底径6.6	◎砂粒を多く含む。 ◎不良◎にふい 黄褐色	口縁部や胴部の形状はP-99と同様と推定される。胴 部中位に最大径を持ち、球形を呈す。底部はやや突出 し凹底状をなす。胴部や底部外面に指頭による押圧痕 が見られ、胴部外面ヘラナデ。器面やや磨滅。
P-101 第33団	土師器 壺	2区7溝 覆土	口縁部一 胴部上半 片	残存高6.1推 定口径17.4	◎砂粒を含む。◎ 良好◎褐色	頸部はくの字に屈曲し、口縁部は外傾し、端部外面が 肥厚する。胴部上半は内湾きみに開く。胴部外面ヘラ ナデ、内面指ナデ。器面やや磨滅。
P-102 第33団	土師器 壺	2区7溝 覆土	口縁部一 胴部上半 片	残存高5.5推 定口径14.3	◎砂粒を多く含む。 ◎普通◎にふい 黄褐色	頸部はくの字に屈曲し、口縁部は外反し肩部は丸い。 胴部上半は内湾して開く。口縁部内外面横ナデ。胴部 外面横方向のヘラケズリ、内面輪積み痕明瞭。
P-103 第34団	土師器 壺	1区2面 7溝底面	口縁部一 胴部上半 片	残存高13.1推 定口径15.2胴 部最大径22.2	◎砂粒を多く含む。 ◎普通◎灰褐色	頸部はくの字に屈曲し、口縁部は外傾し肩部がわずかに 内傾する。胴部はやや上半に最大径を持つ。口縁部 内外面横ナデ、外面に輪積み痕明瞭。胴部外面斜め 上方へヘラケズリ、内面横方向のヘラナデ。
P-104 第34団	土師器 壺	1区2面 7溝覆土	口縁部一 胴部上半 残存	残存高6.8口 径13.2	◎砂粒を多く含む。 ◎普通◎褐色	頸部はくの字に強く屈曲し、口縁部はそのまゝ外傾す る。胴部上半は内湾して開く。口外内外面横ナデ。 胴部上端外側方向のヘラケズリ、内面ナデ、部分的 に輪積み痕が見える。
P-105 第34団	土師器 壺	1区2面 7溝底面	口縁部一 胴部上半 残存	残存高14.0口 径14.0胴部推 定最大径20.0	◎砂粒を多く含む。 ◎普通◎にふい 褐色	頸部はくの字状に強く屈曲し、口縁部はやや外反して 開き肩部は丸い。胴部は中位に最大径を持つと推定さ れ、やや長胴化した胴部か？口縁部内外面横ナデ、外 面に工具痕。胴部外面斜上方への強いヘラケズリ、内 面横方向のヘラナデ。胴部外面一部肥厚着。

遺物観察表

遺物番号	種類・器種	出土位置	残存状態	計測値 (cm)	胎土・焼成・色調	特徴・その他
P-106 第34図	土師器 甕	1区2面 7溝底面	胴部の一 部と底部 欠損	残存高22.0口 径14.6胴部最 大径23.6	◎砂粒を多く含む。 ◎普通◎に濃い褐色	胴部はくの字に強く屈曲し、口縁部は短くそのまま外傾し肩部は丸い。胴部は中に最大径を持ち、球形に近い膨みのある器形。口縁部内外面横ナデ。胴部外面斜め上方へ2段のヘラケズリ。上端は横方向のヘラケズリ後ヘラナデ。胴部内面横ナデ。胴部上半へ口縁部の外面横ナデ。
P-107 第34図	土師器 甕	1区2面 7溝底面	口縁部と 胴部の一 部と底部 欠損	残存高24.3口 径15.7胴部最 大径24.4	◎砂粒を多く含む。 ◎普通◎に濃い褐色	胴部はくの字に強く屈曲し、口縁部は短くそのまま外傾し肩部はわずかに外反し肥厚する。胴部は中に最大径を持ち、球形に近い膨みのある器形。口縁部内外面横ナデ。外面に輪痕み痕が残る。胴部外面斜め上方へ細いヘラケズリ。上端上方へのヘラケズリ。胴部上半へ口縁部に横ナデ。一部に熱による器面の剥離が見られる。器面やや磨成。
P-108 第34図	土師器 甕	1区2面 7溝覆土	胴部片	残存高17.3胴 部最大径大径 24.5	◎粗砂粒を多く含む。 ◎普通◎に濃い褐色および黒褐色	胴部中に最大径を持つと推定され、球形に近い膨みのある器形。胴部外面斜め上方へのヘラケズリ。上端横方向のヘラケズリ。内面横ナデ。胴部外部一部横ナデ。熱を受け赤化。
P-109 第34図	土師器 甕	1区2面 7溝底面	胴部上半 片	残存高10.0	◎砂粒を多く含む。 ◎普通◎に濃い褐色および濃い褐色	胴部上半は内湾して開く、やや長胴化した器形と推定される。胴部外面斜め上方へのヘラケズリ。内面横ナデ。一部に輪痕み痕が残る。胴部外面の一部横ナデ。熱を受け赤化。
P-110 第35図	土師器 台付甕	1区2面 7溝底面	口縁部・ 胴部の一 部と舞台 部下半欠 損	残存高27.6口 径15.0胴部最 大径23.0	◎砂粒を多く含む。 ◎普通◎に黒褐色および濃い褐色	胴部はくの字に強く屈曲し、口縁部は短くわずかに屈曲して外傾し肩部は丸い。胴部は中に最大径を持ち長胴化した器形。舞台部は人為的に下手を打ち欠いており、その後も使用。口縁部内外面横ナデ。胴部外面斜め上方へのヘラケズリ。上端上方へのヘラケズリ。内面横ナデ。舞台部内面控部圧痕。胴部下半に器体接合痕が残る。外面の一部に熱による器面の剥離痕あり。
P-111 第34図	土師器 台付甕	1区2面 7溝底面	口縁部一 部と胴部 上半片	残存高8.0推 定口径12.0	◎砂粒を多く含む。 ◎普通◎に濃い褐色	胴部はくの字に屈曲し、口縁部下段は直線的に外傾し横は弱く、内面は弱く屈曲する。口縁部上段は外反して開き、肩部は丸く内面が強く凹む。胴部上半は内湾して開く。口縁部内外面横ナデ。胴部外面斜め上方へのヘラケズリ。上端横方向の後に横方向のヘラケズリ。胴部内面ヘラナデ。上端指痕圧痕。
P-112 第35図	土師器 台付甕	1区2面 7溝底面	口縁部一 部と胴部 上半片	残存高8.5推 定口径14.5	◎砂粒を多く含む。 ◎普通◎に濃い褐色	胴部はくの字に屈曲し、口縁部下段は直線的に外傾し横はやや強く、内面は弱く屈曲する。口縁部上段は外反して開き、肩部は丸く内面が強く凹む。胴部上半は内湾して開く。口縁部内外面横ナデ。胴部外面斜め上方へのヘラケズリ。上端上方へのヘラケズリ。内面ヘラナデ。器面やや磨成。一部横ナデ。
P-113 第35図	土師器 台付甕	1区2面 7溝覆土	口縁部一 部と胴部 上端 残存	残存高4.0口 径15.0	◎砂粒を多く含む。 ◎普通◎に濃い褐色	胴部はくの字に屈曲し、口縁部下段は直線的に外傾し横は弱く、内面はわずかに屈曲する。口縁部上段も直線的に外傾し肩部は丸い。胴部上半は内湾して開く。口縁部内外面横ナデ。胴部上端外面上方へのヘラケズリ。内面指痕圧痕。器面やや磨成。
P-114 第35図	土師器 台付甕	1区2面 7溝底面	口縁部一 部と胴部 残存	残存高4.5口 径15.7	◎砂粒を多く含む。 ◎普通◎に明赤褐色	胴部はくの字に屈曲し、口縁部上下段とも直線的に外傾し横は弱く、内面はわずかに屈曲し肩部は丸い。口縁部内外面横ナデ。胴部上端外面上方へのヘラケズリ。内面横方向のヘラナデ。器面やや磨成。

遺物番号	種類・器種	出土位置	残存状態	計測値 (cm)	胎土・焼成・色調	特徴・その他
P-115 第35図	土師器 台付甕	1区2面 7溝底面	舞台部残 存	残存高5.9基部 径5.8舞部 径9.5	◎砂粒を多く含む。 ◎良好◎褐色	ハの字状に直線的に開く器形で、裾端部は平面をなし内面折り返し。舞台部外面ナデ、輪積み痕が残る。内面指ナデ。
P-116 第35図	土師器 台付甕	1区2面 7溝底面	舞台部残 存	残存高5.5基部 径5.8舞部 径9.8	◎砂粒を多く含む。 ◎普通◎ふい褐色	ハの字状に直線的に開く器形で、裾端部は丸く内面折り返し。舞台部外面ナデ、輪積み痕が残る。内面指ナデ。
P-117 第35図	土師器 台付甕	1区2面 7溝底面	胴部下半 ～舞台部 残存	残存高10.4基部 径5.7舞部 径10.1	◎砂粒を多く含む。 ◎普通◎褐色	胴部下半は内湾して開く。舞台部はハの字状に直線的に開き、裾端部は平面をなし内面折り返し。胴部外面ヘラケズリ、内面ナデ。舞台部外面ナデ、輪積み痕が残る。内面指ナデ。胴部内面採付着。器面やや磨滅。
P-118 第35図	土師器 台付甕	1区2面 7溝底面	胴部下半 ～舞台部 残存	残存高10.1基部 径5.8舞部 径10.2	◎砂粒を多く含む。 ◎普通◎褐色およびふい褐色	胴部下半は内湾して開く。舞台部はハの字状に直線的に開くが歪みを持つ。裾端部は丸く内面折り返し。胴部外面ヘラケズリ、内面ヘラナデ。舞台部外面ナデ、内面指ナデ。胴部内面採付着。器面やや磨滅。
P-119 第35図	土師器 台付甕	1区2面 7溝底面	胴部下半 残存	残存高7.2基部 径6.0舞部 径11.2	◎砂粒を多く含む。 ◎普通◎ふい褐色	胴部下半は内湾して開く。舞台部はわずかに内湾してハの字状に開く。裾端部は丸く内面折り返し。胴部外面ヘラケズリ、内面ヘラナデ。舞台部外面ナデ、内面指ナデ後ヘラナデ。器面やや磨滅。
P-120 第35図	土師器 台付甕	1区2面 7溝底面	胴部下半 ～舞台部 残存	残存高7.0基部 径5.9舞部 径10.8	◎砂粒を多く含む。 ◎普通◎褐色	胴部下半は内湾して開く。舞台部はハの字状に直線的に開き、裾端部は丸く内面折り返し。胴部内面ヘラナデ。舞台部内面指ナデ。器外面磨滅。
P-121 第35図	土師器 台付甕	1区2面 7溝底面	舞台部残 存	残存高7.6基部 径6.3舞部 径11.0	◎砂粒を多く含む。 ◎良好◎明褐色	わずかに内湾してハの字状に開く器形で、裾端部は平面をなし内面折り返し。舞台部外面ヘラナデ、輪積み痕が残る。内面指ナデ。
P-122 第35図	土師器 台付甕	1区2面 7溝底面	胴部下半 ～舞台部 残存	残存高9.3基部 径7.3舞部 径12.2	◎砂粒を多く含む。 ◎普通◎明褐色	胴部下半は内湾して開く。舞台部はハの字状に直線的に開き、裾端部は平面をなし内面折り返し。胴部内面ヘラナデ。舞台部内面指ナデ。器外面磨滅。
P-123 第27図	土師器 手捏ね土器	3区9溝 覆土	ほぼ定形	器高6.4口径 9.7底径5.5	◎砂粒を含む。◎ 不良◎灰黄褐色	歪みを持った器形で、体部は内湾して立ち上り口縁部はそのまま開き裾部は丸い。底部は厚くやや突出した平底。器面磨滅。
P-124 第47図	灰輪陶器 高台付甕	3区6溝 覆土	片残存	器高5.5推定 口径16.0推定 底径7.4	◎密◎還元焰◎灰 白色	体部は内湾して立ち上り、口縁部は外反しやや肥厚する。高台は付高台でくの字に屈曲している。横輪整形右回転。体部内外面に施輪。器面やや磨滅。
P-125 第47図	灰輪陶器 甕	3区6溝 覆土	胴部下半 ～底部 片残存	残存高4.9腕 径8.1	◎密◎還元焰◎灰 白色	胴部下半は外傾して立ち上り、高台は厚い付高台でハの字に開く。横輪整形。胴部外面と底部内面に輪付着。器面やや磨滅。
P-126 第47図	灰輪陶器 甕	1区1面 北端	片残存	器高2.6口径 14.1底径6.2	◎密◎還元焰◎灰 白色	体部は内湾して大きく開き、口縁部は外反する。高台は丸みを帯びた付高台でハの字に開く。横輪整形。体部内面全体と外面に施輪。
P-127 第47図	灰輪陶器 高台付甕	5区表土	片残存	器高4.3推定 口径14.2底径 7.4	◎密◎還元焰◎灰 白色	体部は内湾して立ち上り、口縁部はわずかに外反する。高台は付高台でくの字に屈曲している。横輪整形。体部内外面に施輪。

遺物観察表

遺物番号	種類・器種	出土位置	残存状態	胎土・焼成・色調		特徴・その他
P-128第47図	瓦 平瓦	1区表土	無縁部破片	◎砂粒を含む。◎還元焰 軟質◎にぶい黄褐色		表面に布目痕あり。裏面割離。
遺物番号	種類・器種	出土位置	残存状態	計測値 (cm)	特 徴 ・ そ の 他	
P-129第47図	土製品 割口	1区表土	端部破片	推定径8.0推定孔径2.5	円筒状をなすと推定されるが、破片のため全長不明。胎土は褐色を呈すが、先端部はガラス質状に溶解し黒色を呈し、先端部より4cmの範囲の外周は還元状態で灰色を呈す。	
遺物番号	種類・器種	出土位置	残存状態	胎土・焼成・色調		特 徴 ・ そ の 他
P-130第57図	陶器 山茶碗	3区74号柱穴覆土	体部下位小片	◎灰白色◎赤◎暗褐色		外面軸垂れる。瀬戸・美濃系。時期不詳。
P-131第57図	陶器 灰軸平茶碗	3区2坑覆土	体部小片	◎灰黄色◎赤◎淡緑色		体部下位以下無軸。細かい貫入が入る。底部内面大きい目痕1ヶ所あり。美濃。15世紀。
P-132第57図	磁器 白磁皿	3区3坑覆土	体部一底部小片	◎白色◎硬質◎淡青白色		体部外面面取り。底部外面一部無軸。底部内面中央軸擦れる。13世紀中～14世紀前半。
P-133第57図	軟質陶器 内耳鍋	3区3坑覆土	口縁部小片	◎砂粒を含む。◎軟質◎黒色		口縁部短くやや内湾。在地製。14～15世紀。
P-134第57図	陶器 灰軸皿	3区14坑覆土	口縁部小片	◎灰白色◎硬質◎淡黄緑色		口縁部のみ灰軸。灰軸には貫入が入る。瀬戸・美濃系。時期不詳。
P-135第57図	陶器 灰軸皿	5区表土	体部小片	◎灰白色◎赤◎淡白色		外面下位回転ヘク削り。上位明確な機械目。内面灰軸。粗い跡目をヘクで削む。瀬戸・美濃系。14～15世紀。
P-136第57図	軟質陶器 鉢鉢	3区表土	口縁部一底部小片	◎片岩礫を含む。◎軟質◎灰色		内面下位使用痕。在地製。14～15世紀。
P-137第57図	軟質陶器 火鉢	3区表土	口縁部一底部片	◎砂粒・小礫を含む。◎軟質◎灰色 体部内面中位棕色		脚部は同側に3段の段差を有する。口縁部内面等間隔に貫通しない円孔。在地製。14～15世紀。

遺物番号	種 類	出土位置	残存状態	計測値 (cm)	石 質	特 徴 ・ そ の 他
S-1第11図	打製石斧	1区3面旧河道	完形	◎8.0◎3.6◎ 1.3◎32g	凝灰質泥岩	小型の短冊形打製石斧で、表面の一部に自然面を残す。側縁部は細く直され、刃部は使用による割れが生じている。
S-2第11図	打製石斧	1区3面旧河道	完形	◎15.9◎4.9◎ 2.0◎203g	珪質礫片岩	短冊形の打製石斧で、長円形の河原石の形状をそのまま利用し、周縁部のみわずかに加工している。
S-3第11図	打製石斧	1区3面旧河道	刃部一部欠損	◎14.3◎6.8◎ 2.0◎167g	緑色片岩	分銅形の打製石斧で、刃部と表面の一部に自然面を残す。挟り込みは浅く、粗い割離で作出されている。
S-4第11図	磨製石斧	1区3面旧河道	刃部片	残存長8.5残存幅8.9	雲玄武岩	表面に敲打痕、側縁部に擦痕をわずかに残し、刃部は使用による割れが生じている。
S-5第11図	削片石器	1区3面旧河道	完形	◎6.8◎4.1◎ 1.2◎32g	硬質泥岩	横長削片を使用。両側縁と先端部に片面から細かい割離を加え、刃部を作出している。
S-6第11図	凹 石	1区3面旧河道	破片	残存長6.7残存幅6.0◎4.0	砂岩	長楕円形をなす形状と推定され、表面は敲打による浅い凹みが1孔あり、裏面は自然の凹みを利用。表裏面とも磨滅。
S-7第11図	石 槌	1区3面旧河道	完形	◎6.3◎9.8◎ 4.4◎392g	硬質泥岩	平面形が長方形をなし、表裏1側面は自然面で3側面を上面だけから磨打している。

遺物番号	種 類	出土位置	残存状態	計測値 (cm)	石 質	特 徴 ・ そ の 他
S-8 第11回	石 皿	1区3面 旧河道	破片	残存長35.0残存 幅16.5幅3.2	緑色片岩	平面形状不明。扁平な河原石をそのまま使用、表面わずかに磨れている。残存重量3,300g。
S-9 第11回	台 石	1区3面 旧河道	破片	残存長17.4残存 幅12.4幅12.4	砂岩	平面形状不明。厚みのある河原石の上端を打ち欠き平面を作り、使用により非常に良く磨けている。表面には敲打による浅い凹みが10数ヶ所ある。残存重量6,100g。
S-10 第13回	石 鏃	5区表土	一方の基部 欠損	φ1.2残存幅1.0 φ0.2	チャート	ハート形をした小型の無蓋石鏃。やや粗雑な作りである。
S-11 第13回	石 鏃	3区3坑 覆土	両基部が 欠損	φ1.6φ1.3φ 0.3	黒曜石	ハート形をした無蓋石鏃。
S-12 第13回	打製石斧	1区2面 7溝覆土	完形	φ7.3φ4.4φ 1.7φ57g	硬質泥岩	小型の短冊形打製石斧で、横長割片を使用。片側縁はほとんど無調整。刃部やや斜め。
S-13 第13回	打製石斧	3区34号 柱穴覆土	完形	φ8.2φ6.3φ 1.5φ72g	黒色頁岩	小型の短冊形打製石斧で、表面の一部に自然面を残す。表面は細かな割離が多く加えられ、刃部は丸く角度が浅い。
S-14 第13回	打製石斧	3区2溝 覆土	完形	φ11.7φ6.6φ 2.1φ191g	硬質泥岩	短冊形打製石斧で、表面に大きく自然面を残す。表面の割離は粗く、刃部は平刃で片面だけから割離が加えられている。
S-15 第13回	打製石斧	1区2面 7溝覆土	完形	φ11.2φ5.9φ 3.4φ250g	ホルンフェ ルス	身の短い短冊形打製石斧。表面の割離は粗く、表面は第1次割離面を大きく残す。刃部は丸く角度が浅い。
S-16 第13回	尖頭状石器	4区1号 掘溝底周 溝覆土	完形	φ10.8φ5.9φ 2.9φ164g	珪質頁岩	表面の片側縁と裏面に大きく自然面を残す。表面の割離は粗く裏面はほとんど無調整で、先端部のみ念に調整されている。未製品の可能性もある。
S-17 第13回	割片石器	2区7溝 覆土	完形	φ9.0φ4.3φ 1.5φ52g	硬質泥岩	短冊形割片を使用。表面はほとんど自然面で、1側縁に片面だけから細かい割離を加え直線的な刃部を作り出す。
S-18 第13回	割片石器	1区2面 7溝覆土	完形	φ6.0φ11.7φ 2.2φ192g	硬質泥岩	裏面は自然面だけで、表面は粗い割離が周縁から加えられている。1側縁に片面だけからやや細かい割離を加え、直線的な刃部を作り出す。
S-19 第13回	割片石器	4区表土	完形	φ5.9φ6.7φ 1.8φ90g	硬質泥岩	横長割片を使用。表面の一部に自然面を残す。表面の割離は粗く、1側縁に片面だけからやや細かい割離を加え、直線的な刃部を作り出す。
S-20 第13回	割片石器	2区4溝 覆土	完形	φ7.1φ3.9φ 1.3φ28g	硬質泥岩	短冊形割片を使用。表面に自然面を残し裏面は第1次割離面だけである。両側縁を刃部として使用、わずかに細かい割離が加えられている。
S-21 第14回	石 核	5区表土	完形	φ6.5φ6.3φ 4.4φ217g	硬質泥岩	形状は扁平で菱形をなし、表裏2側面は自然面で、2側面を上面だけから敲打している。
S-22 第14回	石 核	1区2面 7溝覆土	完形	φ7.5φ11.0φ 3.8φ398g	硬質泥岩	形状は扁平な半円形をなし、表裏側面とも自然面で、1側面を上面だけから敲打している。
S-23 第14回	石 核	4区1号 周溝覆土	完形	φ10.3φ6.7φ 6.5φ607g	珪質頁岩	形状はやや長方形をなし、表裏側面に自然面を大きく残す。2側面を一定方向から敲打している。
S-24 第14回	石 核	1区2面 2溝覆土	完形	φ12.5φ10.5φ 7.5φ893g	硬質泥岩	形状はやや三角錐をなし、表裏側面の一部に自然面を残す。4側面に不定方向から敲打している。
S-25 第13回	凹 石	3区1坑 周覆土	完形	φ18.7φ7.1φ 4.2φ816g	珪質片岩	長楕円形の河原石を使用。表面に2側面に1側の凹みを有す。両端部や側縁に敲打痕あり。

遺物観察表

遺物番号	種類	出土位置	残存状態	計測値 (cm)	石質	特徴・その他
S-26 第13回	石皿	5区表土	破片	残存長17.5残存幅15.7	粗粒安山岩	表面周縁は断面三角形に縁取り、内面は浅く凹む。表面や周縁部に多孔石状の凹みがある。
S-27 第36回	敲石状石器	2区6溝覆土	先端部欠損	φ20.0φ4.6φ2.6φ396g	雲母石英片岩	長楕円形の河原石を使用。先端部は敲打による割れが生じ、表面や側面に敲打痕あり。鹿嶋み石の転用か？
S-28 第36回	勾玉(未製品)	1区2溝7溝底面	ほぼ完形	φ3.8φ1.2-1.5φ1.0φ11g	滑石	両端部の一部が割れている。未穿孔。ミガキ成形。
S-29 第36回	敲石状石器	1区2面7溝底面	先端部欠損	φ13.5φ7.2φ5.1φ692g	砂岩	長楕円形の河原石を使用。先端部は敲打による割れが生じ、表裏面に敲打痕あり。表裏面やや擦れている。
S-30 第36回	磨石状石器	1区2面7溝覆土	側面一部欠損	φ16.0φ10.0φ4.9φ1,045g	砂岩	楕円形の河原石を使用。全面がよく擦れおり、側面に敲打痕あり。表面と側面が火を受け変色している。
S-31 第36回	台石	1区2面7溝底面	両端部欠損	残存長14.5残存幅19.3	砂岩	厚さ4.7cm。残存する重さ1,840gで、偏平な河原石を使用。表面は良く擦れ細かい敲打痕が数多くある。
S-32 第60回	台石	3区表土	側面一部欠損	φ21.2φ15.0φ6.0φ3,008g	角閃石安山岩	楕円形で偏平な河原石を使用。表裏面とも擦れおり、煤が付着している。
S-33 第60回	台石	3区表土	側面一部欠損	φ20.5φ16.6φ5.7φ2,397g	粗粒安山岩	楕円形で偏平な河原石を使用。表裏面ともやや擦れ敲打痕があり、煤が付着している。
S-34 第60回	台石	3区表土	側面一部欠損	φ17.3φ15.9φ5.5φ2,358g	ミロナイト様岩石	円形で偏平な河原石を使用。表裏面とも良く擦れ敲打痕があり、煤が付着している。(かこう岩質) ミロナイト様岩石
S-35 第60回	台石	3区7坑覆土	側面一部欠損	φ14.9残存φ14.9φ5.2	粗粒安山岩	楕円形で偏平な河原石を使用。残存する重さ1,807g。表裏面とも良く擦れ敲打痕があり、煤が付着している。
S-36 第60回	台石	3区10坑覆土	側面一部欠損	残存長14.7φ14.6φ3.2	珪質礫片岩	楕円形で偏平な河原石を使用。残存する重さ958g。表裏面ともやや擦れ、煤が付着している。
S-37 第62回	石臼	3区12坑覆土	完形	φ30.0φ8.2-3.1φ7,120g	粗粒安山岩	下臼。軸受径2.7cm、深さ2.5cm。目が1条残るだけで非常に良く使い込んでおり、片擦れを生じている。底面凹底状。

遺物番号	種類	出土位置	残存状態	計測値 (cm)	材質	特徴・その他
W-1 第37回	火鏝板	1区2面7溝底面	端部欠損	残存長12.5φ1.9φ0.8	マタタビ属	炬目。一方の端部は三角形に削られている。板には5つの火鏝白がほぼ8mmの間隔を開けて片側面に並び、それぞれの白には側面より幅4mm、深さ4mmの溝が切り込まれている。火鏝白は3つが未使用で、2つが使用されている。未使用の白は1.1×1.3cmの隅丸方形で2mm程度削り込まれている。使用された白は径1.1cm、深さ4-6mmの円形をなす。
W-2 第37回	箸?	1区2面7溝底面	端部欠損	残存長11.3φ0.5φ0.5	トネリコ属	炬目。W-3と近接して出土。先端部や側面に削り痕らしきものがあるが、箸であるかは不明。
W-3 第37回	箸?	1区2面7溝底面	端部欠損	残存長10.5φ0.6φ0.6	トネリコ属	W-2と同様の特徴を持ち、箸であるかは不明。
W-4 第37回	板材	1区2面7溝底面	側縁部破片	残存長28.0残存幅2.4残存厚1.9	モミ属	炬目。表側面は磨滅し加工痕不明、裏面は木目が明瞭に残る。

遺物番号	種類	出土位置	残存状態	計測値 (cm)	樹 種	特 徴 ・ そ の 他
W-5 第37回	柄	1区2面 7溝覆土	柄部欠損	台部径14.3輪 3.2輪3.0 柄部径2.0	ヒノキ属	農具の穂柄と考えられ、枝分れ部分を利用。台部断面は半円形をなし、台頭部は山形に削り出されている。柄部残存長は14.7cmで断面円形、ほとんど無加工である。着柄角度は57度。
W-6 第38回	板 材	1区2面 2溝底面	側縁部破 片	残存長51.0残 存幅12.4厚2. 5	モミ属	板目。衣裏側面とも磨滅している。

遺物番号	種類	出土位置	残存状態	計測値 (cm)	銭貨銘・初終年代等
M-1 第53回	銭 貨	3区175 号柱穴	完形	径2.3 孔0.6	景宋通寶。年代 寶元二年 1039年。銅製。
M-2 第53回	銭 貨	3区121 号柱穴	一部欠損	径2.4 孔0.6	景德元寶。年代 景德二年 1005年。銅製。
M-3 第53回	銭 貨	1区表土	完形	径2.3 孔0.7	開元通寶。年代 南唐即位二年 966年。銅製。
M-4 第53回	銭 貨	1区表土	完形	径2.3 孔0.7	寛永通寶。古寛永。銅製。
M-5 第53回	銭 貨	1区表土	完形	径2.8 孔0.6	寛永通寶。背一直波、新寛永。銅製。
M-6 第53回	銭 貨	3区裏土	完形	径2.3 孔0.6	洪武通寶。年代 洪武元年 1368年。銅製。

自 然 科 学 分 析

上戸塚正上寺遺跡における自然科学分析

古環境研究所

I. 上戸塚正上寺遺跡の地質とテフラ

1. はじめに

藤岡台地の東縁部に位置する上戸塚正上寺遺跡の発掘調査では、藤岡台地とその東に広がる低地の良好な地層の断面が作成された。そこで野外地質調査を行い、地層の層序を明らかにした。さらにテフラ検出分析により、すでに噴出年代が明らかにされている示標テフラとの同定を行って、それらとの層位関係から地層の堆積年代や遺構の構築年代に関する資料を得ることを試みた。調査の対象とした地点は、台地部に相当する3区深掘トレンチ、低地部に相当する1区2面深掘トレンチ東壁、1区2面深掘トレンチ東壁、1区2面3号溝の4地点である。

2. 地質層序

(1) 第1地点 (3区深掘トレンチ)

台地部に相当する3区深掘トレンチの地質柱状図を、図1に示す。ここでは、暗色帯に相当すると考えられる風化の進んだ暗褐色ローム層の上位の2層準に、テフラ層を挟む褐色ローム層の堆積が認められる。テフラ層のうち下位のテフラは、層厚19cmの黄色風化軽石層である。また上位のテフラは、層厚16cmの黄色粗粒火山灰層である。これらのテフラ層と下位の暗褐色ローム層について、テフラ検出分析を行った。

(2) 第2地点 (1区2面深掘トレンチ東壁)

低地部に相当する1区2面深掘トレンチ東壁では、間に不整合を挟んで2層の粗谷堆積物が認められる(図2)。下位の堆積物は、下位より泥炭層、粘土層、降下テフラ層、砂質シルト層、シルト層の連続から構成される。降下テフラ層は、さらに下部と上部に大きく区分される。下部は層厚25cmの桃灰色風化軽石層で、最大径13mmの白色軽石が含まれる。その上部7cmは比較的細粒である。また上部は、層厚4cmの桃色細粒火山灰層である。

一方上位の堆積物は、下位より礫層、砂層(以上9層)、シルト層(8層、7層)、砂質シルト層(6層)、シルト層(5層、4層)、暗灰褐色軽石層、灰白色土(以上3層、2層)、灰白色軽石層、表土(以上1層)の連続からなる。これらのうち礫層に含まれる礫の最大径は38mmである。下位のシルト層の上部(7層中)には、白色の細粒軽石が濃集している。3層基底にある暗灰褐色軽石層は、層相から1108(天仁元)年に浅間火山から噴出した浅間Bテフラ(As-B, 新井, 1979)に、1層基底にある灰白色軽石層は層相から1783(天明3)年に浅間火山から噴出した浅間A軽石(As-A)に各々同定される。これら以外のテフラの有無については、テフラ検出分析を行うことにした。

(3) 第3地点 (1区2面深掘トレンチ谷部)

低地部分の谷部に相当する1区2面深掘トレンチ谷部では、最も新しく形成された谷を埋没させた堆積物が認められた(図3)。最下位の地層は、材化石を多く含む灰色砂層である。発掘調査では、砂層の上部から縄文時代中期-後期の土器が検出されている。なお材化石の直下には、レンズ状に褐色腐植質砂層の堆積が

自然科学分析

認められた。砂層の上位に堆積するシルト層の最上部には、1区2面深掘トレンチ東壁7層に濃集して認められた白色軽石が純層としてレンズ状に認められた。軽石層の層厚は、0.6cmである。

(4) 第4地点(1区2面3号溝)

1区2面で検出された3号溝の上位には、2号溝が構築されている。2本の溝の覆土の地質柱状図を、図4に示す。3号溝は、シルト層と砂質シルト層により覆われている。3号溝基底のすぐ上位には、降下テフラ層が認められる。このテフラ層は、下部が層厚0.9cmの灰色粗粒火山灰層、上部が層厚0.3cmの桃色細粒火山灰層から構成される。このテフラについては、テフラ検出分析を試みた。2号溝の覆土にはAs-B、その上位の土壌中にはAs-Aが認められた。

3. テフラ検出分析

(1) 分析方法

4地点から採取された合計14点の試料についてテフラを検出すると共に、示標テフラとの同定を行うためにテフラ検出分析を行った。分析の手順は、次の通りである。

- 1) 試料15gを秤量。
- 2) 超音波洗浄装置により、泥分を除去。
- 3) 80℃で恒温乾燥。
- 4) 実体顕微鏡下で、テフラ粒子の特徴を観察。

(2) 分析結果

1) 第1地点(3区深掘トレンチ)

テフラ検出分析の結果を、表1に示す。試料番号2には、最大径1.3mmの白色軽石が比較的多く含まれている。また火山ガラスも多く含まれている。火山ガラスは透明で、スポンジ状や繊維束状に発泡した軽石型火山ガラスが多く含まれている。重鉱物としては、斜方輝石や単斜輝石が含まれている。このテフラは、層相や岩相などから、約1.3~1.4万年前に浅間火山から噴出した浅間一板鼻黄色軽石(As-YP, 新井, 1962, 町田ほか, 1984)に同定される。

試料番号3には、スポンジ状に発泡した軽石型火山ガラスが比較的多く含まれている。また重鉱物が多く含まれており、とくに斜方輝石や単斜輝石に富む。このテフラは、層相や岩相などから約1.6~2.1万年前に浅間火山から噴出した浅間一板鼻褐色軽石群(As-BP Group, 新井, 1962, 町田ほか, 1984)の一つに同定される。特に軽石が顕著なテフラであることからAs-BP Groupの最下部の「家田軽石(As-MP, 約2.1万年前, 早田, 1991)」に相当するものと考えられる。藤岡地域には、As-BP Groupの他のテフラも降灰しているが、本道跡においては台地部のローム層の風化が進んでいるために、野外で検出され難くなっているものと考えられる。

このAs-MPに相当すると考えられるテフラの下位の試料のうち、試料番号6にはとくに透明の火山ガラスが多く含まれている。火山ガラスの形態は、平板状のいわゆるバブル型火山ガラスに富み、繊維束状の軽石型火山ガラスも少量含まれている。このテフラは、火山ガラスの特徴から約2.1~2.2万年前に南九州の始良カルデラから噴出した始良Tn火山灰(AT, 町田・新井, 1976)に由来するものと考えられる。

2) 第2地点 (1区2面深掘トレンチ東壁)

8層および7層に相当するシルト層のうち、試料番号1には白色軽石が比較的多く含まれている。軽石はスポンジ状に発泡しており、斑晶に斜方輝石や単斜輝石が認められる。軽石の最大径は1.2mmである。比較的多く含まれる火山ガラスも、スポンジ状に発泡している。これらの特徴から、この軽石は4世紀中葉に浅間火山から噴出した浅間C軽石 (As-C, 新井, 1979, 石川ほか, 1979) に由来すると考えられる。

試料番号10にも、白色軽石が多く含まれている。軽石の最大径は6.2mmで、スポンジ状や繊維束状に良く発泡している。火山ガラスも透明で、スポンジ状や繊維束状に発泡した軽石型火山ガラスに富む。多く含まれる重鉱物は、斜方輝石や単斜輝石である。このテフラは層相や粒子の特徴などから、As-YPに同定される。

3) 第3地点 (1区2面深掘トレンチ谷部)

試料番号1には白色軽石が多く含まれている。軽石はスポンジ状に発泡しており、斑晶に斜方輝石や単斜輝石が認められる。軽石の最大径は1.8mmである。比較的多く含まれる火山ガラスも、スポンジ状に発泡している。これらの特徴から、この軽石はAs-Cに由来すると考えられる。

4) 第4地点 (1区2面3号溝)

試料番号1には白色軽石が多く含まれている。軽石はスポンジ状に発泡しており、斑晶に斜方輝石や単斜輝石が認められる。軽石の最大径は2.6mmである。比較的多く含まれる火山ガラスも、スポンジ状に発泡している。これらの特徴から、この軽石もAs-Cに由来すると考えられる。

4. 考察

低地で検出されたAs-YPの高度は、台地部のそれと比較して明らかに低い。従って、As-YP降灰(約1.3~1.4万年前)以前に形成された谷が低地部に存在することは明らかである。なおAs-YPの下位にある泥炭層は、その層位から前橋台地上に認められる前橋泥炭層(新井, 1962, 辻ほか, 1985)の一部に対比される可能性が大きい。1区2面深掘トレンチ東壁では、As-YPの上位でAs-C(4世紀中葉)の下位に軽微な不整合が認められ、より新しい時期に形成された谷の存在が示唆された。また1区2面谷部でも埋谷堆積物が認められた。この谷は、前述の埋谷堆積物の下部を切って形成されたものと思われる。この最新の埋没堆積物中にもAs-Cが認められたことから、その形成時期はやはり4世紀中葉以前と推定される。

一方1区2面で検出された3号溝覆土中にAs-Cの純層が認められたことから、その構築年代は4世紀中葉を遡るものと推定される。また2号溝はAs-Cを切って構築され、覆土中にAs-Bが認められる。このことから2号溝の構築年代は、4世紀中葉以降で1108(天仁元)年以前と推定される。

5. 小 結

上戸塚正上寺遺跡において野外地質調査とテフラ検出分析を併せて行った結果、1層最下部にAs-A、2層最下部にAs-B、7層上部にAs-Cが検出された。また台地部のローム層の上部や、低地で認められた最も古い谷の埋谷堆積物中にAs-YPが認められた。さらに台地部のローム層のうち暗色帯の直上にAs-B Groupの最下層、また暗色帯中にATの降灰層が検出された。一方谷部では3つの時期に形成されたと考えられる谷の埋谷堆積物が認められた。示標テフラとの層位関係から、最も古い谷の形成時期は約1.3~1.4万年前以前、中期と新期の谷の形成時期は約1.3~1.4万年前以降で4世紀中葉以前と推定された。

自然科学分析

1区2面で検出された3号溝覆土の構築年代は、As-Cとの層位関係から4世紀中葉を遡るものと推定された。また2号溝の構築年代は、As-CとAs-Bとの層位関係から4世紀中葉以降で1108(天仁元)年以前と推定される。

表1 上戸塚正上寺遺跡のテフラ検出分析結果

地 点	試料番号	軽 石			火山ガラス		
		量	色 調	最大径	量	形 態	色 調
1	1	+	白	1.1	+	pm	透 明
	2	++	白	1.3	+++	pm	透 明
	3	-	-	-	++	pm	透 明
	4	-	-	-	++	bw>pm	透 明
	6	-	-	-	+++	bw>pm	透 明
	8	-	-	-	++	bw>pm	透 明
2	1	++	白	1.2	++	pm	透 明
	3	-	-	-	+	bw>pm	透 明
	5	-	-	-	+	bw>pm	透 明
	7	-	-	-	+	bw>pm	透 明
	9	-	-	-	+	bw>pm	透 明
	10	+++	白	6.2	+++	pm	透 明
3	1	+++	白	1.8	++	pm	透 明
4	1	+++	白	2.6	++	pm	透 明

+++++：とくに多い，+++：多い，++：中程度，+：少ない，-：認められない，最大径の単位は，mm。pm：軽石型火山ガラス，bw：バブル型火山ガラス。

文 献

- 新井房夫 (1962) 関東盆地北西部地域の第四紀編年. 群馬大学紀要自然科学編, 10, p. 1-79.
- 新井房夫 (1979) 関東地方北西部の縄文時代以降の示標テフラ層. 考古学ジャーナル, No.157, p.41-52.
- 石川正之助・井上唯雄・梅沢重昭・松本浩一 (1979) 火山堆積物と遺跡 I. 考古学ジャーナル, No.157, p. 3-40.
- 町田洋・新井房夫 (1976) 広域に分布する火山灰-始良 Tn 火山灰の発見とその意義. 科学, 46, p.339-347.
- 町田洋・新井房夫・小田静夫・遠藤邦彦・杉原重夫 (1984) テフラと日本考古学-考古学研究と関係するテフラのカタログ. 古文化財編集委員会編「古文化財に関する保存科学と人文・自然科学」, p.865-928.
- 早田勉 (1991) 浅間火山の生い立ち. 佐久考古通信, No.53, p. 2-7.
- 辻誠一郎・吉川昌伸・吉川純子・能城修一 (1985) 前橋台地における更新世末期から完新世初期の植物化石群集と植生. 第四紀研究, 23, p.263-269.

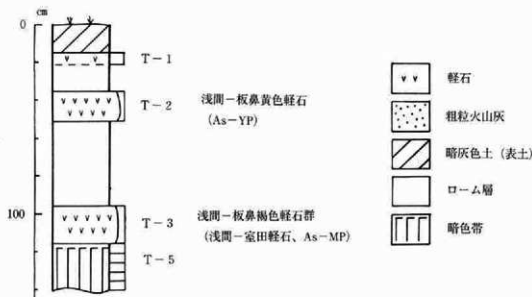


図1 上戸塚正上寺遺跡3区深掘トレンチ東壁の地質柱状図
記号は、分析試料。T：テフラ検出分析

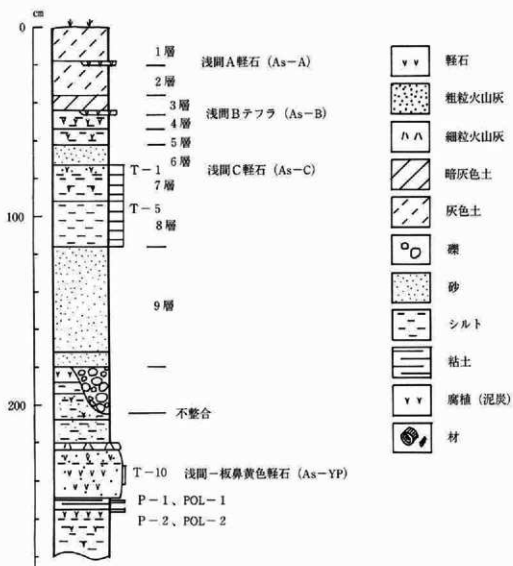


図2 上戸塚正上寺遺跡1区2面深掘トレンチ東壁の地質柱状図

記号は、分析試料。T：テフラ検出分析、P：植物珪酸体分析、POL：花粉分析。

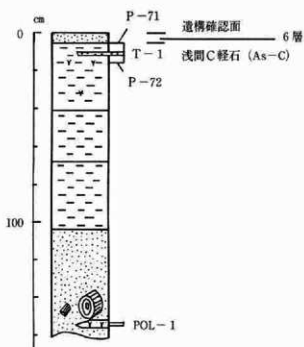


図3 上戸塚正上寺遺跡1区2面深掘トレンチ谷部の地質柱状図
記号は、分析試料。T：テフラ検出分析、P：プラント・オバール分析、POL：花粉分析。

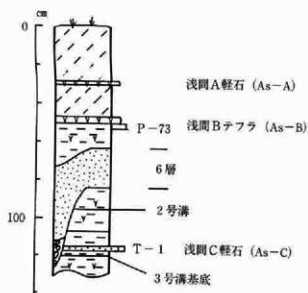


図4 上戸塚正上寺遺跡1区2面3号構上層の地質柱状図
記号は、分析試料。T：テフラ検出分析、P：プラント・オバール分析。

II. 上戸塚正上寺遺跡の花粉分析

1. はじめに

上戸塚正上寺遺跡の発掘調査では、テフラ直下などで泥炭層や粘土層の堆積が認められ、花粉化石の検出が期待された。そこで、これらの土層について花粉分析を行い、当時の植生・環境の推定を試みた。

2. 試料

試料は、1区2面深堀トレンチ東壁からPOL-1（試料1）とPOL-2（試料2）、1区2面深堀トレンチ谷部からPOL-1（試料3）の計3点が採取された。採取層率の詳細については第I章を参照されたい。

3. 方法

試料には以下の順で物理化学処理を施した。

- 5%水酸化カリウム溶液を加え15分間湯煎する。
- 水洗した後、0.5mmの篩で礫などの大きな粒子を取り除き、沈澱法を用いて砂粒の除去を行う。
- 25%フッ化水素酸溶液を加えて30分放置する。
- 水洗した後、水酢酸によって脱水し、アセトリシス処理（無水酢酸9：1濃硫酸のエルドマン氏液を加え1分間湯煎）を施す。
- 再び水酢酸を加えた後、水洗を行う。
- 沈澱に石炭酸フクシンによって染色を行い、グリセリンゼリーで封入してプレパラートを作製する。

以上の物理・化学処理回および水洗は遠心機によって1500rpm、2分間の遠心分離によって上澄みを捨てて行った。

検鏡はプレパラート作製後直ちに、生物顕微鏡によって300～600倍によって行った。結果は同定レベルによって、科、属、亜属の階級で分類された。複数の分類群にまたがるものはハイフン（-）で結んで示した。マツ属に関しては、粒状斑の確認できたものをマツ属単維管束亜属とし、確認できなかったものをマツ属とした。なお、マツ属複雑管束亜属と明らかに同定できるものはなかった。

4. 結果

分析結果は、樹木花粉24、草本花粉8、樹木と草本を双方含む分類群1の計33の分類群、およびシダ植物胞子の単条溝と三条溝の2形態が産出した。結果は花粉遺体一覧を表に示し、花粉総数を基本数とする百分率を算定し花粉組成図にして表した。主要な分類群は写真に示した。

(1) 試料1

花粉化石がほとんどが産出せず、シダ植物単条溝胞子が多量に産出した。花粉化石ではマツ属・カバノキ属・イネ科・キタヤ科が出現し、シダ植物単条溝胞子が花粉胞子総数の96.6%を占める。

(2) 試料2

樹木花粉の占める割合が草本花粉の割合より高い。トウヒ属・単維管束亜属を含むマツ属・カラマツを主とする針葉樹とカバノキ属・ハンノキ属・コナラ属コナラ亜属・ニレ属ケヤキを主とする広葉樹が特徴的に産出する。草本花粉ではカヤツリグサ科が優占し、マルバオモダカ・セリ科が伴われる。

(3) 試料3

樹木花粉の占める割合が草本花粉より高い。コナラ属コナラ亜属・コナラ属アカガシ亜属が20%の高率を示し、他にエノキ属ムクノキ・クリーシ属マテバシイ属・クマシダ属アサダ・ニレ属ケヤキ・トチノキの広葉樹が伴われる。

5. 考 察

試料1で花粉化石がほとんど検出されなかったのは、分解に花粉より強い胞子が残存していることからみて、花粉が分解されたと考えられる。上位の浅間一板鼻黄色軽石 (As-YP) の影響が考えられよう。試料2は亜寒帯 (亜高山帯) 常緑針葉樹林と冷温帯落葉広葉樹林の構成要素から樹木花粉組成が構成されるため、寒冷期の堆積物であることは明かである。上位の浅間一板鼻黄色軽石 (As-YP) からみて、最終寒冷期の堆積物とみなされる。試料3は冷温帯落葉広葉樹林と暖温帯常緑広葉樹林から樹木花粉組成が構成されていることからみて、上部完新統にあたと推測される。以下に推定される植生・環境の考察を行う。

(1) 試料1

花粉化石の出現量が極めて少なく推定できない。

(2) 試料2

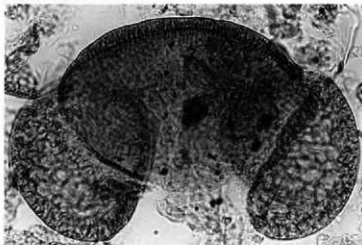
分析結果から、寒冷な気候下に分布するトウヒ属・マツ属単管束亜属などの亜寒帯常緑針葉樹林とカバノキ属を主とする冷温帯落葉広葉樹林が周辺地域に分布していたと推定される。垂直分布帯を考慮すると、常緑針葉樹林が山地部に、落葉広葉樹林が平野部に分布していたと考えられる。ブナ属の花粉化石が検出されず、乾燥した気候が示唆される。浮葉植物のマルバオモダカが産出していること、カヤツリグサ科の出現率が高いことから、試料採取地点周辺は池沼および湿原であったと推定される。

(3) 試料3

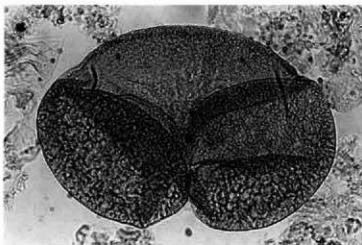
周辺にはコナラ属コナラ亜属を主とする冷温帯落葉広葉樹林とコナラ属アカガシ亜属を主とする暖温帯常緑広葉樹林の夏雨型の照葉樹林が分布していたと推定される。浮葉植物のマルバオモダカ・イネ科・カヤツリグサ科の産出は、試料採取地点周辺が池沼および湿原であったことを示唆している。

上戸塚正上寺遺跡の花粉遺体一覧

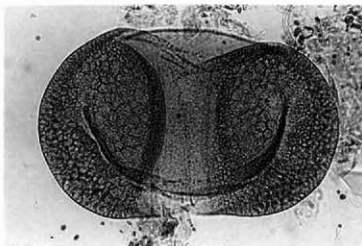
分類群		試料		
学名	和名	1	2	3
Arboreal pollen	樹木花粉			
<i>Abies</i>	モミ属	—	13	—
<i>Picea</i>	トウヒ属	—	60	—
<i>Tsuga</i>	ツガ属	—	4	—
<i>Larix</i>	カラマツ	—	11	—
<i>Pinus</i>	マツ属	—	24	2
<i>Pinus</i> subgen. <i>Haploxylo</i>	マツ属単維管束亜属	1	25	—
<i>Cryptomeria</i>	スギ	—	2	1
Taxaceae-Cephalotaxaceae-Cupressaceae	イチイ科-イヌガヤ科 —ヒノキ科	—	—	1
<i>Juglans</i>	クルミ属	—	—	3
<i>Alnus</i>	ハンノキ属	—	28	3
<i>Betula</i>	カバノキ属	—	88	5
<i>Corylus</i>	ハシバミ属	—	6	2
<i>Carpinus-Ostrya</i>	クマシデ属-アサダ	—	2	6
<i>Castanea-Castanopsis-Pasania</i>	クリ-シイ属-マテバシイ属	—	11	13
<i>Fagus</i>	ブナ属	—	—	1
<i>Quercus</i> subgen. <i>Lepidobalanus</i>	コナラ属コナラ亜属	—	25	85
<i>Quercus</i> subgen. <i>Cyclobalanus</i>	コナラ属アカガシ亜属	—	—	71
<i>Ulmus-Zelkova</i>	ニレ属-ケヤキ	—	26	12
<i>Celtis-Aphananthe</i>	エノキ属-ムクノキ	—	—	35
<i>Acer</i>	カエデ属	—	2	1
<i>Aesculus</i>	トチノキ	—	2	8
<i>Tilia</i>	シナノキ属	—	1	1
Oleaceae	モクセイ科	—	1	—
<i>Fraxinus</i>	トネリコ属	—	2	—
<i>Sambucus-Viburnum</i>	ニワトコ属-ガマズミ属	—	4	—
Arboreal + Nonarboreal pollen	樹木 + 草本花粉			
Moraceae-Urticaceae	クワ科-イラクサ科	—	1	—
Nonarboreal pollen	草本花粉			
<i>Caldesia</i>	マルバオモダカ	—	27	21
Gramineae	イネ科	5	7	56
Cyperaceae	カヤツリグサ科	—	173	18
Amoryllidaceae	ヒガンバナ科	—	—	5
Cruciferae	アブラナ科	—	—	1
Umbelliferae	セリ科	—	23	23
other Asteroideae	キク亜科	1	1	—
<i>Artemisia</i>	ヨモギ属	—	3	6
Fern spore	シダ植物胞子			
Monolate type spore	単条溝胞子	201	9	5
Trilate type spore	三条溝胞子	—	4	—
Arboreal pollen	樹木花粉	1	337	250
Arboreal + Nonarboreal pollen	樹木 + 草本花粉	—	1	—
Nonarboreal pollen	草本花粉	6	234	107
Total pollen	花粉総数	7	572	357
Unknown pollen	未同定花粉	—	8	6
Fern spore	シダ植物胞子	201	13	5



1 モミ属

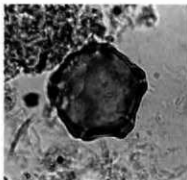


2 トウヒ属

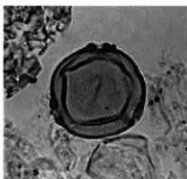


3 トウヒ属

—45 μ (1~3)



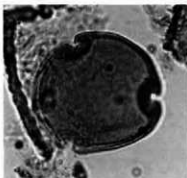
4 ハンノキ属



5 カバノキ属



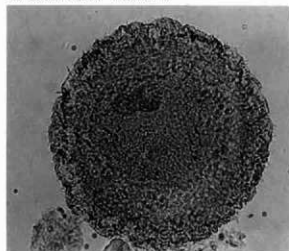
6 コナラ属コナラ亜属



7 シナノキ属

—40 μ (3~6)

上戸塚正上寺遺跡 花粉化石II



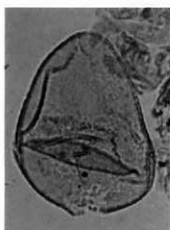
1 ツガ属



2 カラマツ



3 マツ属単維管束亜属
——45 μ (1~3)



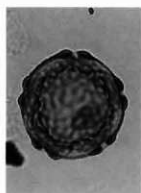
4 カヤツリグサ科



5 セリ科



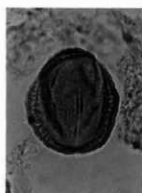
6 コナラ属
アカガシア属



7 ニレ属-ケヤキ



8 マルバオモダカ



9 ヨモギ属
——30 μ

Ⅲ. 上戸塚正上寺遺跡の植物珪酸体分析

1. はじめに

植物珪酸体は植物体内で形成されたガラス質の細胞であり、植物が枯れた後も微化石（プラント・オパール）となって土壤中に半永久的に残っている。この微化石を遺跡土壌などから検出し、同定および定量する方法を植物珪酸体（プラント・オパール）分析法とよんでいる（藤原，1976）。本章では、同分析を用いて、上戸塚正上寺遺跡における稲作跡の探査、および遺跡周辺の古植生・古環境の推定を試みた。

2. 試料

試料は、1区2面深堀トレンチ谷部からP-71とP-72、1区2面3号溝からP-73、1区2面深堀トレンチ東壁からP-1とP-2の計5点が採取された。採取層準の詳細については第1章を参照された。

3. 分析法

植物珪酸体の抽出と定量は、「プラント・オパール定量分析法（藤原，1976）」をもとに、次の手順で行った。

- (1) 試料土の絶乾（105℃・24時間）
- (2) 試料土約1gを秤量，ガラスビーズ添加（直径約40 μ m，約0.02g）
※電子分析天秤により1万分の1gの精度で秤量
- (3) 気相灰化法による脱有機物処理
- (4) 超音波による分散（300W・42KHz・10分間）
- (5) 沈底法による微粒子（20 μ m以下）除去，乾燥
- (6) 封入剤（オイキット）中に分散，プレバート作成
- (7) 検鏡・計数

同定は、機動細胞珪酸体由来する植物珪酸体をおもな対象とし、400倍の偏光顕微鏡で行った。計数は、ガラスビーズ個数が400以上になるまで行った。これはほぼプレバート1枚分の精査に相当する。試料1gあたりのガラスビーズ個数に、計数された植物珪酸体とガラスビーズ個数の比率をかけて、試料1g中の植物珪酸体個数を求めた。

また、この値に試料の仮比重（1.0と仮定）と各植物の換算係数（機動細胞珪酸体1個あたりの植物体乾重，単位： 10^{-5} g）をかけて、単位面積で層厚1cmあたりの植物体生産量を算出した。換算係数は、イネは赤米，ヨシ属はヨシ，ウシクサ族はススキ，キビ族はヒエの値を用いた。その値は、それぞれ2.94（種実重は1.03），6.31，1.24，12.2である（杉山・藤原，1987）。タケ亜科については数種の平均値を用いて葉身重を算出した。ネザサ属は0.24，クマザサ属は0.22である（杉山，1987）。

4. 分析結果

各試料から検出された植物珪酸体の分類群と検出個数を表1，表2および図1に示す。なお、1区2面深堀トレンチ谷部のP-71とP-72、1区2面3号溝のP-73については稲作跡の検証および探査が主目的であるため、同定および定量は、イネ，ヨシ属，タケ亜科，ウシクサ族（ススキやチガヤなどが含まれる），キビ族（ヒエなどが含まれる）の主要な5分類群に限定した。巻末に各分類群の顕微鏡写真を示す。

5. 考 察

(1) 稲作の可能性

水田跡（稲作跡）の検証や探査を行う場合、一般にイネの植物珪酸体が試料1gあたりおよそ5,000個以上と高い密度で検出された場合に、そこで稲作が行われていた可能性が高いと判断している。また、その層に植物珪酸体密度のピークが認められれば、上層から後代のものが混入した危険性は考えにくくなり、その層で稲作が行われていた可能性はより確実なものとなる。以上の判断基準にもとづいて稲作の可能性について検討を行った。

1区2面深堀トレンチ谷部地点では、浅間C軽石の直上層（P-71）と直下層（P-72）について分析を行った。その結果、浅間C軽石の直上層からイネの植物珪酸体が検出された。密度は3,100個/gと比較的低い値であるが、直上を砂層で覆われていることから、上層から後代の植物珪酸体が混入した危険性は考えにくい。したがって、同層の時期に同層もしくはその周辺で稲作が行われていた可能性が考えられる。

1区2面3号溝地点では浅間Bテフラ直下層（P-73）について分析を行った。その結果、イネの植物珪酸体が5,100個/gと高い密度で検出された。したがって、同層で稲作が行われていた可能性は高いと考えられる。

(2) 古植生・古環境の推定

1区2面深堀トレンチ東壁地点では浅間一板鼻黄色軽石（As-YP）直下の粘土層（P-1）、およびその下層の泥炭層（P-2）について分析を行った。なお、この泥炭層は、その層位などから前橋台地上に認められる前橋泥炭層の下部に相当する可能性が考えられる（第I章参照）。

泥炭層では、タケ亜科B1タイプ（クマザサ属など）やカヤツリグサ科、棒状珪酸体などが検出された。カヤツリグサ科は植物体内に含まれる植物珪酸体の密度が低いことから、給源植物の生産量を推定する場合には、他の分類群と比較してかなり過大に評価する必要がある。これらのことから、当時ここはカヤツリグサ科が多く生育する湿地であったものと推定され、その周辺部などではクマザサ属も見られたものと考えられる。クマザサ属は比較的寒冷なところで生育していることから、当時は比較的寒冷な気候条件であったものと推定される。

浅間一板鼻黄色軽石直下の粘土層では、カヤツリグサ科はまったく見られず、棒状珪酸体なども大幅に減少しているが、タケ亜科B1タイプ（クマザサ属など）は増加している。このことから、この時期にはなんらかの原因で土壌が乾燥化してカヤツリグサ科の生育には適さない環境になったものと考えられ、クマザサ属の生育が促進されたものと推定される。

6. まとめ

1区2面深堀トレンチ谷部の浅間C軽石直上層および1区2面3号溝の浅間Bテフラ直下層では、イネの植物珪酸体が比較的多量に検出され、これらの層で稲作が行われていた可能性が認められた。

前橋泥炭層下部に相当すると考えられる泥炭層の堆積当時は、カヤツリグサ科が多く生育する湿地であり、その周辺部などではクマザサ属も見られたものと推定された。その後、浅間一板鼻黄色軽石直下の粘土層の堆積当時は、なんらかの原因で乾燥した土壌条件に移行し、クマザサ属の生育が促進されたものと推定された。また、当時は比較的寒冷な気候条件であったと推定された。なお、以上の推定結果は花粉分析の所見ともおおむね一致している。

自然科学分析

参考文献

- 杉山真二, 1987. タケ亜科植物の機動細胞珪酸体. 富士竹類植物園報告, 第31号: 70-83.
- 杉山真二・藤原宏志, 1987. 川口市赤山陣屋跡遺跡におけるプラント・オパール分析. 赤山-古環境編一. 川口市遺跡調査会報告, 第10集, 281-298.
- 藤原宏志, 1976. プラント・オパール分析法の基礎的研究(1)-数種イネ科栽培植物の珪酸体標本と定量分析法一. 考古学と自然科学, 9: 15-29.
- 藤原宏志, 1979. プラント・オパール分析法の基礎的研究(3)-福岡・板付遺跡(夜臼式)水田および群馬・日高遺跡(弥生時代)水田におけるイネ (*O. sativa*L.) 生産総量の推定一. 考古学と自然科学, 12: 29-41.
- 藤原宏志・杉山真二, 1984. プラント・オパール分析法の基礎的研究(5)-プラント・オパール分析による水田址の探査一. 考古学と自然科学, 17: 73-85.

表1-1 上戸塚正上寺遺跡におけるおもな植物珪酸体(プラント・オパール)の検出結果

(単位: ×100個/g)

分類群	1区2面深堀トレンチ谷部		1区2面3号溝
	P-71	P-72	P-73
イネ	31		51
ヨシ属	54	15	14
ウシクサ族(ススキ属など)	23		7
キビ族(ヒエ属など)			
タケ亜科	93	119	117

表1-2 上戸塚正上寺遺跡におけるおもな植物の推定生産量

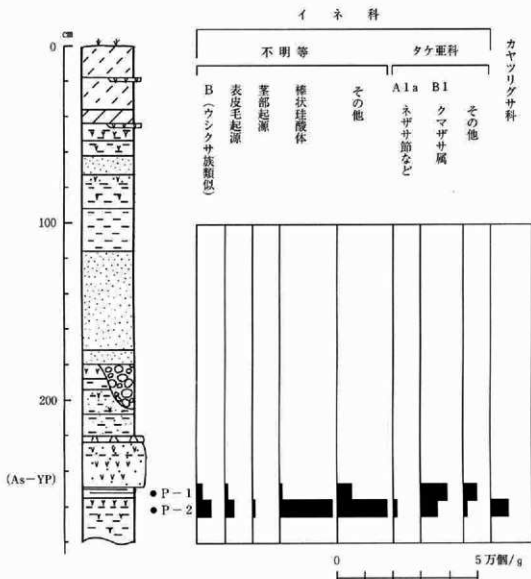
(単位: kg/m²・cm)

分類群	1区2面深堀トレンチ谷部		1区2面3号溝
	P-71	P-72	P-73
イネ	0.91		1.50
ヨシ属	3.41	0.95	0.88
ウシクサ族(ススキ属など)	0.29		0.09
キビ族(ヒエ属など)			
タケ亜科	0.45	0.57	0.56

表2 上戸塚正上寺遺跡における植物珪酸体（プラント・オパール）分析結果

（単位：×100個/g）

分類群	1区2面深堀トレンチ東壁	
	P-1	P-2
イネ科		
不明Bタイプ（ウシクサ族類似）	21	51
表皮毛起源	7	37
茎部起源		7
棒状珪酸体	7	184
その他	57	177
タケ亜科		
A1aタイプ（ネザサ節など）		7
B1タイプ（クマザサ属など）	94	59
その他	50	7
カヤツリグサ科		66
（海綿骨針）	554	22
植物珪酸体総数	236	595



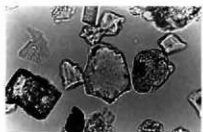
上戸塚正上寺遺跡1区2面深掘トレンチ東壁の植物珪酸体分析結果

III 植物珪酸体分析

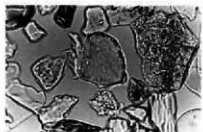
植物珪酸体 (プラント・オパール) の顕微鏡写真

(倍率はすべて400倍)

No.	分類群	地点	試料名
1	タケ亜科 B 1 タイプ (クマガヤ属)	1区 2 面深淵トレンチ東壁	2
2	タケ亜科 B 1 タイプ (クマガヤ属)	1区 2 面深淵トレンチ東壁	1
3	表皮毛起源	1区 2 面深淵トレンチ東壁	2
4	棒状珪酸体	1区 2 面深淵トレンチ東壁	2
5	カヤツリグサ科	1区 2 面深淵トレンチ東壁	2
6	カヤツリグサ科	1区 2 面深淵トレンチ東壁	2
7	海綿骨針	1区 2 面深淵トレンチ東壁	1
8	海綿骨針	1区 2 面深淵トレンチ東壁	1
9	不明	1区 2 面深淵トレンチ東壁	1



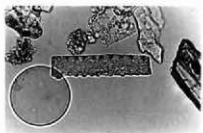
1



2



3



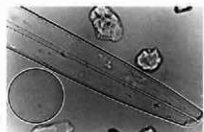
4



5



6



7



8



9

0 50 100 μm

IV. 上戸塚正上寺遺跡出土大型植物化石と木材

吉川純子・藤根久（パレオ・ラボ）

1. はじめに

上戸塚正上寺遺跡は、藤岡市上戸塚に所在する台地部と低地部からなる遺跡である。遺跡からは、古墳時代の竪穴住居跡や中・近世の掘立柱建物跡などが検出され、また神流川の支流である中川の低地部からは、縄文時代晩期～弥生時代中期と推定される河道堆積物から自然木（流木）が多量に出土し、また古墳時代前期～中期と推定される溝から4点の木製品を含む自然木が出土している。また、これら河道や溝からは、大型植物化石も多く見つかり、現地において取り上げられている。

ここでは、これら河道や溝から出土した木製品や自然木の樹種あるいは大型植物化石の検討を行う。なお、大型植物化石については吉川、木材については藤根がそれぞれ担当する。

2. 大型植物化石について

a. 試料と記載

試料は、1区2面の2号溝と7号溝（古墳時代前期～中期）、1区3面河道（縄文時代晩期～弥生時代中期）、さらに住居出土土器内の炭化物である。

【2面の2号溝と7号溝、3面河道】

オニグルミ：様々な状態の核を産出した。摩擦風化を受けたものは、長い間流されたか、乾燥状態にあったものであろう。食痕とあるのは核の壁をかじってあるもので、ネズミなどであろうと推定される。縫合面食痕とは縫合線に歯を差入れて割っているもので、リスなどであろうと思われる。圧痕は、一方から強い圧力を受けて、核がへこんだり割れたりしていることをさす。

コナラ：殻斗は鱗片で構成され、横から見ると丸みが強い三角形である。

ナラガシワ：殻斗はコナラよりやや長い鱗片からなり、横から見ると球を上下から押しつぶした形である。アカガシ亜属：幼果の殻斗は同心円状に鱗片が含着している。

モモ：核は現在のモモよりやや小さく、形態はほぼ同じか、やや丸みを帯びる。古代モモに匹敵するような小さいモモはみられなかった。核の平均の長さは25mm前後である。

サクラ属サクラ節：核はやや風化されており、長さは6-7mmと小さい。

エゴノキ：内果皮は10mm程で、レンズ形を丸くしたような形に3本の溝が走る。表面はややざらついた感じである。

コハクウンボク：大きさや形がエゴノキに酷似するが、コハクウンボクのほうがレンズ形が鋭く、表面はつるつるした感じである。

ヒョウタン近似種：果実の破片は細長く、果実の基部ではないかと思われる。

【土器内炭化物】

古墳時代とされる、土器2個の内部から出土した炭化種実はずべてイネ（*Oryza sativa* L.）の胚乳の炭化した物であった。2区7号溝No.7の土器からは焼け膨れた胚乳の完形1個と胚乳の破片を3個出土した。焼け膨れた炭化米の長さは4.0mmである。胚芽部分が残っているかどうかは不明である。破片のうちの1個は胚芽

が脱落した後が確認できる。

表1 上戸塚正上寺遺跡出土大型植物化石分類群別一覧表

(() 内は破片の個数を示す。)

分類群別	産出部位	産出遺構		
		2号溝	2面 7号溝	3面 河道
イヌガヤ <i>Cephalotaxus harringtonia</i> (Knight) K. Koch	種子			2
オニグルミ <i>Juglans ailanthifolia</i> Carr.	核	(1)	(1)	29(16)
	食痕核			24(17)
	風化核			3(16)
	圧痕核			2(11)
コナラ <i>Quercus serrata</i> Thunb.	殻斗			1
	幼果			7
ナラガシワ <i>Quercus aliena</i> Blume.	殻斗			14(7)
	果実			1
コナラ属アカガシ亜属 <i>Quercus</i> subgen. <i>Cyclobalanopsis</i>	幼果			1
コナラ属コナラ亜属 <i>Quercus</i> subgen. <i>Lepidobalanus</i>	果実			(1)
クリ <i>Castanea crenata</i> Sieb. et Zucc.	果実		(3)	
モモ <i>Prunus persica</i> (Linn.) Batsch	核	5	4(3)	
	風化核	1		
サクラ属サクラ節 <i>Prunus</i> sect. <i>Pseudocerasus</i>	核			10(1)
トチノキ <i>Aesculus turbinata</i> Blume	果実		1(1)	1(76)
	幼果			8(1)
	種子		(9)	35(105)
	幼種子			16
ムクロジ <i>Sapindus mukorossi</i> Gaertn.	種子			47(1)
	幼種子			1
エゴノキ <i>Styrax japonica</i> Sieb. et Zucc	内果皮		1	79(2)
ヨハクウンボク <i>Styrax shiraiana</i> Makino	内果皮			41
ヒョウタン近似種 cf. <i>Lagenaria</i>	果実		(7)	

自然科学分析

2区7号溝No.3の土器からは炭化した胚乳の完形が2個と破片を2個出土した。いずれの胚乳も胚芽部分は脱落しているが、比較的崩れずに炭化している。No.3の炭化米の各寸法は、1つが長さ4.7mm、幅2.1mm、厚さ1.9mm、もう1つが長さ3.5mm、幅1.8mm、厚さ1.7mmである。

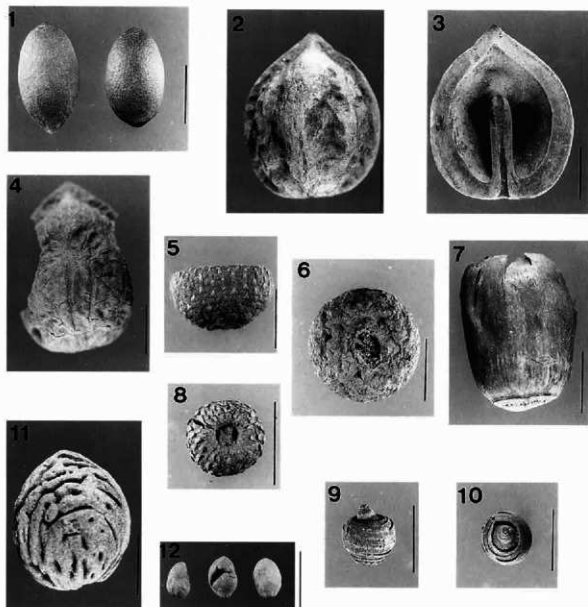
b. 考察

1区2面2号溝は古墳時代と推定され、モモ核が多く、オニグルミの核が1個取り上げられている。1区2面7号溝も古墳時代と推定され、モモ核が多く、ほかにオニグルミ核、クリ果実、トチノキ果実及び種子、エゴノキ内果皮、ヒョウタン近似種の果皮が取り上げられた(表1)。

1区3面河道は縄文時代晩期から弥生時代と推定され、前者の遺溝とは異なった分類群が取り上げられている。圧倒的に多いのはオニグルミ及びトチノキで、ほかにエゴノキ、ナラガシワ、コハクウンボク、ムクロジも多い。イヌガヤ、コナラ、アカガシ亜属、コナラ亜属、サクラ属サクラ節も取り上げられている。

古墳時代ではモモ核が大変多く、他の分類群もクリ、ヒョウタン近似種、オニグルミといったヒトに由来すると思われるような構成である。縄文時代の河道では、イヌガヤ、ナラガシワ、エゴノキ、コハクウンボクといった、林を構成するような分類群が多い。また、オニグルミには動物による食痕は見られるものの、人による加工痕は見出されなかった。他の種実の構成種から見ても周辺に生育していた植物から人の手を経ずに供給されて堆積したと考えられる。

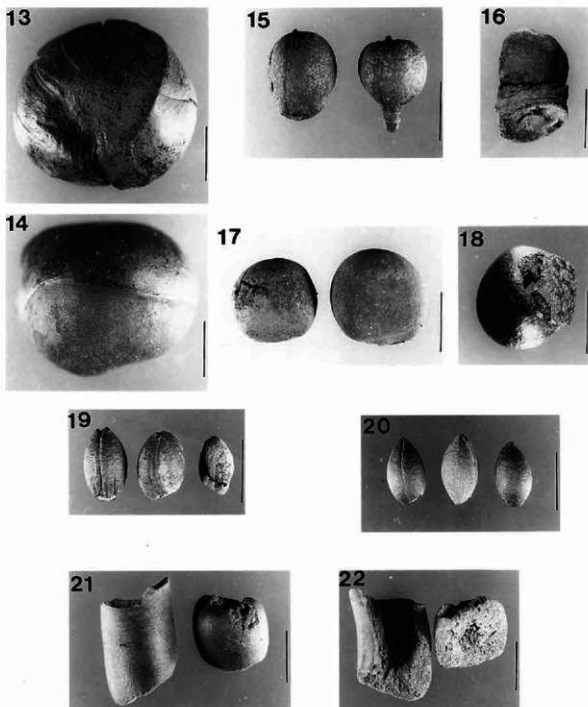
土器内炭化米は、いずれも顆は脱落しているが、炭化前に脱落したか、炭化後に脱落したかは不明である。土器内の炭化米は加熱調理時に炭化したと考えがちな場合があるが、土器内壁に付着している場合を除いては土器が焼く時に入りこんだと考えの方が妥当である。土器の出土状況や炭化米の産出時の状況は不明であるが、通常は堆積時に入ったものが多いであろう。これは、遺溝自体の形態や用途の差にもよるが、時代の違いが大きいであろう。



図版1: 上戸塚正上寺遺跡の大型植物化石1

スケールは1cm、試料は1区3面河道のほか

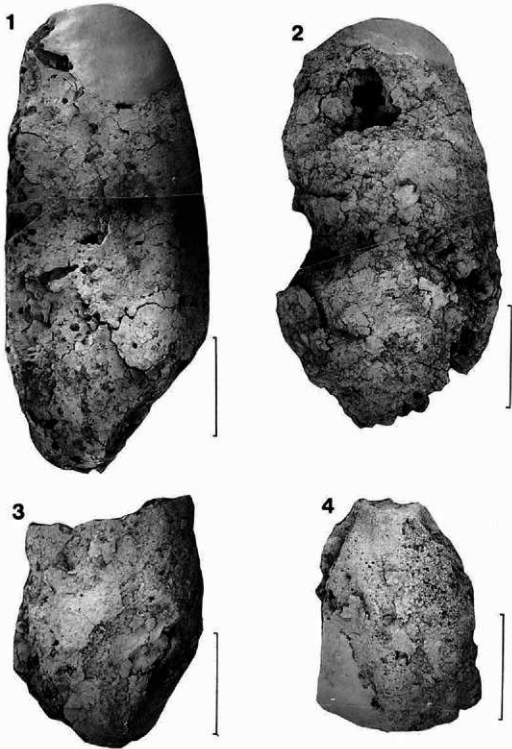
1. イヌガヤ、種子 (No. 9) 2-4. オニグルミ、核、2-3 (2号溝No. 7)、4は食痕 (No. 1) 5-7. ナラガシワ、5・6は殻斗、7は果实、8は幼果 (No. 8) 9-10. アカガシ亜属、幼果 (No. 8) 11. モモ、核 (2号溝No. 3) 12. サクラ属サクラ節、核 (No. 9)



図版 2. 上戸塚正上寺道跡の大型植物化石 2

スケールは 1cm, 試料は 1区 3面河道のほか

13-15. トチノキ, 13, 14は種子 (No. 2), 15は幼果 (No. 7) 16-18. ムクロジ、種子 (No. 7) 16は幼種子 (No. 8) 19. エゴノキ、内果皮 (No. 9) 20. コハクウンボク、内果皮 (No. 9) 21-22. ヒョウタン近似種、果実 (7号溝No.11)



図版3. 上戸塚正上寺遺跡の炭化種実 (スケールは1mm)

1. 胚乳、完形、2区7号溝No. 3 (上部に付着しているのは電導をよくするためのペースト) 2. 焼け膨れた胚乳、2区7号溝No. 7 3. 胚乳、破片 (右下部分が胚芽脱落跡)、2区7号溝No. 7 4. 胚乳、破片、2区7号溝No. 7

自然科学分析

3. 出土材について

a. 方法と記載および結果

樹種の同定を検討した材試料は、合計277点である。これらは、大半が自然木（流木）であり、木製品はこのうち4点である。これらは、(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団において、プレパラートの作成が行われた。樹種の同定は、これら標本を光学顕微鏡下で40～400倍の倍率で観察を行い、現生標本との比較により行う。表1～3にその結果を示す。参考として、材組織の記載中の主な用語については、図1にその概略を示した。なお、保存の悪く樹種を同定できないものは、材組織の特徴から散孔材とした。なお、プレパラートは、(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団に保管してある。

同定された分類群は、38分類群で、2亜属13属2節19種である。このうち針葉樹が6分類群で、他の31分類群は広葉樹である。以下に、同定の根拠となる各分類群の記載について述べる。

カヤ *Torreya nucifera* (Linn.) Sieb. et Zucc. イチイ科 図版1a～1c.

仮道管および放射柔細胞からなる針葉樹で、早材部から晩材部への移行は緩やかである（横断面）。放射組織は、柔細胞からなり単列で1～5細胞高である。また、分野壁孔はヒノキ型で4個見られる（接線断面）。仮道管の内壁には、2本のらせん肥厚が対になって分布する（放射・接線断面）。

以上の形質から、イチイ科のカヤの材と同定される。カヤは、本州の宮城県以南の暖帯から温帯にかけて分布する樹高25m、直径90cmに達する常緑針葉樹である。

モミ属 *Abies* マツ科 図版2a～2c.

仮道管および放射柔細胞からなる針葉樹材で、早材部から晩材部への移行は比較的緩やかである。また、早材部仮道管は大きく薄壁で、晩材部仮道管は厚壁で扁平でかつ狭い（横断面）。放射組織は、柔細胞からなり単列で2～26細胞高である（接線断面）。また、その分野壁孔はトウヒ型で1分野に1～2個存在する。放射組織の壁は厚く、じゅず状末端壁を有する（放射断面）。

以上の形質から、マツ科のモミ属の材と同定される。モミ属の樹木には、亜高山帯に分布するシラビソ (*A. veitchii*) やオオシラビソ (*A. mariesii*)、暖帯～温帯に分布するモミ (*A. firma*) などがある。いずれも樹高30m、幹径1mに達する常緑針葉樹である。

カラマツ属 *Larix* マツ科 図版3a～3c.

仮道管、放射柔細胞、垂直および水平樹脂道をもつ針葉樹である。早材部から晩材部への移行はやや急で、年輪界は明瞭である（横断面）。放射組織には放射仮道管があり、丸い有縁壁孔が見られる。また、分野壁孔は、トウヒ型ないしヒノキ型で1分野に3～4個見られる（放射断面）。これ以外の放射組織は、柔細胞で、仮道管およびエビセリウム細胞を含めて、1～3細胞幅、3～35細胞高である（接線断面）。

以上の形質から、マツ科のカラマツ属の材と同定される。カラマツ属には本州中部のおもに亜高山帯に生育するカラマツ (*L. leptolepis*) と南千島と樺太などに生育するグイマツ (*L. gmetinii*) があるが、本種はカラマツと考えられる。

マツ属 *Pinus* マツ科 図版4a～4c.

放射仮道管、垂直および水平樹脂道、これを取り囲むエビセリウム細胞からなる針葉樹で、早材部から晩

表1. 上戸塚正上寺遺跡出土材の樹種 (その1)

No.	報告No.	出土層位	製品名	樹種	No.	報告No.	出土層位	製品名	樹種
1	1	2面2号溝	板材	モミ属	51	101	2面7号溝	自然木	ムクロジ
2					52	103			モミ属
3	40	2面7号溝	柄	ヒノキ属	53	104			ケヤキ
4	52	*	板材	モミ属	54	109			散孔材B
5	184	*	箸?	トネリコ属	55	110			モミ属
6	185	*	火鑽板	マタタビ属	56	111			ムクロジ
7					57	112			コナラ節
8					58	114			エノキ属
9					59	115			ムクロジ
10					60	118			*
11	2	2面2号溝	自然木	カエデ属	61	132			トリネコ属
12	3	*	*	モミ属	62	137			カエデ属
13	4	*	*	*	63	169			コナラ重属
14	5	*	*	ヒノキ属	64	180			コナラ節
15	6	*	*	クスギ節	65				
16	7	*	*	*	66	B-1	*	*	アカガシ重属
17	8	*	*	コナラ節	67	B-2	*	*	スギ
18	9	*	*	カエデ属	68	B-3	*	*	ムクロジ
19	10	*	*	モミ属	69	B-4	*	*	ムクノキ
20	11	*	*	エノキ属	70	B-5	*	*	カエデ属
21	12	*	*	モミ属	71	B-6	*	*	ムラサキシキブ属
22	13	*	*	マツ属	72	B-7	*	*	カヤ
23	15	*	*	コナラ節	73	B-8	*	*	ムラサキシキブ属
24	16	*	*	*	74	B-9	*	*	クスギ節
25					75	B-10	*	*	ケヤキ
26	A-1	2面2号溝	*	カヤ	76	底面	*	*	モミ属
27	A-2	*	*	トネリコ属	77				
28	A-3	*	*	コクサキ	78	1	3面河道	*	アサダ
29	A-4	*	*	ヌルデ	79	2	*	*	モミ属
30	A-5	*	*	コナラ節	80	3	*	*	コナラ節
31	A-6	*	*	*	81	4	*	*	ケヤキ
32	A-7	*	*	*	82	5	*	*	ムクロジ
33					83	6	*	*	コナラ節
34	11	2面7号溝	*	クスギ節	84	7	*	*	カエデ属
35	18	*	*	ニワトコ	85	9	*	*	クリ
36	30	*	*	モミ属	86	10	*	*	*
37	31	*	*	コナラ節	87	11	*	*	カエデ属
38	32	*	*	カエデ属	88	12	*	*	クリ
39	44	*	*	トネリコ属	89	13	*	*	コナラ節
40	45	*	*	ムクロジ	90	14	*	*	*
41	46	*	*	モミ属	91	16	*	*	クリ
42	47	*	*	ムクノキ	92	17	*	*	コナラ節
43	57	*	*	マツ属	93	18	*	*	クロモジ属
44	60	*	*	モミ属	94	19	*	*	トチノキ
45	73	*	*	クスギ節	95	20	*	*	コナラ節
46	74	*	*	コナラ節	96	23	*	*	ムクロジ
47	77	*	*	クスギ節	97	24	*	*	コナラ節
48	78	*	*	モミ属	98	25	*	*	クリ
49	80	*	*	散孔材A	99	26	*	*	*
50	100	*	*	カエデ属	100	27	*	*	ムクノキ

自然科学分析

表2. 上戸塚正上寺遺跡出土土材の樹種 (その2)

No.	報告No.	出土層位	製品名	樹種	No.	報告No.	出土層位	製品名	樹種
1	28	3面河道	自然木	ク リ	51	84	3面河道	自然木	クロモジ属
2	29	*	*	コナラ節	52	85	*	*	コナラ属
3	31	*	*	*	53	86	*	*	クロモジ属
4	33	*	*	エノキ属	54	87	*	*	オニグルミ
5	34	*	*	コナラ節	55	88	*	*	エノキ属
6	35	*	*	クロモジ属	56	89	*	*	クロモジ属
7	38	*	*	ク リ	57	90	*	*	コナラ節
8	39	*	*	コクサギ	58	91	*	*	ムクロジ
9	40	*	*	ク リ	59	92	*	*	アサダ
10	41	*	*	*	60	93	*	*	ク リ
11	42	*	*	コナラ節	61	94	*	*	サクラ属
12	43	*	*	トチノキ	62	95	*	*	カラマツ属
13	44	*	*	ムクロジ	63	96	*	*	ク リ
14	45	*	*	ケヤキ	64	97	*	*	ヤマグワ
15	46	*	*	コナラ節	65	98	*	*	*
16	48	*	*	カエデ属	66	99	*	*	トチノキ
17	49	*	*	コナラ節	67	100	*	*	ハリギリ
18	50	*	*	ク リ	68	101	*	*	ク リ
19	51	*	*	*	69	102	*	*	トリヘソ属
20	52	*	*	エゴノキ属	70	103	*	*	アカメガシフ
21	53	*	*	ケヤキ	71	104	*	*	トチノキ
22	54	*	*	クロモジ属	72	105	*	*	フ ジ
23	55	*	*	ムクノキ	73	106	*	*	カエデ属
24	56	*	*	*	74	107	*	*	ク リ
25	57	*	*	ク リ	75	108	*	*	コナラ節
26	58	*	*	オニグルミ	76	109	*	*	ク リ
27	59	*	*	ムクノキ	77	110	*	*	アサダ
28	60	*	*	アサダ	78	112	*	*	クロモジ属
29	61	*	*	コナラ節	79	113	*	*	トチノキ
30	62	*	*	ク リ	80	115	*	*	カエデ属
31	63	*	*	コナラ属	81	116	*	*	クロモジ属
32	64	*	*	*	82	117	*	*	サクラ属
33	65	*	*	*	83	118	*	*	ネムノキ
34	66	*	*	ケヤキ	84	119	*	*	ムクロジ
35	67	*	*	エノキ属	85	120	*	*	コナラ節
36	69	*	*	ケヤキ	86	121	*	*	*
37	70	*	*	クスギ節	87	122	*	*	クロモジ属
38	71	*	*	ク リ	88	123	*	*	ク リ
39	72	*	*	ケヤキ	89	124	*	*	カエデ属
40	73	*	*	アサダ	90	125	*	*	トチノキ
41	74	*	*	ク リ	91	126	*	*	ク リ
42	75	*	*	*	92	127	*	*	エノキ属
43	76	*	*	ニワトコ	93	128	*	*	カエデ属
44	77	*	*	コナラ節	94	129	*	*	ク リ
45	78	*	*	ク リ	95	130	*	*	ケンボナシ属
46	79	*	*	ムクノキ	96	131	*	*	ク リ
47	80	*	*	ク リ	97	132	*	*	コナラ節
48	81	*	*	エノキ属	98	133	*	*	*
49	82	*	*	ムクロジ	99	134	*	*	サクラ属
50	83	*	*	サクラ属	100	135	*	*	ケンボナシ属

表3. 上戸塚正上寺遺跡出土材の樹種 (その3)

No.	報告No.	出土層位	製品名	樹種	No.	報告No.	出土層位	製品名	樹種
1	136	3面河道	自然木	トチノキ	51	188	3面河道	自然木	エノキ属
2	137	*	*	エノキ属	52	189	*	*	クスギ節
3	138	*	*	カエデ属	53	190	*	*	コナラ節
4	139	*	*	ク リ	54	191	*	*	ムクノキ
5	140	*	*	クロモジ属	55	192	*	*	コナラ節
6	141	*	*	エゴノキ属	56	193	*	*	ク リ
7	142	*	*	コナラ節	57				
8	143	*	*	ミツバウツギ	58	C-1	*	*	カエデ属
9	144	*	*	エノキ属	59	C-2	*	*	ムクロジ
10	145	*	*	ク リ	60	C-3	*	*	*
11	146	*	*	コナラ節	61	C-4	*	*	フ ジ
12	147	*	*	クロモジ属	62	C-5	*	*	トチノキ
13	150	*	*	ク リ	63	C-6	*	*	*
14	151	*	*	コナラ節	64	C-7	*	*	カエデ属
15	152	*	*	オニグルミ	65	C-8	*	*	ク リ
16	153	*	*	エゴノキ属	66	C-9	*	*	トネリコ属
17	154	*	*	エノキ属	67	C-10	*	*	エノキ属
18	155	*	*	トチノキ	68	C-11	*	*	トチノキ
19	156	*	*	コナラ節	69	C-12	*	*	*
20	157	*	*	イヌエンジュ	70	C-13	*	*	カエデ属
21	158	*	*	*	71	C-14	*	*	コナラ節
22	159	*	*	トチノキ	72	C-15	*	*	アサダ
23	160	*	*	コナラ節	73	C-16	*	*	オニグルミ
24	161	*	*	*	74	C-17	*	*	ムクロジ
25	162	*	*	*	75	C-18	*	*	エゴノキ属
26	163	*	*	イヌエンジュ	76	C-19	*	*	カ ヤ
27	164	*	*	コナラ節	77	C-20	*	*	エゴノキ属
28	165	*	*	ク リ	78	C-21	*	*	ク リ
29	166	*	*	*	79	C-22	*	*	トチノキ
30	167	*	*	トチノキ	80	C-23	*	*	カエデ属
31	168	*	*	トネリコ属	81	C-24	*	*	*
32	169	*	*	ク リ	82	C-25	*	*	ヤマグワ
33	170	*	*	ミツバウツギ	83	C-26	*	*	ムクノキ
34	171	*	*	ク リ	84	C-27	*	*	フ ジ
35	172	*	*	*	85	C-28	*	*	トネリコ属
36	173	*	*	コナラ節	86	C-29	*	*	サクラ属
37	174	*	*	*	87	C-30	*	*	クスギ節
38	175	*	*	トネリコ属					
39	176	*	*	ク リ					
40	177	*	*	*					
41	178	*	*	オニグルミ					
42	179	*	*	ムクロジ					
43	180	*	*	ク リ					
44	181	*	*	コナラ節					
45	182	*	*	トネリコ属					
46	183	*	*	オニグルミ					
47	184	*	*	カラマツ属					
48	185	*	*	コナラ節					
49	186	*	*	ク リ					
50	187	*	*	*					

自然科学分析

材部への移行は緩やかである（横断面）。分野壁孔は窓状である（放射断面）。エビセリウム細胞以外は、放射道管を含め単列で2～20細胞高である（接線断面）。

以上の形質から、マツ科のマツ属の材と同定される。マツ属は、二葉松類と五葉松類に区別することができるが、本試料は、保存が良くないため区別できない。マツ属の樹木には、暖帯の沿岸沿いに見られる二葉松のクロマツ (*P. thunbergii*)、本州の暖帯から温帯にかけて見られる二葉松のアカマツ (*P. densiflora*) あるいは北海道から九州にかけて広く見られる五葉松のヒメコマツ (*P. parviflora*) などがある。樹高は約30m、幹径1m前後の針葉樹である。

スギ *Cryptomeria japonica* (Linn. fil.) D. Don スギ科 図版5a～5c.

仮道管、樹脂細胞および放射柔細胞からなる針葉樹材で、早材部から晩材部への移行は緩やかである（横断面）。分野壁孔は、水平方向に長軸をもった典型的なスギ型で、1分野に2個見られる（放射断面）。放射組織は、柔細胞からなり、単列で2～12細胞高からなる（接線断面）。

以上の形質から、スギ科のスギの材と同定される。スギは東北から九州にかけて温帯から暖帯にかけて分布する常緑針葉樹である。

ヒノキ属 *Chamaecyparis* ヒノキ科 図版6a～6c.

仮道管、樹脂細胞および放射柔細胞からなる針葉樹で、早材部から晩材部への移行は緩やかである（横断面）。分野壁孔は、ヒノキ型で、1分野に1～2個ある（放射断面）。放射組織は、柔細胞からなり、2～9細胞高である（接線断面）。

以上の形質から、ヒノキ科のヒノキ属の材と同定される。ヒノキ属の樹木には、ヒノキ (*C. obtusa*) とサワラ (*C. pisifera*) があり、ヒノキは本州、四国、九州の温帯に分布する樹高40m、幹径2mに達する常緑針葉樹で、サワラは、本州、九州の温帯に分布する樹高30m、幹径1mに達する常緑針葉樹である。

オニグルミ *Juglans ailanthifolia* Carr. クルミ科 図版7a～7c.

大型の管孔がやや径を減しながら単独または放射方向に2～4個複合して散在する散孔材である（横断面）。道管のせん孔は単一である（放射断面）。放射組織は、異性に近い同性で、1～5細胞幅、3～49細胞高である（接線断面）。

以上の形質から、クルミ科のオニグルミの材と同定される。オニグルミは全国の温帯から暖帯にかけて分布する樹高25m、幹径1mに達する落葉広葉樹である。

アサダ *Ostrya japonica* Sarg. カバノキ科 図版8a～8c.

丸みを帯びた小～中型の道管が放射方向に2～5個複合した散孔材である。木部柔組織は1細胞幅で接線状に配列している（横断面）。道管の内壁には微細ならせん肥厚が見られ、道管のせん孔は単一である（放射断面）。放射組織は、ほぼ同性1～3細胞幅、3～39細胞高である（接線断面）。

以上の形質から、カバノキ科のアサダの材と同定される。アサダは全国の温暖に分布する標高15mに達する落葉広葉樹である。

クリ *Castanea crenata* Sieb. et Zucc. ブナ科 図版9a~9c.

年輪のはじめに大型の管孔が1~3列並び、そこから除々に径を減じた小管孔が火炎状に配列する環孔材である。大管孔の内腔にチロースの見られるものもある。また、軸柔組織は短接線状に配列する(横断面)。道管のせん孔は単一である(放射断面)。放射組織は、単列同性であり、時に2細胞幅で、2~15細胞高である(接線断面)。

以上の形質からブナ科のクリの材と同定される。クリは全国の暖帯から温帯にかけて分布する樹高20m、幹径1mに達する落葉広葉樹である。

コナラ属クスギ節 *Quercus* sect. *Aegilops* ブナ科 図版10a~10c.

年輪のはじめに大型の管孔が1~2列並び、そこからやや急に径を減じたやや厚壁の丸い小管孔が放射方向に配列する環孔材である(横断面)。道管のせん孔は単一で、時としてチロースが見られる(放射断面)。放射組織は、単列同性のものと集合放射組織のものがある(接線断面)。

以上の形質から、ブナ科のコナラ属クスギ節の材と同定される。クスギ節の樹木には関東地方に普通に見られるクスギ(*Quercus acutissima*)と、東海・北陸以西に主として分布するアベマキ(*Q. variabilis*)がある。いずれの樹木も樹高15m、幹径60cmに達する落葉広葉樹である。

コナラ属コナラ節 *Quercus* sect. *Prinus* ブナ科 図版11a~11c.

年輪のはじめに大型の管孔が1列に並び、そこから径を減じた小管孔がやや火炎状に配列する環孔材である(横断面)。大管孔の内腔には、チロースがあり著しい。また、木部柔組織は短接線状に配列する。道管のせん孔は単一である(放射断面)。放射組織は、単列同性のものと集合放射組織からなる(接線断面)。

以上の形質から、ブナ科のコナラ属コナラ節の材と同定される。コナラ節の樹木にはコナラ(*Q. serrata*)やミズナラ(*Q. mongolica* var. *grosserrata*)、カシワ(*Q. dentata*)、ナラガシワ(*Q. aliena*)などがある。いずれの樹木も温帯から暖帯にかけて広く分布する樹高20m、幹径1mを超える落葉広葉樹である。

コナラ属コナラ亜属 *Quercus* subgen. *Lepidobalanus* ブナ科 図版なし.

年輪のはじめに大型の管孔が並ぶ環孔材である。道管のせん孔は単一である。放射組織は、単列同性のものと集合放射組織からなる。

以上の形質から、コナラ属コナラ亜属の材と同定される。コナラ亜属は、コナラ節(コナラ属コナラ節の記載参照)とクスギ節(コナラ属クスギ節の記載参照)からなり、晩材部道管の配列により識別されるが、本標本は、材組織の保存が悪いため、区別できない。

コナラ属アカガシ亜属 *Quercus* subgen. *Cyclobalanopsis* ブナ科 図版12a~12c.

大型の管孔が放射方向に配列する放射孔材である(横断面)。道管のせん孔は単一で、チロースが見られる(放射断面または接線断面)。放射組織は、単列同性のものと集合放射組織のものがある(接線断面)。

以上の形質から、ブナ科コナラ属のアカガシ亜属の材と同定される。アカガシ亜属の樹木には関東に分布するアカガシ(*Q. acuta*)やアラカシ(*Q. glauca*)やシラカシ(*Q. myrsinaefolia*)をはじめ8種類ほどある。アカガシ亜属の樹木は、樹高20m、幹径1mに達する常緑広葉樹で、日本の暖帯の照葉樹林の主要な構成要素である。

ムクノキ *Aphananthe aspera* (Thunb.) Planch. ニレ科 図版13a~13c.

厚壁で中型の管孔が単独あるいは放射方向に2~5個複合して散在する散孔材である。木部柔組織は、晩材部で達合異状ないし帯状である(横断面)。道管のせん孔は単一である(放射断面)。放射組織は、異性1~3細胞幅、2~34細胞高である(接線断面)。

以上の形質から、ニレ科のムクノキの材と同定される。ムクノキは、関東地方以西の暖帯から亜熱帯にかけて分布する樹高20m、幹径1mに達する落葉広葉樹である。

エノキ属 *Celtis* ニレ科 図版14a~14c.

年輪のはじめに大型の管孔が1~2列並び、そこから径を減じた小管孔が晩材部では多数集合して斜め方向に配列する環孔材である(横断面)。道管のせん孔は単一で、小管孔の内壁にはらせん肥厚が見られる(放射断面)。放射組織は、異性1~8細胞幅、3~55細胞高で、鞘細胞をもつ(接線断面)。

以上の形質から、ニレ科のエノキ属の材と同定される。エノキ属の樹木には、本州以南の暖帯から亜熱帯に分布するエノキ(*C. sinensis*)や、温帯に分布するエゾエノキ(*C. jessoensis*)などがある。エノキは樹高20m、幹径1mに達する落葉広葉樹である。

ケヤキ *Zelkova serrata* (Thunb.) Makino ニレ科 図版15a~15c.

年輪のはじめに大型の管孔が単独ないし2列に並び、晩材部では小管孔が2~8程度集合して接線方向ないしはやや斜めに配列する環孔材である(横断面)。道管のせん孔は単一で、小管孔の内壁にはらせん肥厚が明瞭に認められる(放射断面)。放射組織は、異性1~7細胞幅、2~52細胞高から構成されている(接線断面)。

以上の形質から、ニレ科のケヤキと同定される。ケヤキは暖帯から温帯にかけて分布する樹高35m、幹径2mに達する落葉広葉樹である。

ヤマグワ *Morus bombycis* Koidz. クワ科 図版16a~16c.

年輪のはじめに大型の管孔が数列並び、そこから径を減じた小管孔が晩材部で接線方向に数個複合して分布する環孔材で、木部柔組織は周囲状である(横断面)。道管のせん孔は単一で、小管孔の内壁にはらせん肥厚が見られる(放射断面)。放射組織は、異性1~5細胞幅、2~56細胞高である(接線断面)。

以上の形質から、クワ科のヤマグワの材と同定される。ヤマグワは、温帯から亜熱帯にかけ広く分布する樹高12m、幹径60cmの落葉広葉樹である。

クロモジ属 *Lindera* クスノキ科 図版17a~17c.

厚壁で中型の管孔が単独または2~4個放射方向に複合して散在する散孔材である(横断面)。道管のせん孔は単一あるいは14本程度の横棒からなる階段状である(放射断面)。放射組織は、異性1~2細胞幅、3~42細胞高である(接線断面)。

以上の形質から、クスノキ科のクロモジ属の材と同定される。クロモジ属の樹木には、樹高6m程度のクロモジ(*L. umbellata*)やシロモジ(*L. triloba*)など本州以南の暖帯から温帯にかけて8種類ほどある落葉広葉樹である。

マタタビ属 *Actinidia* マタタビ科 図版37a~37c.

年輪の始めに大型の管孔が2列並び、晩材部では角張った小型の管孔が散在する環孔材である(横断面)。道管のせん孔は単一である(放射断面)。放射組織は、異性1~5細胞高、2~27細胞幅で、多列部の端部あるいは中間部では直立細胞である(接線断面)。

以上の形質から、マタタビ科のマタタビ属の材と同定される。マタタビ属の樹木は、木本性のつる植物であり、高さ30m、幹径10~15cmに達するサルナシ(*A. arguta*)や小型のマタタビ(*A. polygama*)などがある。いずれも全国の暖帯から温帯にかけて分布する。

サクラ属 *Prunus* バラ科 図版18a~18c.

年輪のはじめにやや小型の管孔が並び、数個放射方向に複合して散在する散孔材である。道管は外側に向かって減少する傾向がみられる(横断面)。道管のせん孔は単一で、その内壁にはらせん肥厚がある。道管の内部にはガム状物質が詰まっている(放射断面)。放射組織は、同性に近い異性で、1~5細胞幅、2~37細胞高である(接線断面)。

以上の形質から、バラ科のサクラ属の材と同定される。サクラ属の樹木には、暖帯から亜熱帯にかけて分布する樹高25mに達するヤマザクラ(*P. jamasakura*)など数種類ある。

ネムノキ *Albizia julibrissin* Durazz. マメ科 図版19a~19c.

年輪のはじめに丸い大型の管孔が3列並び、そこから径を減じた管孔が単独または数個複合して散在する環孔材である。また、木部柔組織は周囲状である(横断面)。道管のせん孔は単一である(放射断面)。放射組織は、同性で1~4細胞幅、3~19細胞高である(接線断面)。

以上の形質から、マメ科のネムノキの材と同定される。ネムノキは、暖帯から熱帯にかけて分布する樹高10mに達する落葉広葉樹である。

フジ *Wisteria floribunda* (Willd.) DC. マメ科 図版20a~20c.

年輪のはじめに大型の管孔が1列並び、晩材部で小型の管孔が塊状に集合する。また木部柔組織は周囲状で(横断面)、木部柔組織は、接線断面において層階状を呈する。道管のせん孔は単一で、内壁にはらせん肥厚がある(放射断面)。放射組織は、異性1~4細胞幅、3~28細胞高で、不完全な周囲状を示す。

以上の形質から、マメ科のフジの材と同定される。フジは、本州以南の暖帯から温帯にかけて分布する落葉の藤本である。

イヌエンジュ *Maackia amurensis* Rupr. et Maxim. var. *buergeri* (Maxim.) C.K. Schn. マメ科 図版21a~21c.

年輪のはじめに大管孔が並び、そこから径を減じた管孔が2個程度複合して散在する環孔材である。また、木部柔組織は周囲状で(横断面)、接線断面においては層階状である。放射組織は、異性1~7細胞幅、2~54細胞高である(接線断面)。

以上の形質から、マメ科のイヌエンジュの材と同定される。イヌエンジュは、北海道から本州中部の温帯に分布し、その変種であるハネミイヌエンジュは本州中部から九州の暖帯に分布する。イヌエンジュは、樹高15m、幹径60cmに達する落葉広葉樹である。

自然科学分析

アカメガシワ *Mallotus japonicus* (Thunb.) Muell. -Arg. トウダイグサ科 図版22a~22c.

年輪の始めにやや大きく厚壁の管孔があり、そこから順次径を減じ、晩材部では比較的厚壁の小管孔が2~6個放射方向に複合して散在する環孔材である(横断面)。道管のせん孔は単一である(放射断面)。放射組織は、異性で単列まれに2細胞幅、2~20細胞高である(接線断面)。

以上の形質から、トウダイグサ科のアカメガシワの材と同定される。アカメガシワは東北地方以南の暖帯の陽光地に普通にみられる樹高10m、幹径30cm程度になる落葉広葉樹である。

コクサギ *Orixa japonica* Thunb. ミカン科 図版23a~23c.

小型の管孔が集合して雲紋状を呈する散孔材である(横断面)。道管のせん孔は単一で、かすかにらせん肥厚が認められる(放射断面)。放射組織は、異性1~2細胞幅、3~30細胞高である(接線断面)。

以上の形質から、ミカン科のコクサギの材と同定される。コクサギは本州以南の暖帯から温帯にかけて分布する落葉広葉樹(低木)である。

スルズ *Rhus javanica* Linn. ウルシ科 図版24a~24c.

年輪のはじめに大型の管孔が1~2程度並び、晩材部では小型の管孔が単独または2~4個程度放射方向あるいは塊状に散在する環孔材である(横断面)。道管のせん孔は単一で、内壁にはらせん肥厚が見られる(放射断面)。放射組織は、異性1~4細胞幅、3~28細胞高である(接線断面)。

以上の形質から、ウルシ科のスルズの材と同定される。スルズは、樹高7mに達する温帯から亜熱帯にかけて分布する落葉広葉樹である。

カエデ属 *Acer* カエデ科 図版25a~25c.

中型の管孔が単独あるいは放射方向に2~5複合して散在する散孔材で、木部柔細胞は帯状または雲紋状を呈する(横断面)。道管のせん孔は単一で、内壁にはらせん肥厚が認められる(放射断面)。放射組織は、同性1~6細胞幅、1~37細胞高である(接線断面)。

以上の形質から、カエデ科のカエデ属の材と同定される。カエデ属の樹木は、全国の暖帯から亜寒帯まで広く、その種類も20種以上と多い。

ムクロジ *Sapindus mukorossi* Gaertn. ムクロジ科 図版26a~26c.

年輪のはじめに大型の管孔が並び、晩材部には1~2個複合した小管孔が散在する環孔材である(横断面)。道管のせん孔は単一、小管孔の内壁にはらせん肥厚がある(放射断面)。木部柔細胞は連合異状に分布し、放射組織は、同性1~4細胞幅、3~55細胞高である(接線断面)。

以上の形質から、ムクロジ科のムクロジの材と同定される。ムクロジは関東地方以西の暖帯から亜熱帯に分布する樹高15m、幹径40cm程度になる落葉広葉樹である。

トチノキ *Aesculus turbinata* Blume. トチノキ科 図版27a~27c.

小型の管孔が単独または2~4個程度放射方向に複合し、やや密に散在する散孔材である(横断面)。道管のせん孔は、単一である。内壁にはらせん肥厚が見られる(放射断面)。放射組織は、同性単列まれに1~2細胞幅で、3~21細胞高である。また、この樹種を最も特徴づけるリッブルマーク(規則的な層状配列)

が見られる（接線断面）。

以上の形質から、トチノキ科のトチノキと同定される。トチノキの樹木は、樹高30m、幹径2mに達する北海道から九州まで分布する落葉広葉樹である。

ミツバウツギ *Staphylea bumalda* DC. ミツバウツギ科 図版28a~28c.

薄壁で小型の管孔が単独あるいは2~4個放射方向に複合して散在する散孔材である（横断面）。道管のせん孔は、32本程度の横棒からなる階段状である（放射断面）。放射組織は、異性1~4細胞幅、3~45細胞高である（接線断面）。

以上の形質から、ミツバウツギ科のミツバウツギの材と同定される。ミツバウツギは、全国の温帯に分布する樹高3m程度の落葉広葉樹である。

ケンボナシ属 *Hovenia* クロウメドキ科 図版29a~29c.

年輪のはじめに大型の管孔が1列程度並び、晩材部では小型の管孔が塊状あるいは放射方向に複合して散在する環孔材である（横断面）。道管のせん孔は、単一である（放射断面）。放射組織は、異性1~3細胞幅、3~56細胞高である（接線断面）。

以上の形質から、クロウメドキ科のケンボナシ属の材と同定される。ケンボナシ属の樹木には、ケンボナシ (*H. dulcis*) やケンボナシ (*H. tomentella*) があり、いずれも樹高25m、幹径1mに達する落葉広葉樹で、ケンボナシが全国の温帯に、ケンボナシが本州西部や四国などに分布する。

ハリギリ *Kalopanax pictus* (Thunb.) Nakai ウコギ科 図版30a~30c.

年輪のはじめに大型の管孔が並び、以後径を減じた管孔が接線方向に帯状に配列する環孔材である（横断面）。道管のせん孔は単一である（放射断面）。放射組織は、異性1~5細胞幅、3~34細胞高である（接線断面）。

以上の形質からウコギ科のハリギリの材と同定される。ハリギリは温帯から暖帯にかけて分布する樹高25m、幹径1mに達する落葉広葉樹である。

エゴノキ属 *Styrax* エゴノキ科 図版31a~31c.

小型の管孔が放射方向に2~5個複合し、晩材部ではやや径を減じて放射方向に2~5個複合して散在する散孔材である（横断面）。道管のせん孔は10本程度の太い横棒からなる階段状である（放射断面）。放射組織は、異性1~3細胞幅、2~40細胞高である。

以上の形質から、エゴノキ科のエゴノキ属の材と同定される。エゴノキ属の樹木は、本州以南の温帯から暖帯に分布するエゴノキ (*S. japonica*) や全国の温帯に分布するハクウンボク (*S. obassia*) あるいは関東以西の温帯に分布するコハクウンボク (*S. shirasawana*) などがある。

トネリコ属 *Fraxinus* モクセイ科 図版32a~32c.

年輪のはじめに大型の管孔が1~3個並び、以後径を減じた管孔が単独で分布する環孔材である。また、木部柔細胞は周囲状もしくは連合異状である（横断面）。道管のせん孔は単一である（放射断面）。放射組織は、同性1~3細胞幅、3~41細胞高である（接線断面）。

自然科学分析

以上の形質から、モクセイ科のトネリコ属の材と同定される。トネリコ属の樹木には、トネリコ (*F. japonica*) やシオジ (*F. spathiana*) あるいはヤチダモ (*F. mandshurica*) などがあり、全国の温帯に分布する。

ムラサキシキブ属 *Callicarpa* クマツヅラ科 図版33a-33c.

やや大型の丸く厚壁の管孔が単独もしくは2-5個複合して散在する散孔材である(横断面)。道管のせん孔は単一である(放射断面)。放射組織は、異性1-3細胞幅、3-53細胞高である(接線断面)。

以上の形質から、クマツヅラ科のムラサキシキブ属の材と同定される。ムラサキシキブ属の樹木には、ムラサキシキブ (*C. japonica*) やヤブムラサキ (*C. mollis*) などがあり、いずれも樹高3m程度の本州、四国、九州に分布する落葉広葉樹である。

ニワトコ *Sambucus sieboldiana* Blume ex. Graebn. スイカズラ科 図版34a-34c.

小型の管孔が年輪のはじめにやや密に並び、以後接線方向に2-3個複合して散在する散孔材である(横断面)。道管のせん孔は単一である(放射断面)。放射組織は、異性1-4細胞幅、4-35細胞高である。

以上の形質から、スイカズラ科のニワトコの材と同定される。ニワトコは樹高5m程度の全国の温帯から暖帯にかけて分布する落葉広葉樹である。

散孔材A 図版35a-35c.

保存が悪く、明瞭ではないが、中型の環孔が単独または放射方向に複合して散在する散孔材である(横断面)。道管のせん孔は単一である(放射断面)。放射組織は、異性単列、28細胞高程度である(接線断面)。

散孔材B 図版36a-36c.

大型の管孔が複合して散在する散孔材である(横断面)。道管のせん孔は単一である(放射断面)。放射組織は、保存が悪いが単列と思われる。

b. 考察

上戸塚正上寺遺跡から出土した層位別に生材樹種をまとめた結果は、表4の通りである。

古墳時代前期-中期の木製品については(2面2号溝、7号溝)、板材2点がいずれもモミ属であり、柄1点がヒノキ属、箸?1点がトネリコ属である。

古墳時代前期-中期と推定される2面の2号溝および7号溝では、合計64点の自然木が出土し、8属2亜属2節8種および2散孔材の22分類群が検出され、針葉樹が5分類群17点、広葉樹が17分類群47点である。また、縄文時代晩期-弥生時代中期と推定される3面河道では、9属2節17種の28分類群が検出され、針葉樹が3分類群5点、広葉樹が25分類群204点である。

各面別で出土自然木の樹種に注目して見ると、2面ではモミ属(17.5%)、コナラ属コナラ節(15.9%)、コナラ属クスギ節(9.5%)、カエデ属(9.5%)、ムクロジ(9.5%)など山地や低山の林内に生える樹木が多く見られる。また、3面ではクリ(21.1%)、コナラ属コナラ節(18.7%)、トチノキ(7.2%)、カエデ属(6.2%)、クロモジ属(5.3%)、エノキ属(4.8%)、ムクノキ(3.4%)、オニグルミ(2.9%)、アサダ(2.9%)、ケヤキ(2.9%)、トネリコ属(2.9%)などで低山の林内や谷筋あるいは川沿いにかけて生える樹木が見られる。なお、発掘時の現地取り上げの3面大型植物化石試料中には、オニグルミ、コナラ、ナラガシワ、トチノキ、

表4. 上戸塚正上寺遺跡出土材のまとめ

分類群	自然木		製品 2面	自然木				合計	
	3面河道 (%)			2面		2面合計 (%)		(%)	(%)
				2号溝	7号溝				
カヤ	1	0.5		1	1	2	3.1	3	1.1
モミ属	2	1.0	2	4	7	11	17.2	15	5.4
カラマツ属	2	1.0						2	0.7
マツ属				1	1	2	3.1	2	0.7
スギ					1	1	1.6	1	0.4
ヒノキ属			1	1		1	1.6	2	0.7
オニグルミ	6	2.9						6	2.2
アサダ	6	2.9						6	2.2
クリ	44	21.1						44	15.9
クスギ節	3	1.4		2	4	6	9.4	9	3.3
コナラ節	39	18.7		6	4	10	15.6	49	17.7
コナラ亜属					1	1	1.6	1	0.4
アカガシ属					1	1	1.6	1	0.4
ムクノキ	7	3.4			2	2	3.1	9	3.3
エノキ属	10	4.8		1	1	2	3.1	12	4.3
ケヤキ	6	2.9			2	2	3.1	8	2.9
ヤマグワ	3	1.4						3	1.1
クロモシ属	11	5.3						11	4.0
マタタビ属					1	1	1.6	1	0.4
サクラ属	5	2.4						5	1.8
ネムノキ	1	0.5						1	0.4
フジ	3	1.4						3	1.1
イヌエンジュ	3	1.4						3	1.1
アカメガシワ	1	0.5						1	0.4
コクサギ	1	0.5		1		1	1.6	2	0.7
ヌルデ				1		1	1.6	1	0.4
カエデ属	13	6.2		2	4	6	9.4	19	6.9
ムクロジ	10	4.8			6	6	9.4	16	5.8
トチノキ	15	7.2						15	5.4
ミツバウツギ	2	1.0						2	0.7
ケンボナシ属	2	1.0						2	0.7
ハリギリ	1	0.5						1	0.4
エゴノキ属	5	2.4						5	1.8
トネリコ属	6	2.9	1	1	2	3	4.7	10	3.6
ムラサキシキブ属					2	2	3.1	2	0.7
ニワトコ	1	0.5			1	1	1.6	2	0.7
散孔材A					1	1	1.6	1	0.4
散孔材B					1	1	1.6	1	0.4
合計	209	100.0	4	21	43	64	100.0	277	100.0

自然科学分析

ムクロジ、エゴノキ、コハクウンボクが多く検出されている（大型植物化石参照）。

上戸坂正上寺の位置する藤岡市に隣接する高崎市の新保遺跡の自然木から推定される植生と比較すると（新保遺跡の弥生時代～古墳時代前期と当遺跡の2面と3面の合計との比較）、分類群の数には違いがあるものの出現する分類群あるいは想定される周辺植生は似ている。しかし、新保遺跡でコナラ属クヌギ節が33.85%、コナラ節が7.82%それぞれ出現するのに対し、上戸坂正上寺遺跡では、コナラ属クヌギ節は3.3%、コナラ節が17.8%と多く出現数は逆転している（鈴木・能城、1988）。これは、新保遺跡の遺記のところで述べられているように、新保遺跡のクヌギ節の高率の出現が程度の低い加工木の混入などの結果であることと関係していると思われる。出土する自然木の量的な評価、すなわち得られた各分類群の数がそのまま周辺植生を表しているかどうかには問題があり、早計とも思われるが、当遺跡周辺にはコナラ節の樹木が多いものと予想される。ただし、流木取り上げ図を見ると、図に示されている巨大な流木がコナラ節であることから、局所的な植生と言うよりも、むしろコナラ節の樹木1個体を反映した結果と解釈した方が現実的なものかもしれない。

古墳時代前期～中期の2面および縄文時代晩期～弥生時代中期の3面のいずれも、アカガシ亜属などで代表されるような照葉樹林要素はほとんど見られず、主に温帯に分布する落葉広葉樹が大半を占めている。こうした状況は、先の新保遺跡の弥生時代～古墳時代前期の自然木の樹種調査と同様のものである（鈴木・能城、1988）。

引用文献

鈴木三男・能城修一（1988）：7 鑑定、分析、(1)新保遺跡出土自然木の樹種とそれによる古植生の復元、群馬県教育委員会・群馬県埋蔵文化財調査事業団「新保遺跡Ⅱ、弥生・古墳時代集落編、一関越自動車道（新潟線）地域埋蔵文化財発掘調査報告書第18集一」、435-453。

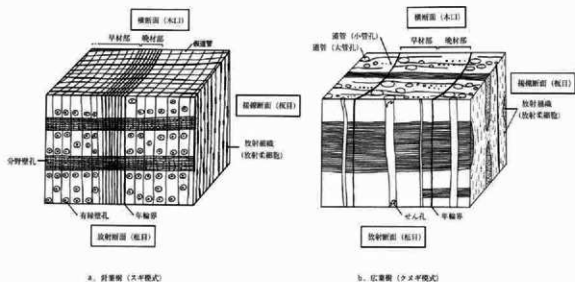
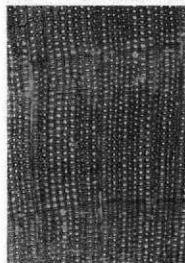


図1. 材組織とその名称

図版 1. 上戸塚正上寺遺跡出土材の顕微鏡写真



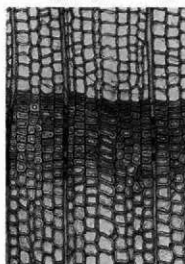
1a. オヤ (横断面) 2号溝A-1 ber:0.2mm



1b. 同 (縦断面) ber:0.2mm



1c. 同 (放射断面) ber:0.1mm



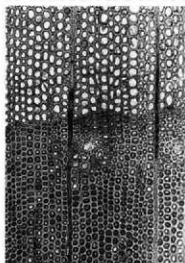
2a. キス属 (横断面) 2号溝10 ber:0.1mm



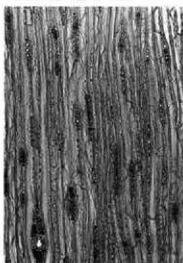
2b. 同 (縦断面) ber:0.2mm



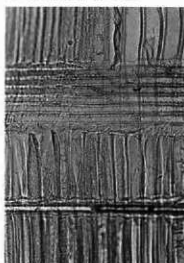
2c. 同 (放射断面) ber:0.2mm



3a. カラマツ属 (横断面) 3号河辺181 ber:0.2mm



3b. 同 (縦断面) ber:0.2mm



3c. 同 (放射断面) ber:0.2mm

図版 2. 上戸塚正上寺遺跡出土材の顕微鏡写真



4a. マツ属 (横断面) 7号溝7 ber:0.2mm



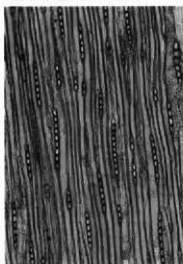
4b. 同 (接線断面) ber:0.1mm



4c. 同 (放射断面) ber:0.1mm



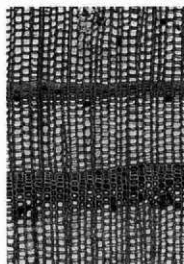
5a. スキ属 (横断面) 7号溝B-2 ber:0.2mm



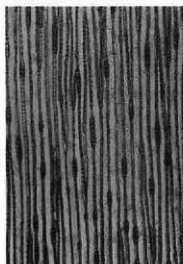
5b. 同 (接線断面) ber:0.1mm



5c. 同 (放射断面) ber:0.2mm



6a. ヒノキ属 (横断面) 2号溝5 ber:0.2mm

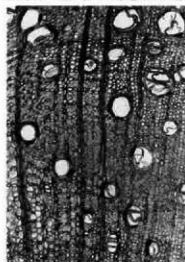


6b. 同 (接線断面) ber:0.05mm



6c. 同 (放射断面) ber:0.2mm

図版 3. 上戸塚正上寺遺跡出土材の顕微鏡写真



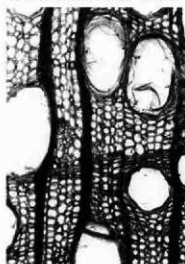
7a. オニグサ (横断面) 3面河道58 ber:0.2mm



7b. 同 (接線断面) ber:0.2mm



7c. 同 (放射断面) ber:0.1mm



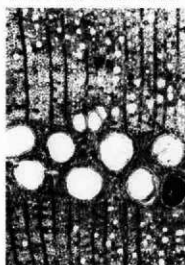
8a. アサゲ (横断面) 3面河道1 ber:0.2mm



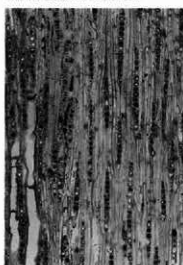
8b. 同 (接線断面) ber:0.2mm



8c. 同 (放射断面) ber:0.2mm



9a. タリ (横断面) 3面河道9 ber:0.2mm



9b. 同 (接線断面) ber:0.2mm



9c. 同 (放射断面) ber:0.2mm

図版 4. 上戸塚正上寺遺跡出土材の顕微鏡写真



10a. ナメギ節 (横断面) 2号溝7 ber: 0.2mm



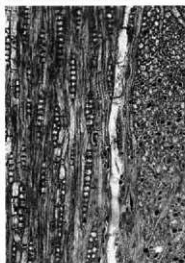
10b. 同 (接線断面) ber: 0.2mm



10c. 同 (放射断面) ber: 0.1mm



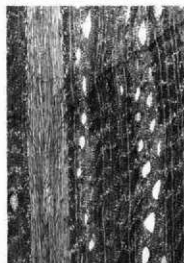
11a. コナラ節 (横断面) 2号溝180 ber: 0.2mm



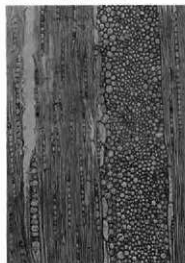
11b. 同 (接線断面) ber: 0.2mm



11c. 同 (放射断面) ber: 0.2mm



12a. 7カギシ草属 (横断面) 1号溝8-1 ber: 0.5mm

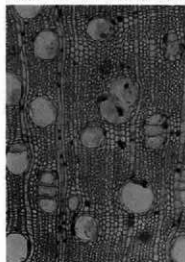


12b. 同 (接線断面) ber: 0.2mm



12c. 同 (放射断面) ber: 0.2mm

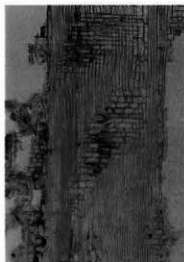
図版5. 上戸塚正上寺遺跡出土材の顕微鏡写真



13a. ムクノキ(横断面)7号溝47 ber:0.2mm



13b. 同(接線断面) ber:0.2mm



13c. 同(放射断面) ber:0.2mm



14a. エノキ属(横断面)7号溝114 ber:0.2mm



14b. 同(接線断面) ber:0.2mm



14c. 同(放射断面) ber:0.2mm



15a. ササ(横断面)7号溝104 ber:0.2mm

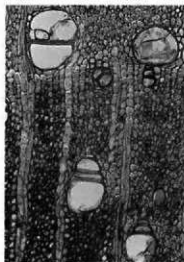


15b. 同(接線断面) ber:0.2mm



15c. 同(放射断面) ber:0.2mm

図版 6. 上戸塚正上寺遺跡出土材の顕微鏡写真



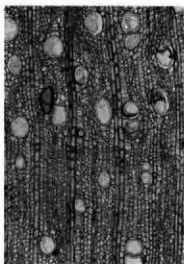
15a. ヤマガツ (横断面) 3面河造97 ber:0.2mm



15b. 同 (接線断面) ber:0.2mm



15c. 同 (放射断面) ber:0.1mm



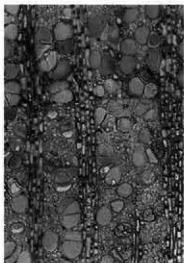
17a. タロモグス (横断面) 3面河造8 ber:0.2mm



17b. 同 (接線断面) ber:0.2mm



17c. 同 (放射断面) ber:0.2mm



18a. サツラギ (横断面) 3面河造83 ber:0.2mm

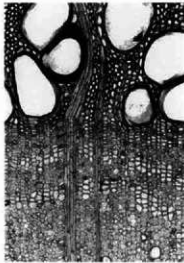


18b. 同 (接線断面) ber:0.2mm



18c. 同 (放射断面) ber:0.2mm

図版 7. 上戸塚正上寺遺跡出土材の顕微鏡写真



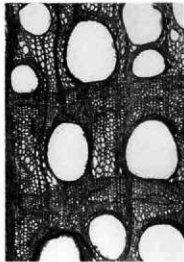
18a. キムノキ (横断面) 3面河道118 ber: 0.2mm



18b. 同 (接線断面) ber: 0.2mm



18c. 同 (放射断面) ber: 0.1mm



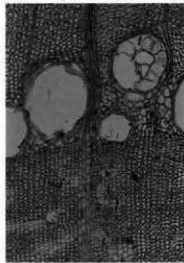
20a. フジ (横断面) 3面河道105 ber: 0.2mm



20b. 同 (接線断面) ber: 0.2mm



20c. 同 (放射断面) ber: 0.2mm



21a. イヌエンジュ (横断面) 3面河道127 ber: 0.2mm



21b. 同 (接線断面) ber: 0.2mm

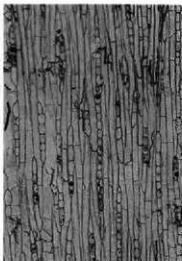


21c. 同 (放射断面) ber: 0.2mm

図版 8. 上戸塚正上寺遺跡出土材の顕微鏡写真



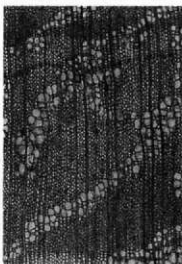
21a. アカメギシワ (横断面) 3面河原田3 her:0.2m



22b. 同 (接線断面) her:0.2mm



23c. 同 (放射断面) her:0.1m



21b. コクヤギ (横断面) 2号溝A-3 her:0.2m



22b. 同 (接線断面) her:0.2mm



23c. 同 (放射断面) her:0.2mm



24a. ムルザ (横断面) 2号溝A-4 her:0.2m



24b. 同 (接線断面) her:0.2mm



24c. 同 (放射断面) her:0.2mm

図版9. 上戸塚正上寺遺跡出土材の顕微鏡写真



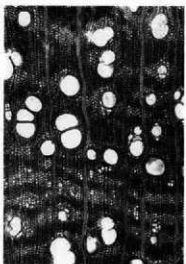
25a. キエヌ属 (横断面) 7号溝100 ber:0.2mm



25b. 同 (接線断面) ber:0.2mm



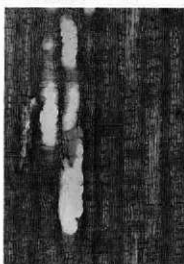
25c. 同 (放射断面) ber:0.2mm



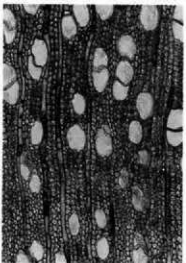
26a. ムクロジ (横断面) 7号溝118 ber:0.5mm



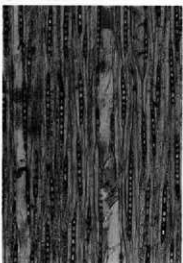
26b. 同 (接線断面) ber:0.5mm



26c. 同 (放射断面) ber:0.2mm



27a. トナノキ (横断面) 3号溝19 ber:0.2mm



27b. 同 (接線断面) ber:0.2mm



27c. 同 (放射断面) ber:0.2mm

図版10. 上戸塚正上寺遺跡出土材の顕微鏡写真



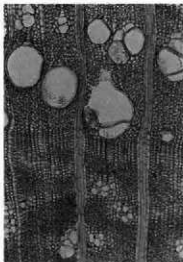
26a. ミヅハヤシ属 (横断面) 3面河道170 ber:0.2mm



26b. 同 (接線断面) ber:0.2mm



26c. 同 (放射断面) ber:0.2mm



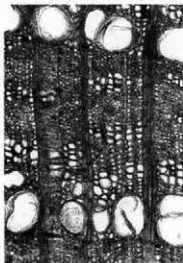
26a. サンボナシ属 (横断面) 3面河道135 ber:0.2mm



26b. 同 (接線断面) ber:0.2mm



26c. 同 (放射断面) ber:0.2mm



26a. ハリギリ属 (横断面) 3面河道100 ber:0.2mm



26b. 同 (接線断面) ber:0.2mm



26c. 同 (放射断面) ber:0.2mm

図版11. 上戸塚正上寺遺跡出土材の顕微鏡写真



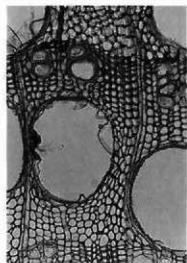
30a. エゴノ科属 (横断面) 3号遺跡C-30 ber:0.2mm



31b. 同 (接線断面) ber:0.2mm



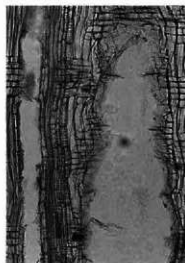
31c. 同 (放射断面) ber:0.2mm



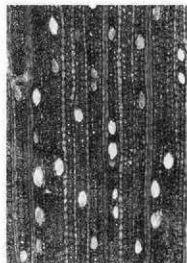
32a. フネリコ属 (横断面) 7号遺跡132 ber:0.2mm



32b. 同 (接線断面) ber:0.2mm



32c. 同 (放射断面) ber:0.2mm



33a. ムライカシキヤ属 (横断面) 7号遺跡3-8 ber:0.2mm

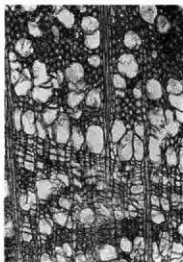


33b. 同 (接線断面) ber:0.2mm



33c. 同 (放射断面) ber:0.2mm

図版12. 上戸塚正上寺遺跡出土材の顕微鏡写真



34a. ニワトコ (横断面) 3番河造76 ber:0.2mm



34b. 同 (接線断面) ber:0.2mm



34c. 同 (放射断面) ber:0.1mm



35a. 敷孔材A (横断面) 7号溝118 ber:0.2mm



35b. 同 (接線断面) ber:0.2mm



35c. 同 (放射断面) ber:0.2mm



36a. 敷孔材B (横断面) 7号溝109 ber:0.2mm

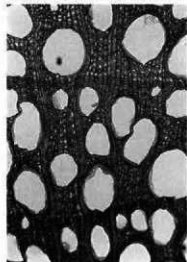


36b. 同 (接線断面) ber:0.2mm



36c. 同 (放射断面) ber:0.2mm

図版13. 上戸塚正上寺遺跡出土材の顕微鏡写真



37a. マナタビ属 (横断面) 7号溝35 ber: 0.2m



37b. 同 (縦線断面) ber: 0.1m



37c. 同 (放射断面) ber: 0.2m

写 真 图 版



遷都全景（北より、空中写真。）

図版 2



道跡全景 (上空より、空中写真。)



1 遺跡遠景 (中川下流部方向の北より。)



2 遺跡全景 (中川上流部方向の南より、空中写真。)

図版 4



1 1区1面の遺構確認作業（北より。）



2 1区1面の検出作業（北より。）



1 1区3面検出作業 (北より。)



5 1区上層部基本土層 (西より。)



2 1区2面7号溝検出作業 (南より。)



6 3区ローム台地基本土層 (東より。)



3 3区柱穴群検出作業 (南より。)



7 4区ローム台地基本土層 (東より。)



4 4区遺構検出作業 (南より。)



8 6区低地部基本土層 (南より。)



1 1区3面旧河道全景（上空より。）



2 1区3面旧河道自然木出土状態（北より。）



1 1区3面旧河道自然木出土状態(南より。)



2 旧河道北壁土層断面(南より。)



3 旧河道東壁土層断面(西より。)



4 3区15号土坑(北より。)



5 5区1号土坑(北より。)

図版 8



1 3区1号住居跡(北より。)



2 3区2号住居跡(西より。)



1 3区北半と4・5区全景(上空より。)



2 4区1号周溝墓(西より。)



1 2号周溝墓 (南西より)



2 1号周溝墓遺物出土状態 (東より)



3 2号周溝墓遺物出土状態 (南より)



4 1号周溝墓土層断面 (西より)



5 2号周溝墓土層断面 (西より)



1 3区1号墳（崩石崩落状態、南東より。）



2 3区1号墳（中央右に墳丘の痕跡が見える。北東より。）



1 3区2面1～7号溝 (上空より。)



2 3区2面1号溝 (南西より。)



1 1区2面2-4号溝 (西より)



2 1区2面2-4号溝東半土層断面 (東より)



3 1区2面2-4号溝西端土層断面 (東より)



4 1区2面2号溝遺物出土状態 (東より)



5 1区2面2号溝遺物出土状態 (南より)



1 1区2面7号溝 (西より。)



2 1区2面5・6号溝 (東より。)



3 1区2面7号溝火鏝白出土状態 (南より。)



4 1区2面7号溝遺物出土状態 (南より。)



5 1区2面7号溝遺物出土状態 (南西より。)



1 2区1-10号溝 (北より。)



2 2区1・2号溝 (南より。)



3 2区3-10号溝土層断面 (南より。)



4 2区3・4号溝掘削痕 (北東より。)



5 2区7号溝遺物出土状態 (南東より。)



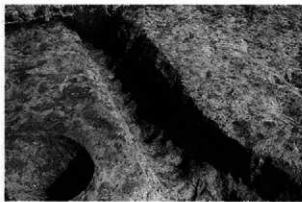
1 4区2～5号溝 (東より。)



2 4区5・6号溝 (南東より。)



3 4区7・8号溝 (東より。)



4 4区4号溝掘削痕 (西より。)



5 4区3・4号溝5号土坑土層断面 (東より。)



1 2区1号土坑(南より。)



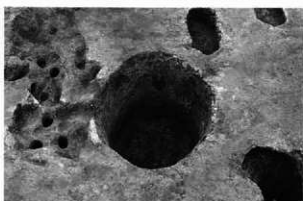
5 4区1号土坑(北より。)



2 2区1号土坑土層断面(南東より。)



6 4区1号土坑土層断面(南より。)



3 3区16号土坑(南より。)



7 4区2~4号土坑(南より。)



4 3区17・18号土坑(北より。)



8 4区5号土坑(北より。)



1 1区1面北半As-B軽石下水田面（北より）



2 1区1面北半低湿面（南より）



3 1区1面南半微高燥面（南より）



4 1区1面低湿面の凹凸（東より）



5 5区As-B軽石下水田面（北より）



1 3区3・4号溝 (東より。)



2 3区5号溝 (西より。)



3 3区6号溝 (西より。)



4 3区7～9号溝 (北西より。)



5 3区3号溝土層断面 (東より。)



1 1区1号掘立柱建物跡(西より。)



2 3区柱穴群(上空より。)



1 D-26グリッド周辺の柱穴群 (南より。)



5 ぐり石のある柱穴 (東より。)



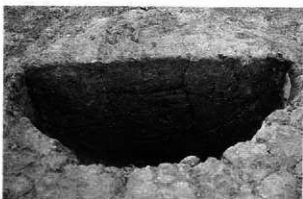
2 E-27グリッド周辺の柱穴群 (南より。)



6 ぐり石のある柱穴 (東より。)



3 方形の柱穴 (北より。)



7 柱穴土層断面 (東より。)



4 円形の柱穴 (東より。)



8 柱穴土層断面 (東より。)



1 3区1号溝 (南より。)



2 3区2号溝 (東より。)



3 3区2号溝土層断面
(東より。)



1 3区1号土坑 (南より。)



5 3区5号土坑 (東より。)



2 3区2号土坑 (南より。)



6 3区6号土坑 (東より。)



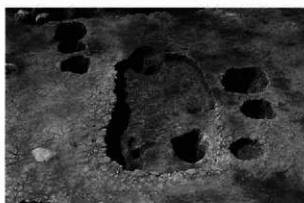
3 3区3号土坑 (東より。)



7 3区7号土坑 (南より。)



4 3区4号土坑 (東より。)



8 3区8号土坑 (東より。)

図版24



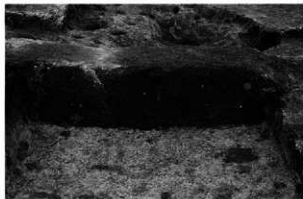
1 3区9号土坑 (南より。)



5 3区11号土坑 (東より。)



2 3区9号土坑土層断面 (南より。)



6 3区11号土坑土層断面 (西より。)



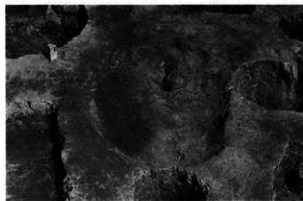
3 3区10号土坑 (南より。)



7 3区12号土坑 (東より。)



4 3区10号土坑土層断面 (南より。)



8 3区13号土坑 (南より。)



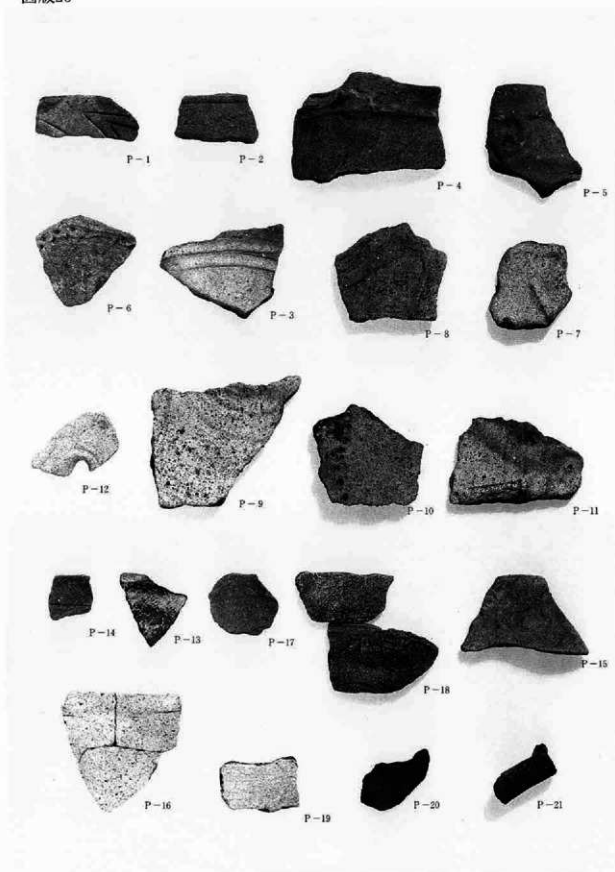
1 3区耕作痕 (南より。)



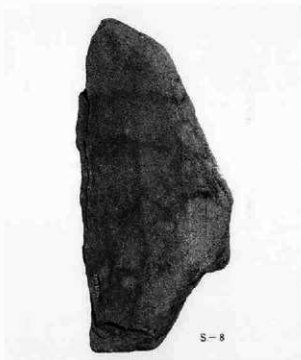
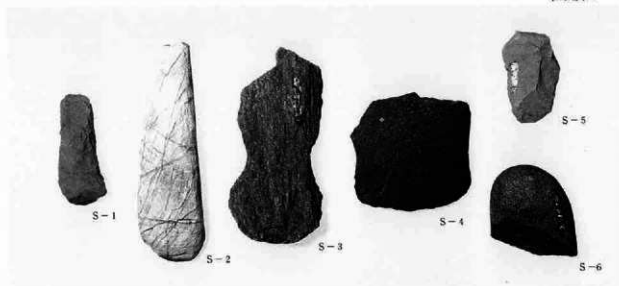
2 4区耕作痕 (南より。)



3 4区耕作痕 (東より。)

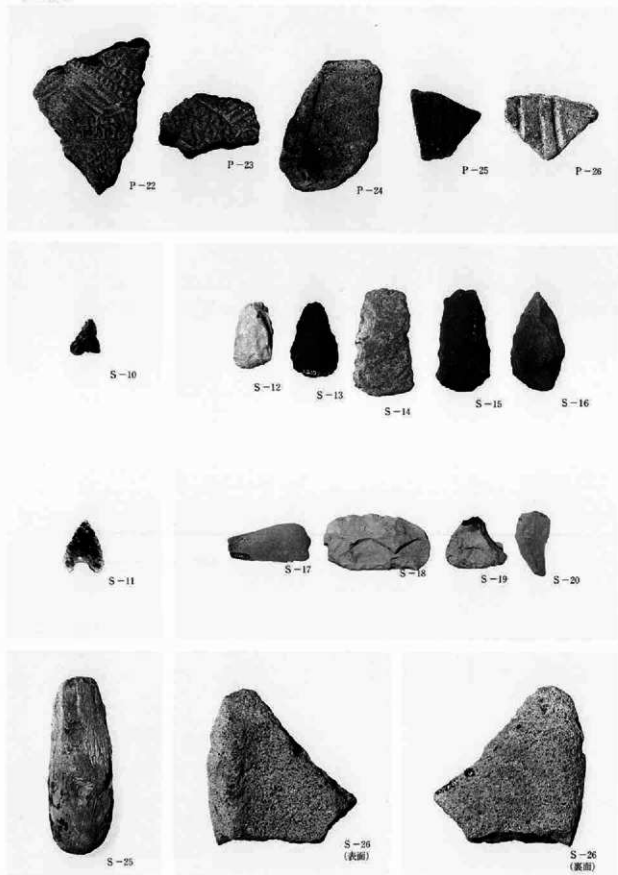


1. 1区3面旧河道出土遺物(1)

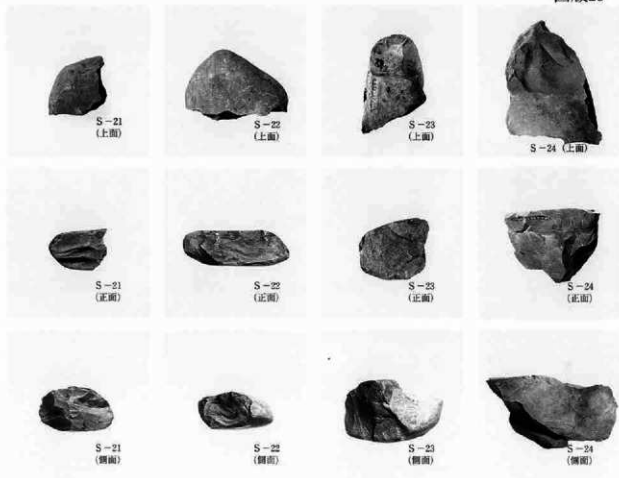


1 1区3 前田河道出土遺物2)

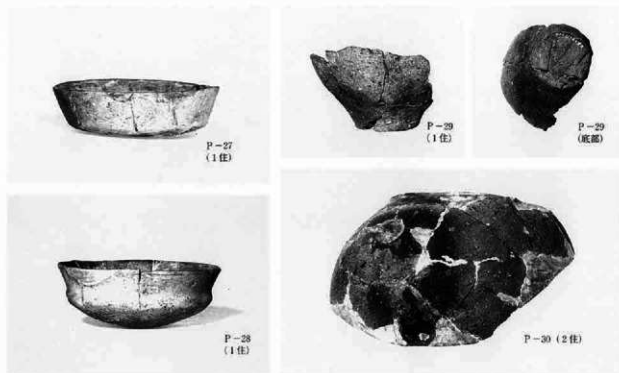
図版28



1 縄文時代のグリット出土遺物(1)



1 縄文時代のグリット出土遺物2)



2 3区1・2号住居跡出土遺物



1 4区2号周濬墓出土遗物



2 4区1号周濬墓出土遗物(1)



1 4区1・2号周溝墓の二重口鉢壺



P-68



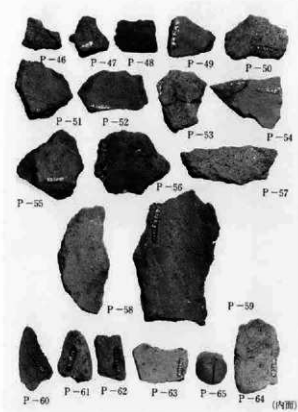
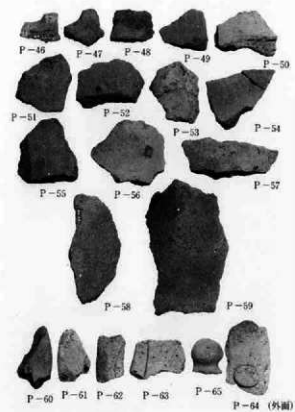
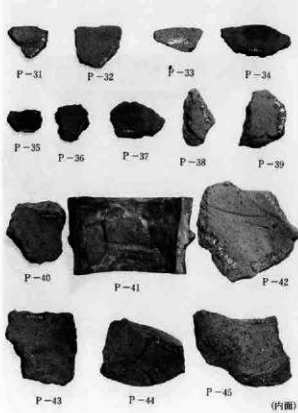
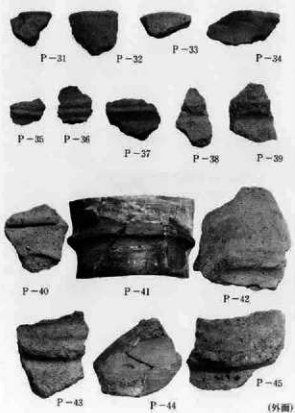
P-69



P-70

2 4区1号周溝墓出土遺物(2)

图版32





1 1区2面1~3・5号溝および古墳時代のグリット出土遺物

图版34



1 1区2面・2区7号溝出土遺物1)



P-80



P-90



P-91



P-92



P-93



P-94



P-95



P-96



P-97



P-98



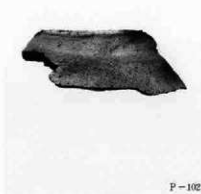
P-99



P-100



P-101



P-102



P-103



P-104



P-105



P-106



P-107



P-108



P-109



P-110



P-111



P-112



P-113

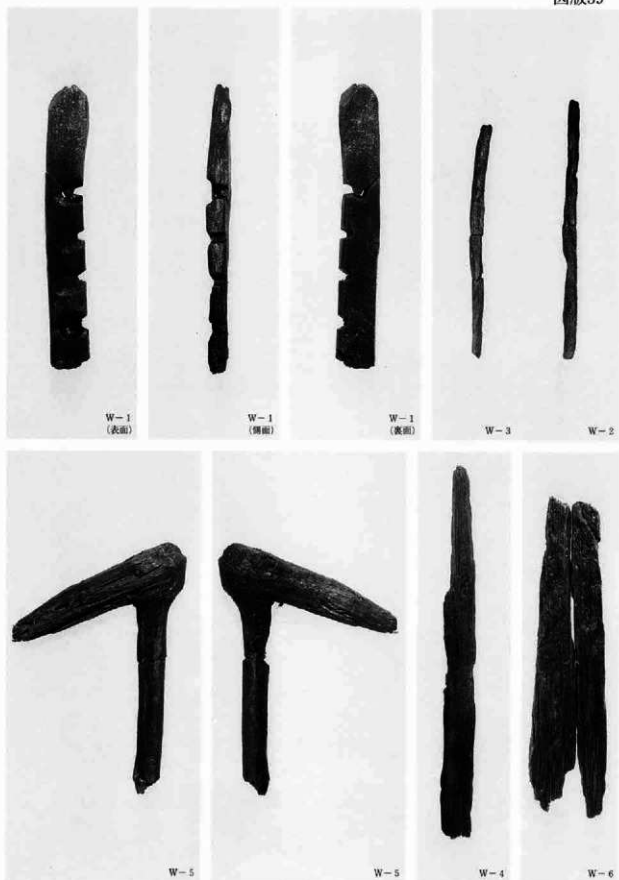


P-114

图版38



1 1区2面・2区7号溝出土遺物5)



1 1区2面2・7号溝出土遺物

図版40



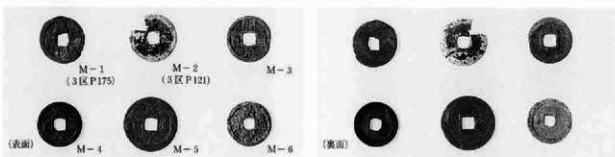
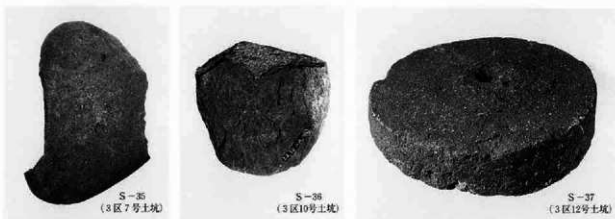
1 平安時代の出土遺物



2 中・近世の出土遺物(1)



1 中・近世の出土遺物(2)



2 中・近世の出土遺物(3)

報告書抄録記載様式(案)

フリガナ	カミトウキョウジョウジヤクシ
書名	上戸塚正上寺遺跡
副書名	一級河川中川改修工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
巻次	
シリーズ名	群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告書
シリーズ番号	第149集
編著者名	下城 正
編集機関	群馬県埋蔵文化財調査事業団
編集機関所在地	〒377 群馬県勢多郡北橘村大字下箱田784-2
発行年	西暦 1992年11月30日

フリガナ 所収遺跡名	フリガナ 所在地	コード		北緯 ° ° °	東緯 ° ° °	調査機関	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
カミトウキョウジョウジヤクシ 上戸塚正上寺	群馬県勢多郡北橘村大字上戸塚 字正上寺	10209		36°14'52"	139°05'42"	19920106- 19920630	2200	河川改修工事

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項	
上戸塚正上寺	住居	古墳時代	竪穴住居	2	土師器	多量の土器類出土
	周溝墓	古墳時代	周溝墓	2	底部穿孔二重口緑釉	
	古墳	古墳時代	円墳	1	埴輪片	
	溝	古墳時代	溝	20	土師器 火鏝板	
		平安時代		7	灰釉陶器	
		中世		2		
	掘立柱建物	中世	掘立柱建物		陶磁器 銭貨	
生産址	平安時代	水田址			縄文時代の河道より 多量の自然木と種子 類出土	

群馬県埋蔵文化財調査事業団
発掘調査報告第149集

上戸塚正上寺遺跡

一級河川中川小泉橋河川改修工事
に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

平成5年3月18日 印刷

平成5年3月25日 発行

編集／財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団

〒377 勢多郡北橋村大字下館田784-2

電話(0279)52-2511(代表)

発行／群馬県考古資料普及会

〒377 勢多郡北橋村大字下館田784-2

電話(0279)52-2511(代表)

印刷／上毛新聞社出版局